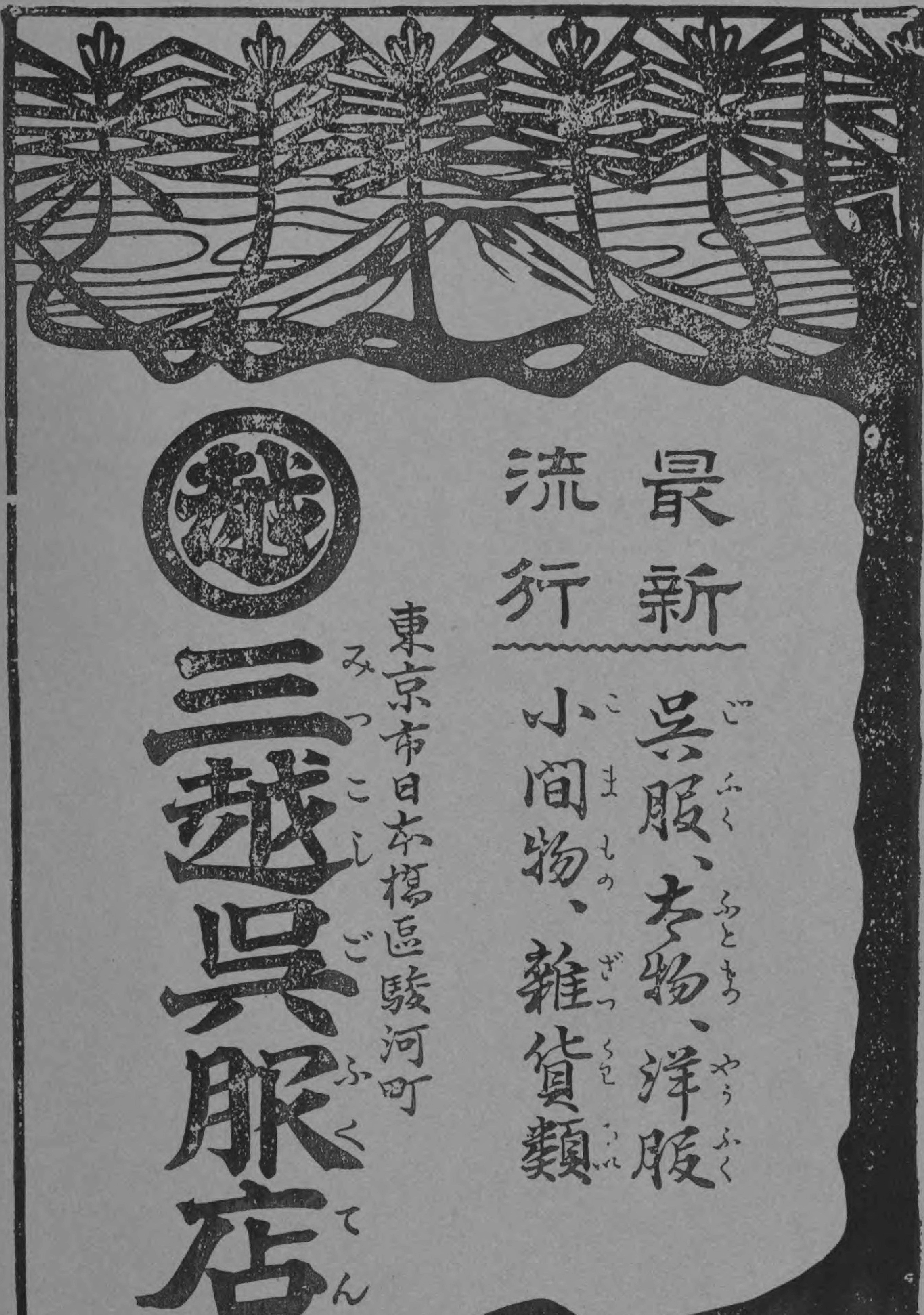
女

第拾七年第貳號




最新流行
呉服、太物、洋服
小間物、雑貨類
東京市日本橋區駿河町
三越呉服店

女鑑

第十七年第二號目次



北白川宮

武子女王殿下



擴子女王殿下



吉井伯の家庭



伯爵　吉井幸藏君

令夫人　靜子君

上杉伯の令孃

上より 上杉大子君 同久子君 同直子君



松平子爵の家庭



松平忠威君の令息女
右ヨリ 政子君　千枝子君　忠諒君　裕香子君　知雅子君

閨秀畫家と作品



野口小蘋女史





同令嬢小蕙女史



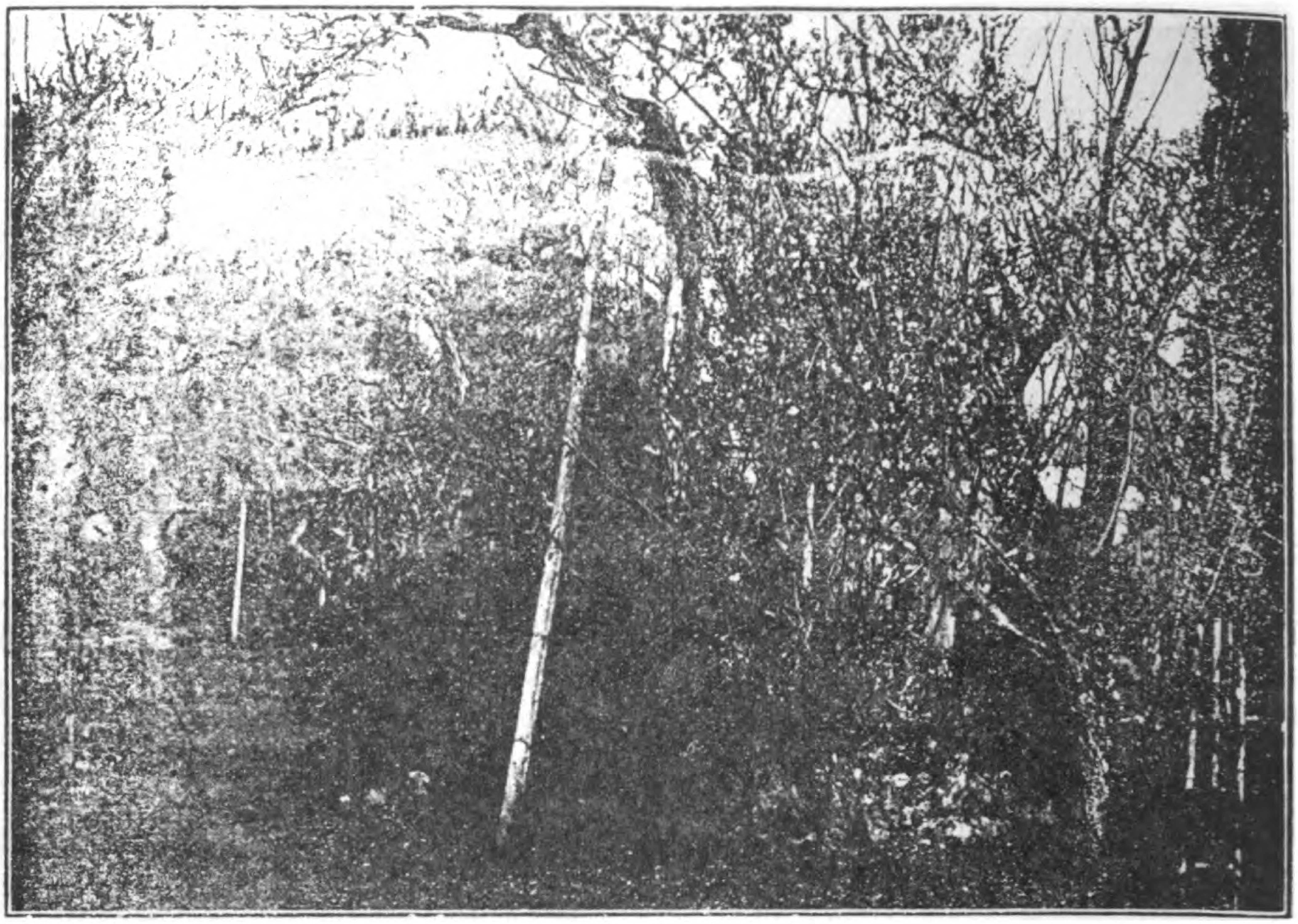
幻兒百態（九）

無念無想



井伊直方君撮影

名所の梅



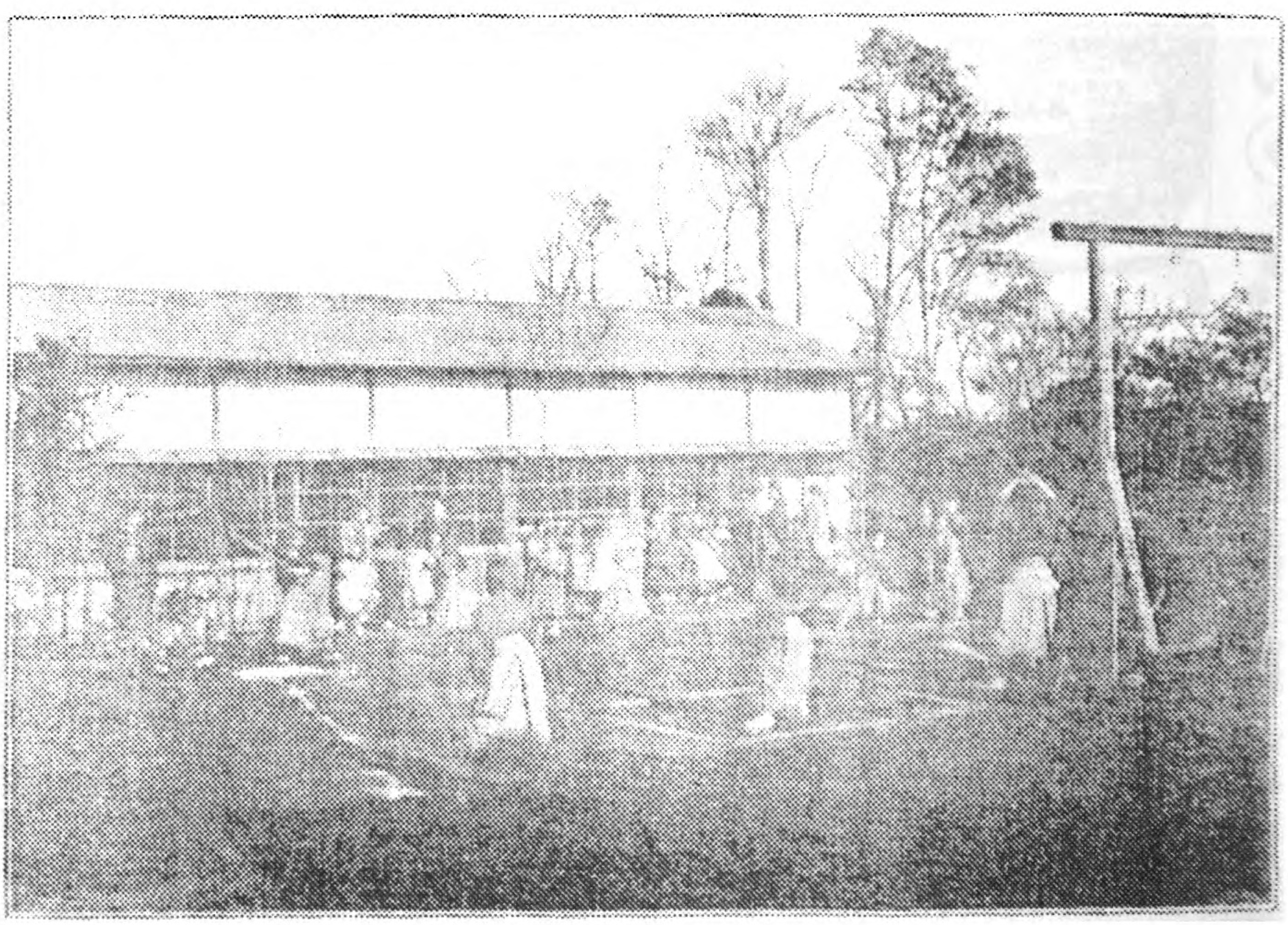
蒲田梅林



赤川梅林

東京育成園







女鑑

第拾七年第貳號

梅の花

われもし花と生れなば　いかなる枝を選ぶべき
いかなる色香擇ぶべき　さても多かる花のなか。
枝も折れよと吹く風も　幹もこぼれと降る雪も
しらぬ顔にぞ咲いでし　花はたぐへむ物もなし。
壽永の春のはたじろし　白きは清くゝれなゐは
いとうるはしき花の色　今も目に見る心地して。
幾世かへせず谷の戸を　したひていづる黄鳥の
羽かぜの匂いひしらぬ　梅の花ともならむかな。

（（中川愛氷作））

論説

女子教育に就て

伯爵　吉井幸藏

婦人の教育と云ふは大切なことで、たゞ文字だけ教へて、杓子定規の講釋ばかり聞かしたとて、何の役に立つものではない、人の妻となり、人の母となつて、即ち家庭の主宰者となつて、社會の幸福を増進すべく、先づ一家を齊ふるに足るべき人格をつくらねばならぬ、古來有名なる歴史上の人は、その母は何うであつたかと云へば、必ず賢女である、貞女である、口先ばかり發達した、人格の卑い人の胎内からは、決して偉人物は生れ來ては居らぬ、

初代ナポレオンの母レチ、ヤは、貞操めでたき賢女で、貧乏辯護士の妻として、困難なる家庭に立働き其子ナポレオンをして世界有數の偉人物たるべく教育したのであつた、ナポレオンも常に母の徳を頌し、自分の今日あるは、單に母の教育に依れるものとして、如何に母の教育の貴きかを唱導して居たのであるそこでナポレオンの一代は、戰爭塲裡に終始し、一日として干戈を離るゝことはない、かゝる間に處して母たるべき人の教育の必要を感ずるの餘り、佛蘭西に女學校を設立したのである、これが佛國に於ける女學校の嚆矢である、設立の主意が他日母となり妻となるべき人の、品格を高めやうといふのであるから、今日の女學校のやうに、徒らに看版ばかり大きくし、或は月謝さへ多く集まればよいと云ふやうな譯でな

く、自ら母の範を示して、卒業證書授與式の時の如きは必ず臨場して、親しくその手より行はれたのである。この戰國時代、たゞ風腥く雨紅なる戰鬪の中で、此事あるは實に敬服に堪へぬ所である、殊に墺地利と戰爭し、兩軍對陣して、晝夜寸隙もなく、作戰計畫に餘念なかるべき陣營に於て、巴里に於ける女學校の規則を起草したことがある、英雄閑日月ありと雖も、ナポレオンの衷心、いかに女子教育を重大視したかゞ解る、あゝこの心これを今日誰か繼承して居るであらう、自分は此事を思ふごとに、無限の感に打たるゝのである、

その他例を引けば幾つもあらうが、母たる人の教育の大切なること、即ち女子教育の大切なることは判然たるもので、それが大切なると同時に、女子教育を忽せにして貰うては困る、聞けば東京に於ても、貞操と云ふ事さへ知らぬ人が、女學校の校長になつて居るといふのもあるさうである、當局者も知らぬ顏で社會も大目に見て居るのみならず、そんな學校の方が却つて繁昌するといふ有樣、それでは教育は何の爲であるかを解するに苦しむ、自分は校長はもとよりの事、教員に於ても、適當な人物を見立てねばならぬ學問の要は人格を養ふのが主要で、人格を高くするには、是非學問を授けねばならぬ、去ながらその主要を忘れると、如何に數學が出來ても、英語が出來ても、それは人格に何等の効力を與へるものではない、故に徒らに學問ばかり注入し、書函中の人とならしむるより、精神教育に重きを置いて、良妻賢母たらしむるやうにせねばならぬ、さなきだに近時精神教育の頽敗せんとする時、不眞面目なる遊戲を授けて、ます〳〵浮華に導く如きは、慨歎に堪へぬことである、自分等女子教育の大切なることを信ずるものにして、然も所謂女學校出の女子を、人の妻に勸むるに躊躇せざるを得ない、自轉車で乘込れたり、長刀を振廻されても困るではないか、

女學校上りをうか〳〵妻にも出來ぬと云ふ事になれば、打捨て置かるべきことではない、國家の興廢にも關係する大問題であるから、自分等女子教育家ではないが、默止して居る譯には行かぬ、要するに斯の如きは女子教育の不眞面目より起れることで、事實上精神教育に重きを置かぬからである、すべてが形式一點張で、精神といふものがないからである、その結果學問をして狂的人物となり、コンモンセンスに遠ざかり、驕奢の主唱者となり、家庭の邪魔物となる、即ち女子教育の發展も斯の如きに至つては、餘り喜ぶべきことではない、

要するに女子教育は、人の母となり、人の妻となつて、家庭に働く上に不自由なき學問さへあれば、精神の修養によつて、一家を圓滿にし、和氣藹々たる中より、國家に有用の人物を出すことを得るのであるから、主として精神教育に力を注がねばならぬ、斯の如きは事新しき説にはあらざるも、女學生が自轉車に乘り、長刀をふりまはし、地に印する影の狂氣を帶びたるにも氣付かず、衆人環視の中に耻とも思はざる如き今日に於て、陳腐の言を繰返すも、また無用の事ではなからうと思ふ、

家庭教育に就て

寺尾亨

近來女子の教育は非常に盛んになつて來た、實に喜ばしいことである、男女に拘はらず教育と云ふことは、必要なことで、飽くまでも教育せねばならぬ、去ながら教育と云ふことは中々むづかしいことで、學校だけのことでは、社會へ立つて行く人物を仕上げることは出來ぬ、教育は學校にて一通り出來るが、德育、體育は家庭に於て大に注意せねばならぬ、學校にても注意せぬではなからうが、多人數の事故、なか

〳〵さう手が廻るものではない、

そこで女子はいかほど智識があつても、家庭を治めることが出來ねば、その智識は無用の物であるから女子を教育するには、どこまでも良妻賢母として、よく家庭を處理して行けるやうに仕立てねばならぬ、處がその邊の注意に缺けて居る爲め、教育を受けた女子に、却つて無教育の女子の主宰する家庭より劣るのも少くはない、女子の教育が家庭を治むる上に於て、教育の普及により、國民全體の上から云へば幾分か進歩したに違ひないが、比較的その効果が少いと思ふ、即ち現時女子の教育が實用に適して居るのが少いからであらうと思ふ、それに近來種々の惡風があつて、うか〳〵女子を學校へ入れることも出來ぬ、私どもの娘なども、適當の女學校が見付からない爲、まさか學校へ入れぬと云ふ譯にも行かないで、學習院へ入れる、同校は重に貴族的であるから、一家の主婦たる本分の仕事には、兎角疎いらしい、併し風儀の上から云へば、まづ〳〵上等の部であるから、女子の品格を損ずるやうなことはない、さすれば家庭の仕事は家庭で稽古をさせやうと、妻が教師になつて學校の休暇の時などは、簡單な生活を營ませて、娘どもに經濟のことからすべての稽古をさせるといふ有樣、はじめのうちはまゝごとのやうであるが、段々菜でしらへ膳でしらへ、其他の切廻しも上手になつて來る、平素もその通りにして居るが、まとまつた休暇のある時は、前述の如くにして、一家を治める稽古をさせる、決して宿屋泊りの避暑避寒などさせたことはない、宿屋泊りの避暑避寒などして居ると、互に驕奢を競ふやうになつて、大切な目的が第二になり、却つて惡風に感染せらるゝと云ふやうな事にもなる、若いうちは派手なことを好むものであるから、成るべく質素に導くやうにせねばならぬ、

近來婦人が公共の事に奔走するやうになつた、それも結構であるが、一家に充分の餘裕があるでもなく

夫があつても自分の始末のみするやうな有樣で、公共事業などゝ騷いで見たところが、弊害ばかり起つて却つて公共の爲にもならない、されど家政上金錢其他に於て、少しも不自由のない、子女の敎育等にも、充分手の廻つて居る身分の人は、素より公共の事に働いて貰はねばならぬ、併しその身分でもない人が、それと同じやうに、公共事業をふりまはして、盛んに外出するやうでは、困つたもので、妻は家事に全力をそゝいで　夫を助け夫に不自由をさせぬやう、一家に不都合のことのないやう務むる義理合のあるやうに思ふ、第一子女の敎育をするにも、夫婦が非常な力を用ひて心配しても、なか〳〵充分とは行かぬ勝である、それ等の事も打捨てるやうでは、公共どころか、家庭から社會に不必要な、或は社會に申譯のない人物を出すやうになるかも知れない、まづ家庭の事に全力を注ぐにも及ばぬといふは、自分に代るべき尊敬を拂ふに足る家庭敎師でも置いて、それに信任して置かるゝやうなのは格別であるが、それの出來る家庭が、さて此廣い東京でも何程あるか、華族でも立派な家庭敎師を備へて居るのは、島津家の好成績を現はして居るのを傳へ聞く位なことで、その他にもありもしようが多く聞かぬ、多少あるにしても、家庭敎師といふは名ばかり、甚しいのは傅同樣なもので、たゞ稽古のおさらひ、弱い小兒の頭腦に文字さへつめ込めばよいといふ、不完全なもので、それ等の敎師に、決して品格の高いのは少い、隨つて金錢の爲に、家庭に頤使されるに過ぎないで、家庭から尊敬を受けるといふのは少い、そんな敎師に子女を托して何の役に立つものではない、そんな敎師に留守番をさせて、母たるものが外へ出てばかり居るやうでは、公共の事もその通り、お祭り騷ぎをするに過ぎないものである、

元來世間の人は、女子に限らず、家庭敎育に重きを置かぬ、多くは子女の敎育を自然の成行に任せて、その性情のよきを奬勵するでも、惡しきを矯めやうでもなく、家庭に重きを爲す所以を考へて居らぬ所か

ら、行屆かぬ所が多い、であるから學校は大學を卒業させても、その人格に至つては疑ふべきものが多い、廣い世間でもなく、我々親族間にでも、家庭の事はのけものにして、大に失敗して居るのもある、犬でも猫でも、よく教育すれば、行儀もよくなり、又職分をも盡すやうになる、況して人間であるから、注意の如何によつて、いかやうにも導くことが出來る、よく平常の擧動に注意して、あまり嚴しいばかりが能でもないが、小兒の智識の發達の、性情の變遷は著しいものであるから、一刻も目離しの出來るものでない中々外わるさなどして、その注意が滿足に屆くものでない、決して婦人に向つても公共の事はどうでもよいといふのではないが、將來健全なる國家をつくるには、自分の幸福が國家の幸福となるやう、先づよく自家を治めて行くことが必要である、

女子の實業教育に就て

法學博士　和田垣謙三

女子の實業教育に就て、何か話をせよとの御注文であるが、それには自分が女子商業學校にて經驗した成績を述べるのが捷徑であらうと思ふ、

自分が女子商業學校を創立したのは、三十六年十月一日であつた、三十六年十月と言へば、申すまでもなく、所謂三十七八年日露の役、其叢雲が天の一角より起らむとして居る時、げに其年、其月の十月三日には、日露政府間度々照會の末、我國に於ては、小村外相が其局に當られ、露國側に於てはローゼン男が當られて。東京に於て外交上の手續の差迫つた時である、世は今にも戰爭の世とならむとする所であつた併しながら我々は其戰爭が果して免れざるものであるか、どうか、よしんば免れぬものと見た所が、其後、

其先起つて來る問題は、所謂戰場の戰爭でなくして、市場の戰爭である、干戈的戰爭にあらずして、平和的實業的の戰爭である、時勢は必ず其到るべき所に到る、即ち女子に向つて實業經濟上の思想を與へて置くと云ふことは、もう既に其機熟せりと云ふ考を有つたのである、其當時は、社會に於て女子に商業敎育を與へると云ふことは異なことであると、多少の疑問疑惑を其間に挾んだ人もなきにしもあらずであつた而して創業の際に入學者の數はどうであつたかと云ふと、僅に二十五名であつた、即ち百の四分の一である、然るに翌三十七年四月になつて、入學を許した所が四十幾名と云ふ數を得た、而して其年の七月に於ては速成科の者は既に一年の學歴を經て、九名の卒業生を出した、それから三十八年になると、其年の四月に入學をした者が五十名と云ふことである、而して前月、即ち三月に卒業證書を授與したが、其證書を受けた者が三十四名、それから昨年の四月に新に入學をした者は七十幾名であつた、其前月の三月第三回の卒業生として社會に繰出した數は二十三名、先づ斯う云ふ數になつて居るのである、入學者並に卒業者を總計すると、初めより今日までの入學者の數は凡そ百九十名、卒業者の數は六十六名差引跡に百何十名が殘る勘定である、事實今日それ程の數になる、それでこの三月卒業するものは四十五六名である、さうすると卒業者は從來の六十六名に加へて、百名以上になる、而して入學者の數は正確なる豫想は出來ませぬが、學校も多少社會に知られつゝあることであるから、少くとも百名或は、百名以上の入學者を迎へることが出來やうかと思ふ、さうすれば初めからの入學者の數に合はして三百名内外の者になる、或は是より以上の結果を得るかも知れぬ、先づ生徒の數に就てはさう、それから其生徒の種類、性質に就て云へば初めての時は隨分種々樣々の種類の者が這入つて參つた、數は少いが種類が多い、授業上取扱上隨分困難をした、其一例を云へば、例へば或婦人は年齡三十有余才の後家で、子供を其老母に預けて、さうして奮

發して東京に上ぼつて入學した、誠に感服の至りである、其外に二十九才の人があり、一方には又十六才ばかりの若い生徒もある、それは其初めの間で……ところが段々と生徒の脊も揃つて來て、昨年の如きは高等科と云ふものがあり、幷に本科と云ふものもあり、先づ正則に近い方であるが、入學者は年齢、學力に於ても殆ど揃つて居る故に授業上には頗る便利である、唯々數の殖えたのみならず、生徒に於て相當の準備あるものが揃つて來たと云ふことは、數字以上に於て一般の進境を表はすことで、其點から見ても喜ばしいことである、

それから入學者の府縣別は、我邦の津々浦々、どの邊から多く來るか、或はどの邊からは來ないか、ちよつとそれを知りたいと思ふて調べて見た所が、まだ微々たる學校であり、其生徒數も少いに拘はらず、なか／＼能く各地方が代表されて居ることを發見したのである、どこそこがと言ふよりも、寧ろどこそこのみが代表されて居ない、それを云ふ方が簡單である程、能く代表されて居る、即ち其取除は沖繩縣、宮崎縣、奈良縣、先づ縣で云ふと此三つだけ、此外山陰道と云ふものがまるでない、申合したやうに一人も出て居ない、而して斯く申す自分が山陰道の一人であると云ふことは、誠に赤面の至りである、先づそれが地方別のお話、

それから如何なる者の子女が多く這入つて來るか、即ち生徒の父兄は、どう云ふ種類の者が多からうと云ふと、これは誰でも推測の出來ることで、別に意外のことを見出さぬ、即ちその職業は農工商に屬する者である、僅に一割寧ろ一割弱が官吏、醫師、辯護士等に該當するものである、所謂實業家の中で數に依つて云へば、商工農……商が第一、次が農、それから工、是が先づ父兄の職業、

次に卒業後の概况に就て一言するならば、前述の通り六十有余名の卒業者の其中で、實務見習の爲に、

銀行或は會社等に出て業務を執つて居る者が三十六名、凡そ四割に當る、東京に居る者が勿論多數であるが、横濱、神戸にも參つて居る、又其他の者はそれ〳〵前述の通り家が多く商家或は農家であるが故に、父に代り、或は兄に代つて帳簿のことを整理して、父兄をして瞠若たらしめるやうな話も往々耳にするのである、要するに留まつて内に在つて父兄の業を執る者も、又出で丶外に業を執つて居る者も、先づ我々の耳にする所に於ては其結果良好なりと自ら許して宜からうと思ふ、

次に婦人のことであるからして、特別の事情のない限りは、先づ外に嫁するのが是が當然、或は學校で實業教育を受けたから、外に嫁することを嫌ひ、一生獨身、獨立獨行でやり通すなど丶男子に向つて反抗せしむる憂はないかと云ふ疑、其心配は事實無用である、前述の通り六十有余名の中で既に八名は人の妻となつて、それはどう云ふ方面に向つて、進んで行くかと云ふと、是亦豫め想像の出來ることで、悉く實業家に嫁したのである、文官、武官、官吏などに嫁した者は一人もない、即ち我々の目的とする通り、實業界に於て婦人も男子に劣らず奮闘する、少くとも婦人が亭主の事業を解し、從つてそれに對して同情を有ち、尚進んで敏腕家なら、夫に代つて業務を執るのである、即ち實業の方面に向つて國民の半數を占めて居る所の女子を繰出して、女子をして實務に當らしむると云ふ、其目的を達することは、左程むつかしくなからうと思はれるのである、昨年夏休中に、自分の學校の幹事が親しく卒業生の家庭を訪ねて、卒業後の有様にて、父兄の見る所はどう云ふものであらうかと云ふので、視察旅行をした、其結果の一つ二つを申せば、茨城縣の某の娘は、卒業して故郷に歸つた、其老父母の話に、是は外に片付ける積りであつた所が、僅かの間の修業で、丸で別人になつて來た、お蔭さまで帳簿のこと、或は取引上のことも解り、一角立派な娘になつた、余所にやるのは誠に惜しくなつた、是は家に置いてさうして、聟をとり、自分の

分店として業務を執らせる積りであると云ふことを申しましたさうである、是などは一つの例である、全く其子が特にそれだけの才能を備へて居つたかも知れぬが、兎に角喜ばしきことであると思ふ、

又今一つ申したいことは、昨秋凱旋紀念として五二共進會と云ふものが開かれた、なか〳〵盛んなもので、私は四五度も行つて、多少研究し、其主任の者に會つて、色々質問し、殊に賣店は重に婦人である故に、其婦人に就て質問した所が、どうも誠に不便を感ずると云ふので色々談があつた、そこで自分は學校では斯う云ふことをして居る、卒業生に暇な者があれば尚更宜いが、見習旁々生徒を一大隊とは行かぬが五六名位繰出しても宜い、それは望む所である、學校の方でも望む所である、段々話を進めて、賣店の方並に計算の方に詰めることに致した、併しながら卒業生には一人も遊んで居る者がない、皆生徒のことであるから、終日詰切る譯には行かない、午前と午後と二人で一日の仕事をする、即ち連帶責任で引受けると云ふことになつた、兎に角商業の如きは、唯々教場ばかりで學問の出來るものでない、成るべく實際的に頭に這入り易いやうにしたいと思つて居る、兎に角日本に於て初めてのことで、半ば試驗の時代であつて、我々の執る所の方針も無論完全ではなからうと思ふが、年々歳々より完全なる方に進ますことを希望するのである、

教師としての任務

小川直子

教師と成たる人は、其教師たるの任務を全うせずんばあるべからず、されば教師となる事も亦やすきわざにはあらざるべし、如何といふに、

人の親の子を思ふ心深きを思ひやれば、何に譬へむ様もなし、さるを夫に代りておほしたて、萬の道を敎ふる事にしあれば、先づ其親の心を汲取て、情をかけ、至らぬ隈なう至誠をもて愛すべし、愛する心淺くては、敎ふる道も深切ならず、斯くて敎ふる道何をか先にせむ、先づ其生徒をして心正しく氣和らかなる方に導くべし、如何となれば、生徒たる者も數多きが中には、言語にまれ、すがた形にまれ、種々なる癖のつきたるもあれば、これらを正しくせむには、精神の曇りあるは意のゆがみなどありては、誠の道に導きがたく、はた藝能を敎へむにも上達せしむる事あたはざるべし、假令藝能は上達せしめたりとも、それにて足れりといふべきにあらず、今の世の中、いにしへとは異にて、他の交際もいと繁き習ひなれば、其交際の道にも氣和らかに愛々しう、人に氣近き心ならでは、世にたちがたかるべし、斯く日に月に進み行く世のさまをだに知る事なく、只大やうのみにてはさならがら奈良の朝あたりの人を出したらんやうに見えて、あさましき心地やせむ、斯く開けゆく世は、世につれて見る事聞く事廣からではすべての人に逢ふ時其物語など聞く折などにもきゝとる事うとく、いかにも迂濶なる者と見えむ、さるからに交際にも廣くして、其智をひらき、世に益ある者となさむ心を盡して敎ふべし、よりておもふに、此敎へ施す身にて、おのが心の奥さへ正しからず、朝夕の行ひに缺點などありなば、いかゞはせむ、敎師たらん者は、おのが行ひをもて、萬の道を生徒に示し、すべての事皆鑑とあふがるべきものにあらずや、さればよる晝心をみがきて、曇を拭ひ、身を省みて行を正し、仰で天に耻ぢず、伏して地に耻ぢず、省みて我身にはぢざるやうに心がくべし、かゝる後、其おほしたてたる生徒も、いづれにゆき、いかなる業を勤むとも、萬に應じて缺點なく、能く人たる者の道を守り得べし、爰にはじめて敎師たる者の任務を全うしたりとやいはむ、

教育に關する勅語英譯 (菊池博士)

IMPERIAL RESCRIPT RELATIVE TO EDUCATION.

Our Imperial Ancestors have laid the foundation of Our Empire on a broad basis and have deeply implanted their virtues: Our subjects all united in their loyalty and filial piety have for generations achieved their beauty, This is the glory of Our national constitution, and on this also must Education be based.

Ye, Our subjects, be filial to your parents, affectionate to your brothers; as husbands and wives be harmonious; as friends be true; bear yourselves in humility and moderation; extend your benevolence widely to all; cultivate knowledge and practice arts, thereby developing intellectual faculties and perfecting moral capacity; further more sdvance public good and promote common interests; always respect the Constitution and observe the laws; should emergency arise, offer yourselves to the state loyally and bravely; and thus support Our Imperial Throne coeval with the Heavens and the Earth. So shall ye not only be Our good and faithful subjects, but make manifest the character inherited from your ancestors.

This Way is indeed the teaching bequeathed by Our Imperial Ancestors and to be observed alike by Their Descendants and Their subjects; unerring for all ages and true for all places. We hope and trust to take it to heart in common with you, Our subjects, that We and ye may thus attain to the same virtues.

30th day of 10th month of 23rd year of Meiji.

Imperial Sign manual. Imperial Seal,

(Translated by Doctor D. Kicuchi.)

近時思潮

家庭は純潔なれ

吾人は實例として、我國近時に成功せしと傳へらるゝ實業家其人の事歷を閱せんことを、大方に勸告せざるを得ず、かの人々や實に其事業に對しては、奮鬪的の人なり、而して國家に取りては、實に活動的の士たり、然も其奮鬪や單に邁進的たるが故に、悠久遠大の長途に疲れて、不幸にも中途にして夭折するにあらずや、而して其平生の行動を見るに、毫も趣味の掬すべきものなく、而して純潔高雅の家庭の如きは、頃刻も之を其身邊に作ること能はざるを見る。畢竟これ人生の趣味如何を了解せざるが爲めのみ、眞の偉人傑士や決して然らず、皆よく其事業に對して奮鬪的たると同時に從容的たり又よく其精神を持するや堅忍たると共に健剛偉大なり、之を以て其行ふ所や悠揚として迫らず、而してよく主義あるの人たることを得同時に趣味あるの士たるを得、又よく天然の長壽を保ち、其家庭をして純潔にして高雅たらしめ得る也、此の如くにして、眞に一世の成功者といふを得べく、又偉人傑士と稱するを得べく、而して國家社會に取りては、實に有用缺くべからざる文明的紳士と稱揚すること を得べきにあらずや、

然るに現時我國紳士の家庭なるものを見るに、多くは從容自若ならずして、遑々乎たり、戞々如たり、恰も餓虎の食を爭ふに似たり、而して之が結果として、純潔高雅の風氣は一も之を其家庭間に認むべからずして、反て沒趣味にして俗惡を極むる者比々皆然らざるなきが如し、かの漫に宏大なる家屋を新築すれば、紳士の體面を保つと思へる其一例なり、徒に黃白を散じて、其室を金壁にして其居を珠玉にすれば、紳士たる光彩を放ち得と誤解せるも亦其一例なり、而して甚だしきは日夜酒色に耽溺するを、男子一生の素懷ぞと心得る如きも其甚だしき一例なり、此の如きは單に豪華を衒ふといふのみ、紳士たる品性面目に於て毫も高まる所なし、昔は豐太閤の驕奢に流るゝや、千利休は唯一椀の茶の手前にも人生の趣味を掬すべく又道を辿るべきを諷せしにあらずや、畢竟これ一個人の力如何に豪奢を積み累ぬるも、固より天地の大と比するに足らず、眞の善美は實に形體の外に存し、純潔高雅の中に、其姿を認むべきを諭せしものに外ならず、されば古人も、人生の歡樂は實に黃粱一炊の煙にだも如かずといへり、乃ち此世に人となるもの、眞に人生の愉快を得んと欲せば、須らく努力するに如くはなし、而も其努力と共に常に從容として迫らず、悠々自然と同化するに如くはなし、この裡自ら趣味の津々たるもの あらん、この心之を家庭間に移し植ゆる時は即ち一家は和樂して春風生ずべし、此の如くにして 純潔高雅の風氣を作ること能はずといふも、吾人は之を信ずること能はざるなり。

（鈔行會）

華族子弟の教育

◎學習院は御存じの通り華族の子弟を敎育するのですから他の學校とは全然其趣を異にして居ます、生徒は何れも生活の程度の高い家庭に育てられて居る故概して大人しく無邪氣でありまして何處となく一種の氣品を持つてゐる樣です、

◎乃木大將が這般から學習院へ御盡力下さる事になりまして、實に華族子弟の幸福、日本帝國の爲めに賀すべき事と存じます、實を申せば當學習院が大將に焦れて居つたのは、久しいもので以前には度々大將に乞ふて御話を願ふた事なぞもありました

◎然るに今度は大將が熱心に學習院總ての方面に就て、御監督下さる事ですから何よりの幸です、大將は任務に忠實の方ですから、近頃は毎日御出になつて調査、研究して居られます、

◎唯一の缺點であつたのは彼の大將の樣な方が、以前に於て無かつた事です、どうも華族の子弟は實際的は軍人の如く實行を主とする點は、他に讓る乎と思はれます、

◎敎師と生徒との關係は、尤も重大の要件です、他の學校なれば普通の敎授に堪へ得る學殖があれば事足りるが、當院になりますと、中々面倒で、中位の敎師なれば、生徒が敬意を表しない事がありまして實に弱るです、

◎要するに品格もあり地位も學殖も具備した者でなければならぬと云ふ次第です、畢竟これは生徒の家庭に於て高等官位の人々が頭を下げて來るのを見て居るからだらうと察しが付きます、

◎東宮御所の御庭先となるので、此の學習院は明年取拂はれて、目下新築の小石川區目白臺へ移轉する樣に成つて居ります、其敷地は大したもので、校舍は夫れに比しては餘り宏大と云ふでもありませんが先づ敎室、事務室、寄宿舍、官舍等もある譯です、

◎女子部と男子部は先般合併した際に區別したので、其合併も宮內省の御都合で、一トツに纏められた譯です、實質は依然として何等の變化もありません。

（山口學習院長談）

禮儀作法の改良

禮儀作法は一種の風俗習慣にして、道德法律等と同じく、其の社會の便宜の爲に、公共的約束として生れ出でたる者なり、金錢の勘定などは卑むべきことなりとせし武士道も、いつしか勤儉貯蓄の敎とかはりぬ、血統の繼續を理由として蓄妾を許したりしは昔日のことにして、今は一夫一婦を正道とするに至れり、人口の增殖に窮せる世の中にては、墮胎を公認し又は默許すれども、或は殖民の道あり或は農工の發達して、人命の貴重なるを解せる社會にては之を嚴禁するにあらずや、道德と法律とすら變遷あること此の如し、況や禮

儀作法を以て永久不變の者と思ふは大なる誤りにして、時勢の要求に從ひ適當なる改良を指導するは、先覺者の義務なりとす。

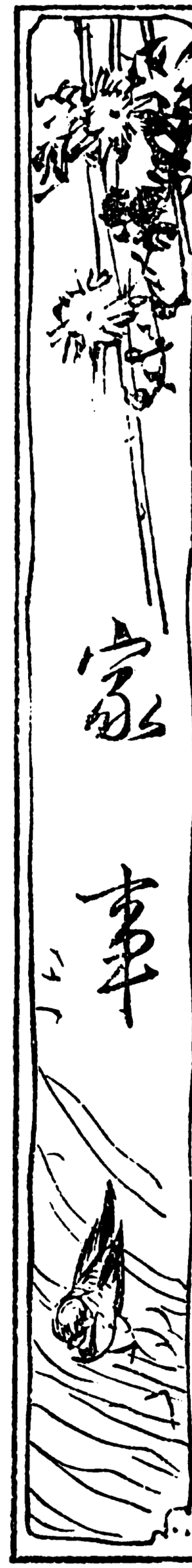
熟々吾が國の禮儀作法を見るに、一世紀若くは數世紀以前の遺物に屬して、今日の實際に適せざる者甚だ多し。士農工商の階級を撤して四民平等の社會となれるが爲に改むべきことあり。衣食住等生活の狀態の次第に西洋化するに從ひて變化せざるべからざるあり。交通機關の進歩は簡略と敏捷と精確とを要求するに至り、宗教道德法律の發達も禮儀作法の推移を促しつゝあり。今日中等以上の家庭及び多數の高等女學校等に於て其の子女に學ばしむるを常とする所謂小笠原流の作法の如きは、殆ど活社會の交際に用ひ難き者となりぬ。

家族と家族との交際法に關しても改良すべきこと頗る多し。今日最も其弊に堪へざるは贈答の禮と往訪の式とならむ。今や物品贈答の頻繁なる冠婚葬祭の慶弔、年末年始の祝儀より、日常の時候見舞に至るまで、菓子果物鷄卵鰹節等を携帶するを例とし、而も互に略同價値の者を交換する習なるを以て、自他共に煩累に苦しみつゝあるは、世人の承認する所ならむ。只其の事の禮儀作法に關することなるを以て、之に背くを敢てする者なく、相率ゐて弊風を助長しつゝあるのみ。

抑、禮は社會の秩序を保ち、交際を圓滑にする所以なれば、其の大切なること道德及び法律と選ぶ所なく、告朔の餼羊を保存せんことも強ち無用ならぬ場合もあれど、病人の枕頭に菓子果物を腐敗せしめて、床揚の祝ひに赤飯と鰹節とを配らざるべからずとは、生活に餘裕少なき者のために苦痛に過ぎたる交際法といはざるを得ず。贈るものも、贈らるゝものも互に苦痛を感じ氣の毒に思ひあふ如きは決して贈答の本旨にあらざるべし。

其の他訪問時間の不規則なる、用事の訪問と交遊の訪問との區別なき、來客に食事を供する場合の多きこと等も次第に改良すべきことならむ。訪問の時間は先方の職業に妨げとならぬ時を選ぶべきは勿論、用事中來客を謝絶するの風をも起して可なり。用事の訪問には用談のみを簡明に應答するを禮とすべし。茶菓を供するなどは無用のことなるべきか。西洋諸國にては寒暖の辭をさへ交ふるを許さゞる場合あり。不意の來客に食事を饗するは、臺所の秩序を亂し、時間と金錢とを空費する憂多ければ、善き風俗といふべからず。總て禮儀作法は敬意と正直とを本體とすべし。邦人の交際には上部を飾ること多くて、却て煩累を釀すこと多し、戒むべきことなり。

此等風俗の改良につきては、團體の勢力に待つべきこと多し。余輩は有力なる會合の組織せられて、其の研究調査の結果を發表し、先づ會員間に實行して而して一般の改善を導かむことを希望する者なり。思ふに是亦國運發展の一要件たらずんばあらじ。（信陽生）



育兒に就て

醫學博士　加藤照麿

初生兒の運動

初生兒と云ふ時期は外國と日本とは少し違ふやうで、先づ日本の習慣から見ると、生後一ヶ月位、即ち宮詣りの濟む頃までの間を初生兒と云つたら宜しからうと思ふ、元來小供は生れてから餘り動かす事は善く無い、何故かと云ふと身體を動かすと自然に頭が動く、頭を動かす事は生理學上欲しない事であるから、先づ初生の小供は成るべく動かさぬ方がよろしからうと思ひます、殊に初生の中は、自分から動くと云ふ事は少しも出來ないので、何れ動くには、誰れかゞ抱いて動かすとか、又は寢床の中で動かされると云ふやうな事で、これがために消化を助けると云ふ事も無いのであるから、先づ動かさぬ方が宜しからうと思ふ、殊に少し劇く運動させたりすると、初生の中はそれが爲に、飲んだ乳汁を吐くことなどもありますから、普通の取り扱ひでも注意致さんといけませぬ、

時によると座敷を取替へるのでさへも、如何であらうかと云つて相談を受ける事がありますが、私共小兒科醫の方から云ふと、初生兒の運動は勸める所では無い寧ろ止める方であります

初生兒と居室

生れたての中は薄暗い室に置く方が宜しい、何故と云ふのに、今迄は母體の中に在つて眼を閉ぢて光線に少しも觸れないで居つたのが、急に世の中に出

て光線に觸れるやうに成つた、つまり闇黒から白晝世界に出たのであるから、劇い光線に觸れると、結膜加多兒に罹つて眼眵なんぞが出るやうに成りますから、可成七夜位經つ迄の間は明白い場所には出さぬ法則にして居る、夫から、申すまでも無く、成る丈け乾燥いた空氣の流通の善い、日光の善くあたる、先づ南向とか、東向の坐敷が宜しい、其他は大人の居室と大差は御坐いませぬ。

初生兒とマクリ

マクリと云ふ物を初生兒に飮ませる事は全廢致したい物で御座います、マクリは、大黄と云ふ藥材を使つて調合へるのであつて、全體此カニバヾ（俗稱）と云ふものは、食物から起るのでは無く、母親の體中に居る時、飮み込んだものが腸胃の中に這入つて排泄物に成つて出るやうに成つて居るので、それを排泄するために大黄と、砂糖とを混合したもの、即ち、マクリを與へるのであるが、消化を惡くする物であるから、全廢するやうに致したい、斯樣なものを初生兒に飮ませなくとも宜しい理由があります、母親が小供を生んで最初四五日間は肪脂に富んだ乳が出る、一寸色を見ても黄色を帶びて居るやうな乳が出ますが、此が直に下劑に成るのであるから、母親の乳を飮ませて居ればマクリなどを飮ませる必要はない、畢竟マクリと云ふものは、通じを付けるために飮ませるのであるが、母親の乳が下劑に成るやうに出來て居るのであるから、マクリなどの必要は少しもない、

授乳の始め

强壯な小供であれば早やく授乳するが、普通は二十四時間位經つてから始めます、それまでは小供が劇く乳を欲つして泣いたりなんかする塲合には、砂糖水を少し飮ませても宜しい、元來砂糖と云ふものは、極く輕く通便の効力のあるもので御坐いますから、夫れを飮ませると程能く通じもつきますが、砂糖も水も充分精選したものを用ひないといけませぬ、殊に水は一度煮沸するが法と成つて居ります、

授乳を禁ずべき場合

授乳の禁ずべき場合は第一に母親の脚氣に罹つた時で母體に脚氣があれば、どんな場合でも授乳は止めて仕舞はなければ成りませぬ

其他は梅毒、結核等、梅毒は、單り授乳者から小供に傳染するのみならず、更に恐るべき場合がある、或る母親が梅毒を有つて居つて小供を生む、小供には先天的の梅毒が起る、夫れへ健康な乳母を付ける、さうすると小供の方から乳母に感染する、乳房の先は小供が乳を飲むと、肉眼では見えないが、小さな



裂れ目が出來る、そこへ小供が口を著けて又吸ふものだから、乳房から病氣が這入つて、健康な乳母でも小供のために梅毒を感染される場合がある、これは無論禁じなければなりませぬ。

其他は小兒虎列剌と云つて、最も急性な胃腸加答兒に小供が罹つた場合で、小兒虎列剌と云ふ、名稱を附したのは虎列剌の樣に急に起り急に死ぬるからでありますが、此の場合には肪脂分を飲ませては、惡いからして、無論乳は止めてしまはなければ

ならぬ、

小兒と衣服

此は廣い問題であるから、委しく云ふと長く成りますから、先づ一般の注意を申ませう、先づ心得て置くべきは、動物體のものを一枚混ぜて着せる事が必要である、即ち、絹布とか、木綿もの丶外に、フランチルのやうな動物から出來た衣服が加はつて居るとよろしい、身體の温度は、絶えず消散しつ丶あるのであるが、動物體から出來たものを着て居ると、之を防ぐ効能を有つて居る、且つ概して云ふと、大人よりは少しづ丶小供には厚く着せるがよろしい、併し餘り澤山に厚く着せるには及ばぬ、フランネルの一枚か、袷せの一つも多く着せたら宜からうと思ひます、色合は成るべく白いものを用ふるがよろしい、白いものであると、少し汚れても直ぐ目に立つから、嫌でも洗濯をしなければならぬから、健康上白布を衣服に用ふるを宜しと致します、

吾々の最も厭はしく思ふのは、付紐であるが、小供を見ると、皆付紐を以て胸部を縛り甚だしきは冬季五六枚を著せて、一々それを締めて居る、然るに小供の腹は乳を飲んだ時は膨脹れるし、飲まん時には細く成るものであるから、成るべくは上の一枚丈けを縛るとか、又は少し緩く締めるやうにするとか、何とか考へなければ成らぬと思ひます、成るべく洋服のやうにして肩からでも釣るやうにしたら宜からうと思ひます、

小兒と乳母

前にお話したやうに、脚氣とか、梅毒とか、結核性の人及び癲癇などのある人は素より不可、猶ほ望むところは二人以上の小供を生んだものが宜しい、年齢も二十五歳以上から、四十歳位迄がよろしい、餘り若いのは宜ろしくないやうである、

最も念を入れて詮議すると、日本の乳母は西洋の乳母と違つて、幾分か教育者も兼ねて、家庭に於ける教育者の一人と成るやうな傾きがありますから、精神の善い者を選ばなければなりませぬ、醫學上の

外の事でありますが、思ひ付きましたから一寸申しておきます、

授乳に就ての注意

隨分厭い問題であるが、先づ授乳しながら眠る事はいけませぬ、新聞に出る事であるが、これが爲め往々小供を殺す事がある、之れを防ぐには成るべく小供と同衾せぬがよろしい、次に小供が乳を飲んだ後の口中を善く掃除する事を怠つては成らぬ、掃除するには、どうするかといふに、授乳の後必ず清潔な水で口中を拭ふて遣る、之れを致さなければ、種々口中に病氣を釀す事がございます、

授乳の時間を定める事も必要であります、三十分で飲ませたり、二時間經つて飲ませたりするやうな事をせず、二時間なり、三時間なり、時間を定めて飲ませる時には充分飲ませ、其間には決して飲ませぬと云ふ事に決めたいことであります、消化不良症などに陷る者の多くは、不規律に授乳した結果のやうである、

母乳と牛乳

初生兒には人乳が適當であること申すまでもないが、母親又乳母が病氣に罹つた場合に、平生人乳計り飲み馴れて居た兒は、護謨の乳首を含んで牛乳を呑む事を嫌がつて困る、其時の爲めを慮つて、生後三週間、乃至四週間を經てから毎日一回か二回宛牛乳を用ゐるやうに致したい、

泣く時の所置

世間では小兒が泣くと、何でも彼でも乳を飲ませて瞞着して仕舞ふ人があるが此れは小兒の體育上のみならず、精神敎育の上に取つても注意せねばならぬ問題である、小兒の泣く場合は、平素取扱ひ慣れて居る人であれば、大抵は原因が推量されるから、若し腹痛の樣な場合であつたら、半身浴で溫めるとか、又た一日の中に一定の時間に泣く小兒がある、（即ち俗に云ふ夜泣の類）此は到底素人療治の及ぶ所でないから、醫師に相談するとか、適當の方法を講ずべきである、

小兒の沐浴

初生兒には毎日いたします、臍の緒の脱落しない前は沐浴が最も必要である、其後も可成は日々行ふ方が宜しいが、極寒の頃に生れた小兒は沐浴の爲め感冒の恐れがあるから、先づ生後三週間位は日々行ひ其後は隔日位でよろしからうと思ふ、併し温暖の候に生れた小兒には三四ヶ月の間は日々入浴させるがよろしい、

沐浴に就て最も注意すべきは生後七夜迄位の間（即ち、臍の緒の脱落するまで）である、何故かと云ふに、往々初生兒が破傷風に罹る事があるが、其の原因は多く臍からで、御承知の通り初生兒の臍は疵になつて居るから、湯の中に若し破傷風の黴菌なんぞが這入つて居ると、遂に救ふべからざる病氣を醸すことがあります、

故に沐浴に使ふ水は、充分に吟味しなければならぬが、一番安全なのは、生後一週間位の間は、水道の水を一度釜で沸騰せしめたる後、適當の温度に冷却するにある、尤も湯計り殺菌しても器物に危險物が附着して居つては其効がないから、盥手拭一切消毒をしたものを使用すべきであります、

入浴の時間に就ては、西洋では、一日の中の一番氣温の高い時を適當の時間として居ります、先づ午後一時頃から三時頃迄の間であらう、温度は初生兒は二十八度位がよろしい、尤も日本人は温度の高い湯へ入浴る習慣に成つて居るから、モウ少し位は高くても差支はないが、先づ一般に大人よりは低温の湯を用ふる事に成つて居ります、

寒中の注意

まづ風邪を引かせぬ様と心懸るのが一番である、即ち小兒の居る室の温度を平均させることが、風邪の豫防に最も効能がある、譬て言ふと、温暖い狹い室から、急に廣い冷たい所へだしたり、又外から歸つて來て寒冷に慣れて居る身體を急に暖かい室へ入れたりするのは、寒冒の第一原因であります、其他小兒が非常に奔走したり、又は涕泣したりすると身體

中發汗する、斯う云ふ場合には、直ぐに乾いた物を以て汗を拭き取らなければいけませぬ、何でも汗が出たならば、蒸發しない中に拭き取つて仕舞うことは、冬季に於ける感冐豫防の一方法であります、

初生兒の外出期

初生兒を何時ごろから外へ出したら宜しいかと云ふことは、度々質問を受けるが、日本の習慣にも先づ三十日經つと宮詣りをさせるが、此時が外氣に觸れる最初のものとして居るやうである、

之れは日本計りでは無く、歐羅巴にても、三十日間經てば外氣に觸れても差支無いとして居る、但し寒暑の頃は斟酌しなければならず、又出すに致しても、午前ならば十時頃から出すとか、夕方は三時過ぎには出さないやうにすると云ふやうな注意は必ず致さなければ成りませぬ、

小兒と疾病

小兒の疾病は一概に大人よりも扱ひ易いものであるが、又非常の注意も要する、と云ふものは、何しろ身體が小さいから療治の仕惡い場合もあります、けれども總體に就て比較すると、小兒の方が大人よりも早く全治る、假令ば切開した疵なんども肉の上る事が大人に比べると非常に早い、又肺臟の力なんぞも比較的大人よりも小兒の方が強い、夫れ故肺炎なんぞを煩つても又は氣管支加答兒のやうな病氣に罹つても大人より小兒の方が早く全治るやうに思ふ、素人方が小兒は身體が小さいから、同じ肺炎を病んでも早く死ぬるものゝ樣に思ふのは全く間違つて居る、身體は小さいけれども、隨分場合に由つては大人の堪へ得られぬ熱度にも堪へる事があります、

又腸チブスなぞと云ふ病氣は、大人には酷く腸を冐すが、小兒の方は冐され方が非常に弱い、夫れ故大人に取つては腸チブスは、稍々危險な病氣に成つて居るが、小兒の方は左して危險ではない、其外例を上げてお話すれば澤山あるが、素人方には却つてそんな事を申上げん方が宜しからう、

兎に角小兒の病氣は大人に比較すると、治るのは

早いやうであるから、悪いと云つて落膽するには及びませぬ、心を落付けて、充分療治さして遣る事が肝要であります、

耳の衞生

醫學博士　岡田和一郎

水浴に就て

近頃色々の氣候療養が盛んになつて、水浴が流行して來た、併し此の普通の水、河の冷い水に浴するのは、耳に向つて非常に有害であると云ふことは天下の輿論になつて居る、冷たい水の中へ這入つて泳ぐと云ふことは、耳を惡くする、是は皷膜は極く薄い膜であるからそれが皷膜に當ると、夫が爲耳病になると云ふやうなことがある、最も恐るべき影響である、で池の水や川の水の耳に這入るのは宜しくない、ソレから又海水浴は非常に害のあつたこともあり、又益のあつたこともあつて、有害無害を斷言することは出來ぬ、私共專門の耳科學會なる萬國の耳科學會總會で、此の海水浴と云ふことに就いて、色々議論があつて、私も一回出席した事があつたが、甲の人が宜いと云ふて例を擧げると、乙の人が惡いと云つて例を擧げると云ふやうに、互に議論あるばかりで、ドッチとも極らぬ、併ながら多くの議論を總括して、ソレに私の議論を加へて、是だけのことは斷言することが出來る、少なくも耳の病氣のある人、耳が遠いとか鳴るとか云ふ病氣ある人に海水浴も有害である、ソレから貧血症の婦人のヒステリーと云ふやうなものも餘り宜しくないと云ふことが言はれる、但しこれは私の專門にのみ就て云ふ事であつて、他の消化器病とか、何とか各自專門の方から、海水浴を勸めるのもあらう、

外傷と耳病

何か怪我をした爲め、耳の病氣を惹起すことが澤山ある、婦人は此の怪我と云ふことには天然に遠ざけられて居るが、男子はさういふ危險に遭遇するこ

とが多い、例令ば屋根の上で仕事をする者が、高い屋根から落ちて頭を打撲する、さうすると聾になると云ふやうに、外傷の爲に耳の病を起すことが多くある、幸に婦人は前述の如き此危險に遠かつて居て、大きな怪我をすることは少いが、種々の異物が耳の中へ這入るといふやうなことは、男子より婦人の方が其機會が多い、何故かと云ふと、子供の能く有つて居る南京玉と云ふやうな玉や、豆類や、小石杯を過つて耳の中へ入れると云ふやうなことが非常に澤山ある、所が此耳の中へ玉が這入つたと云ふのは、何でもないやうであるが、是は中々危い話しである、先づ第一に此の耳の中の鼓膜を破つて這入る、それであるから反射性の變化を起し、外聽道に長く異物が止まつて居ると、所々に創がつき、又甚だしい時は、癲癇を起したり、或は化膿性の中耳炎となることもある、であるから、小供の世話をする婦人は、成だけ此邊に注意することが肝要であらうと思ふ、耳の中へ這入つたものはドノ醫者でも良く是を引張り出すといふ譯には行かぬ、外聽道の異物を無害に出すことは中々むつかしい、專門家ならば引張り出すけれども、時に依ると專門家でも出せないことがある、であるから通常人ではなか／＼出すことが出來ぬ、鼓膜を破つて中へ這入つたものは尙むつかしい、ソレから耳が痒い時に婦人は釵の耳搔で耳を搔く、此耳搔で耳を搔くと云ふことが、時に依ると非常に害をなすことがある、第一に餘り奥の方を搔いて、鼓膜を破つて仕舞ふことがある、ソレから又外聽道に創を付け、色々の出來物を起さすことがある、それから又耳搔と云ふものは取れ易いもので、搔いて居る間に途中で折れて、耳の中に止まつて仕舞ふ、私の病院に或る婦人がガラス釵の耳搔で耳を搔いて、其耳搔が耳の中へ折れ込むだと云ふのがあつた、私の病院へ來る迄五人六人の醫者にかゝつて、私の所へ來た時分は、もう熱が出て腦膜炎の症狀が起つたから、仕方がない見殺しにして仕舞うた、此のやうにガラスの耳搔で耳を搔いた爲に、病氣に

なつたと云ふやうなこともある、であるから先づ掻くには折れない釵、決して折れないと云ふことを見て、ソレから掻くのは無論能しいが、鼓膜迄行つてはならぬ、又餘り強く掻いてはならぬ、さうして耳の中に垢が溜つたならば、適當の方法を以つて、醫者の云ふ所に從つて洗ふのが宜しい、

生活との關係

是も婦人には少ないが、例令へば鐵道の運轉手のやうな、音響の烈しいがたく〳〵鐵道の響きやら、絶えず滊笛を鳴らして居ると云ふやうな職業は最も惡い、鐵道運轉手の耳は、往々其職業の爲聾となる、職業の中で鑄掛屋或は石屋、研屋など、云ふやうなものや、軍隊に於ても砲兵のやうな大砲の音を始終聞いて居る人は、多く重聽になり易い、であるから斯う云ふ風な職業に從事して居る人は、耳の病氣を惹起し易い、そこで強い音響の爲に聽神經が麻痺して、耳の病氣になるのであると云ふ理屈の了解が出來る、故に若し烈しい音を聞かなければならぬと云

ふ場合には、烈しい音の感ぜぬ様にしなければならぬ、即ち耳の中へ綿花でも栓めて置くが宜しい、烈しい大砲の音や、烈しい滊笛の音でも聞かなければならぬと云ふ時には、綿花を耳に入れる、雷鳴の烈しい時にも、耳に綿花を栓めると云ふ工合に、豫め耳に綿花を入れて、其音を直接に導かぬ様にしなければならぬ、無論職業によつて是を避けることが出來ないものがある、石屋、研屋、鑄掛屋などに向つて、職業をよせと云ふた所が、それはよす譯にも行かぬから、是非前述の如き攝生法を能く注意し、耳を大切にして職業に從事し、耳病にかゝる不幸に成るべく遠ざかるやうにしたいものである、

傳染病との關係

是は隨分澤山あつて、一々述べることはむつかしいが、極く簡單に述べやう、此傳染病、殊に日本に多くあるのは流行性感冒、麻疹、窒扶斯、實扶的里ソレから此頃になつてボツ〳〵出るのは猩紅熱、昔はないと云ふて居つたが、隨分近來は出て參つた、

其他近頃横濱わたりにある流行性腦脊髓膜炎、さう云ふ風な急性の傳染病、及び慢性の肺結核など、云ふ傳染病が、非常に澤山耳の病氣を起す、ソレで傳染病が耳の病氣を起すには、即ち耳が窒扶斯にかゝると云ふやうなものである、此場合には病毒が人體の血液中を通るのであるから致し方がない、又流行性感冒痲疹等の病毒も、亦同じく耳に這入つて此のやうな病毒を起すのであるからして、是は世に傳染病がなくならない間は、先づ人爲を以て防ぐことの出來ないものである、前述の通り世の中に傳染病が無くならぬ中は、耳病を絶對的に悉く防ぐことが出來ぬ、併し又間接にやつて來るのも澤山ある、即ち流行性感冒であれば、先づ鼻加答兒、或は咽喉加答兒、氣管支加答兒、或は痲疹猩紅熱でも、ソレにかゝつた人々を見ると、何れも多少咽喉鼻腔等の病氣を起して居ないものは殆どない、そこで耳と鼻咽喉を連續さする管が、呼吸に連れ、嚥下に伴ふて開たり閉がつたりして居るものであるから、鼻や咽喉わたりにある病毒が、其處から耳の中へ這入つて來る、扨て此の中耳炎と云ふのは、往々頭蓋内に這入つて行くさうして、腦膜炎と云ふやうな危險な病氣を惹起すものである、此の中耳炎療法は近來非常に進歩して、早く治療を加へればよく癒る、慢性になつたのでも癒る、併しながら場合によつては、どんなに手術を加へても、極く瞬間に頭蓋の中へ這入つて腦膜炎を造ると云ふやうなこともある、斯う云ふやうなのは治療を施す遑もないので、醫者も時としては救ふことが出來ないと云ふやうに、甚だ面倒であるから、成るたけ斯るイヤな病氣を起さぬやうにするより外はない、

◉有栖川宮妃殿下の御諭示　今回陸海軍將校婦人會總裁の任に就せ給ひし有栖川宮妃慰子殿下は、同會の前途に就き懇篤なる御諭示を下し賜はりしやにて、專ら將校婦人の德性を涵養し、將校遺族中貧困なるもの、若くは監督者なき子弟の教養に任するは勿論、普通婦人の入會をも歡迎し大に會務を張る方針なりと、

明治式閨秀交際家

日清戰爭の折には、澎湖島の占領に驍名を轟かし、日露戰爭の際には、鴨綠江軍左翼隊の指揮として、功績を現はしたる後備陸軍中將功四級比志島義輝氏の夫人は、名を雪子と云ひて、今年三十六歲なるが、三十七八年戰役中は軍隊の慰問に恤兵事業に八方奔走して、都下淑女界の一名花と歌はれたるは、交際社會に出入する人の能く知れる所なるべし、偖此の雪子夫人は、愛知縣名古屋の生れにて、同藩士稻垣安忠氏の女、今より十年前即ち二十六歲の折り、良人中將が尚大佐の時代に其の後妻として、比志島家に入りたる人なるが、良人は頗る放膽磊落の質にて、更に家產に意を留めず、かてゝ加へて、後間も無く休職となるや、家計いよ〳〵窮迫を極めたるも、夫人は先夫人の實子故義秀(三十二)次男義雄(二十七)外に一男一女ある上に美津子(二十)春子(十二)なんどの孤兒を預りて、これを養育し、良人に仕ふる傍ら、裁ち縫は更なり、賤き洗濯の數々まで、自らの手一つに引受けて、天晴れの良妻よ賢母よと譽めそやさるゝ中に、日清の和破れて、良人は復職の命に接したるも、佩ぶるに太刀なく、乘るに馬なき有樣なりしかば、夫人は喜憂こも〴〵至り、いろ〳〵と思案の末、二六時中一室に閉ち籠りしが、其の翌日直に自製の大日章旗に、比志島家傳來の名刀一文字と云へるを添えて差出し、天晴れ是れにて功名して給はれと、良人の前に叩頭したるは、中將の今尚折々交友に語る所なり、斯くして劍だけは漸くに調ひたれど、中將はなほ馬の充分ならざるを喞ちつゝ出征したるに、廣島に到着したる四五日を經て、珍らしき一頭の駿馬は、一馬卒によりて東京より廣島なる中將の許に達したり、是れぞ夫人が晴れの衣服は云ふも更らなり、指環、髮飾の數々まで賣代なして購ひたる馬なりしこと後に至りて知れたるが、偖今度の日露戰爭にも中將は鴨綠軍左翼隊の指揮官として出征したるは、前に記せる通りなるが、この戰爭中夫人は萬歲袋と云へるを二萬五千個ばかり自ら調へて、これをば悉く中將配下の軍人に贈りたるさへあるに内にありては篤志看護婦人會、愛國婦人會の評議員乃至幹事として軍隊慰問、遺族救恤の事に從ひまた鍋島侯爵夫人等の東洋婦人會の幹事として、種々の方面に活動し、或る部面に於ては大山大將夫人に亞げる交際界の立者として持て囃され此の頃にても幾多貴婦人の會合あれば『今日は比志島の奥樣は?』との質問は甲處乙處より聞ゆる程にて、まことに明治式の閨秀交際家と云ふを得べしとぞ、

女子教育の一注意

男爵夫人　後藤和子

子供を教育すると云ふは容易なことではありません、よく仕やうと思ふて却つて悪しくすることがあります、私の考では、子供をよく仕やうと思へば、まづ自分をよくせねばなりません、自分をよくすることが出來す、口先ばかり兎や角と申しても、何の役に立つものではありません、

私も妻として、母として多くの年月を經て參りましたから、妻として母としての不自由なことも段々解つて參りました、それで女は何うしても良妻賢母にならねばならぬ天職を持つて居るものでありますから、先づ差當つて、自分の娘の教育は、學校へもやらず、自分の手で、自分が不自由を感じた事に注意して、教育したいなど丶思ふた事がありました、併しそれに打かゝつて居ることも出來ませぬから、どうしても學校へ出さねばならぬと極めまして、さて學校へ出すとなりますと、何うしても今後は外國語を學ばして置かねばならぬ、他日役に立つ立たゝぬに拘らず、さあ入用といふ時に、中年になつてから御稽古がむづかしうございますから、子供の時に教へて置かねばならぬ、さうするには外國人の女學校に入れるに限る、ところがそれも一利一害で、子供のうちから西洋人につけて置くのも、あまりよくないと思ひまして、華族女學校へ入れることにしまして、唯今小學科六年級でありまず、華族女學校へ入れるにつきましては、同校は質素を旨として居りまするから、衣服も紬位のが多いやうでありますが何にしろ皇族のお姫様方から、何百萬石のお姫様も入學して居られる事でありますから、リボンでありますとか、蝙蝠傘、雪駄其外の持物まで、それに準ずるといふ譯ではありません、質素といふても程度問題で、兎ても私どもでは、それを見習はせる譯に參りません、そこで入學させる前に、他の贅澤品を見て、羨ましく思うたり、それをねだるといふ事は

せぬ、學校は華族と名がついても、木綿の着物で、
而も徒歩で通學が出來るならば、といふ初めからの
約束で、華族女學校へ入れました、

二度目の妻となるのでなく、初めての所に嫁さう
とすれば、その夫は年の上から云つても、さう收入
のあるべき筈がないのでありますから、そこへお姫
様育ちで嫁づいて、妻たるの務を充分に盡すことが
出來ませうか、臺所の立働きから、洗濯まで引受け
る考へでなければなりません、その覺悟を持たせる
に、學校へ絹布を纏ふて、車に乘せてやるやうでは
到底出來ない相談であります、人の幸不幸は、如何
に轉換して行くかも知れませず、夫が職務上意見の
合はぬ所から、潔く進退を決したいと思ひましても
妻たるもの丶平素の覺悟が薄弱でありますと、その
決心がにぶり、いや〳〵ながらその椅子にかぢり付
いて居らねばならぬやうになりますのは、誠に不愉
快な話ではありませんか、そんな不愉快な境遇にあ
つて美衣美食を恣にして居りますより、職業さへ

正當のものでありましたならば、心持のよい生活を
いたしまする方が、むきみ屋でも、土方でも、それ
以上ならば猶よい譯であります、さうするには常に
身を質素に持つやうにせねばなりません、それで子
供には木綿を着せて、臺所にも働かせ、衣服の繕い
もさせます、經濟の上から云ひますと、紬位は着せ
た方がよいのであります、在來りのもので無駄にな
るものもありますが、何うしても木綿を着せた方が
將來の爲になると思いまして、それを勵行して居り
ます、すると老人からは、それは餘り酷いではない
かと申されるやうな譯で、それを達てと申しますと
子供の面倒を見るに張合がないといふやうにも見え
ますので、少しは讓歩する場合がありますが、それ
を忍ぶのが親の慈悲であらうと思ひます、前に申す
通り、宅から華族女學校へは、あまり近いといふ方
ではありませんが、雨が降つても雪が降つても歩か
せるといふやうにして居ります、それを車に乘せる
癖をつけますると、不性になつて、門から外に出る

のも億劫になるやうになります、これを老人などは雨や雪の日は、私に知らせないで、車に乗せてやるといふ事をしますが、歩くものとしてありますから他所へ連れて參る場合などには誠に世話はありません、第一身體も健康になり、心は不自由に馴れて、貧富いづれの運を引受けるも、高ぶつたり、愚痴をこぼしたりする事のないやうに仕立てたいと思うて居ります、さうでありませんと、流行おくれを耻かしい事に思ふ心で、夫がをめ〱耻かしい事をして居るのを何とも思はぬ、物の輕重さへ解らぬものとなつて仕舞ひます、

如何に骨を折りましても、十七や十八で、貴婦人仕立と云ふ教育が出來るものではありませんから、贅澤な眞似をさせて、虚榮心の權化でゝもあらうといふやうにしてはなりません、また學校の教師にする考でもありませんから、學校の稽古よりは、毎日の家事に注意するのが大切であります、家庭の事は全然打捨てゝ、學校の點數ばかり氣にして居る人があります、私どもには更に譯が解りません、

一體日本の現狀を見ますと、人が大分不性になつて居るやうに見えます、その癖虚榮心は發達して居りますから、存外多くの人が生活難を稱へて居ります、お坊ッちやんと申すと、華族の子供のやうにも思はれますが、親の躾がわるいと、貧乏人の子供でも隨分お坊ッちやんがあります、例令へば宅へ生活のよくない所の若者を書生に置きまして、それが貧乏に馴れて居るから、萬事に氣が付くとか思ひますと、お客樣がお歸りに、外套を着せてあげるでもなく門外の車夫を呼ばうでもなく、ボンヤリして居ります、そこらを見ますと宛でお坊ッちやんであります、今少し物事に氣の付くやうにしたいものと思ふて居ります、それで子供には親の困つた所を見せて置くのも藥で、私どもゝ親が困つた昔話をして聞かすことであります、

富裕の家では子供に、出來るがまゝに四季折々流行に後れぬ、年にも似合はしきものを着せます、

子供はそれが當然の事と思ひ、自分の着て居るものが年相當なり流行物なりといふ事を合點して居りますから、貧乏の家の子供の衣服を見ると笑ふ、これは何も高ぶつた譯ではありません、自然に無心で云ふのでありますが、それ等も家庭敎育の一缺點であります、又貧乏の家の子でありますと、少し此縞柄は地味なと思ひましても、三四年も持越すつもりで着せる、それをよい衣服を着けた子供から笑はれると氣が僻みます、親い身になると世が世であればなど、口惜しい思ひがするのであります、併しそれはよろしくありません、矢張分限といふことを知らず識らずの間に子供に敎へて置きませんと、他日虛榮心の爲に身を過るやうな事になります（座談筆記）

○女敎師の淸國行　女子美術學校及び女子淸韓語學講習所の卒業生山口縣人阿部初野子(二十四)は、今回淸國泗川省順慶府廣安州の賢技學校へ敎師としし招聘され、良人阿部好一氏も、同地師範學堂に聘せられ、夫妻相携へて出發せり、

家事上の趣味

文學士　山本無極

人に風雅なくば、木に花なきが如し、妙味の過半は消ゆべし、たゞに果實を喫つて甘味を賞美するのみにては、人生の事、決して慊たらぬものなり、花を愛で、香を慕ひてこそ、風流の樂しみはあるなれたゞ厭まで食つて肥るは豕も能くす、飮んで徒らに躍るは龜の長所なり、人としては、今少しく高尙の趣味なかる可らざるに非ずや、

古しへより世を厭き世と云ふ、世は眞とに憂きものに相違なけれど、見樣によりては亦た樂しき世なり、如何に見れば樂しきぞと云ふに、其の美しき所を見て之を樂しむにあり、即はち風雅の情懷を滿足せしむるにあるなり、艱苦痛恨の苦々しき經驗に束縛せられ、四面の楚歌に氣を奪はれて、八方皆な敵と吾ながら心を閉づる逆運の際にても、少しく風流の餘韻を存して超然として裕に思はゞ、綽々たる樂

地はあるべし、情けある母親が其子に殺虫藥を飲ますとき砂糖を加味する如く、天地人生の人を苦しむるや、別に慰さむるものを與へて絶望するに至らしめず、人其心を殊勝にして平らかに思はゞ、皆な此の慰さめはあるものを、單に澁面して自から絶入らんとするは、風雅の素養なきが故なり、古來、名歌秀吟に哀れの調べ多くあり、即はち悲慘極まるの時其の眞心を歌ひ出でたるものなるが、若し尋常無風流の人をして同じく此の地にあらしめば夙に悶絶して死すべき程の境涯なるに、彼は之を詩歌にして憂ひを漏らすと共に、微妙くも別に樂境に逍遙し陶然として獨り慰さむるの餘裕を得たり、尋常の人の決して得べからざる所に非ずや、

此の風雅の樂しみなき人は、肉慾に溺るゝを常とす、人間、何事かの愉快なかる可からざればなるべし、世は文明に進むと云ひ、人は紳士貴婦人と稱えらるもの増加する如けれど、好樂の下賤になりゆくぞ驚ろくべし、心の調子次第に低くなり行ては、品格と云ふものもなく、綺羅綿繡を着かざりたる男女等が、酒地肉林のほとりに狂亂する浮世畫ばかり見る心地す、心ある族には定めし不愉快の事なるべし

斯る變遷の元因には、家庭に風雅の好みの減せしことを其一つに算せざる可らず、凡そ、趣味の素養は、主として家庭の薫化を賴みとするものゆゑ、此所ろの風流の心得は、切に吟味せざる可らざるなり

但し、風流と云へば、直ちに贅澤の如くに感じ、偏へに道樂三昧と見做すもの多けれども、そは甚しき誤解なり、費え多きは奢りにして風流にあらず、惰け氣性は怠たりにして風流にあらず、分に過るは法外と云ふ、誰か風流と言はんや、殊更に飾り、わざとらしき餘裕を示して、こと〳〵しく遊び興ずるを風流と言はんや、風流は、襤褸の中にも、貧乏の中にも、俗務忙殺の中にもあり、即ち、風流は心の中にあり、分に應じ境に適して、雅びやかなる情懐を遣るこそ風流の粹とは言ふべけれ、風流に拘泥して、其の形に誇らんとするは、俗中の俗なり、俗人

自然に風流の心掛ありて自から風流たることを知らざるものあれど、自から風流がりて風流を殺しつゝあるものこそ極醜なれ、

昔し、楽翁公は曰く、ありか定めずさまよひありく行脚のもの丶風流もあり、堂々たる諸侯の風流もあり、農夫の束帯したるが風流にもあらず、諸侯の鄙夫の衣を着、鄙夫の住居にすみたればとて、風流とは云ふ可らず、夜もすがら月に向ひて入さの山の端ながめあかしたるも風流なるべけれど、諸侯は寝るにも時刻の定まりあれば、はや丑時刻至りぬれば名残惜しき月を見すて、戸推し立て丶寝るが諸侯の風流なり、諸侯數寄屋に反古などもて壁のこし張りたるは口惜し、得がたきほどの筆を裏かへして張らせんも如何なり、有ふれし文の反古するべきは貴人には似合はざることなり、たゞわび人のまねするは劇場なんどにて、女のまねし法師のまねするに異ならず、何んぞ風流清雅といふべき、宗易が千鳥の香爐を千貫にて買ひしは香りの様なれども、もと宗易は隠士にて世に何の勤めもなく唯だ茶のみ立つることを業とする人なるを、豊臣氏より釆地をおびたゞしく得たれば、もとより富足りてけるにぞ、親戚朋友をもさぞ救恤したりけむ、如何にしても黄金は餘りあるべし、又其風流を好む隠士、守錢の奴ともなり侍らじ、されば世に名ある器にて而も我心に叶ひたらば、千貫にて買はんも罪とは云はじ、宗易すら千貫にて買ひしとて、買ふまじきもの丶身にて買ふ人は、宗易の心を知らざるものと云ふべし、殊に宗易其の千鳥の香爐をかひとりて足一分ばかり高しとてすらせけるなんどは、凡俗の量り及ぶ所にあらず今の世の人は多く名にめで、實に善きか惡しかをも知らず、眞贋の差別も固よりなく、人頼みして鑑定を得て、二重三重の箱に入れて秘藏しぬる類は、宗易の千鳥の香爐かひ見しとは固より同日の論にはあらじ、十家の産とて露臺をやめられたる漢文の心を體せば千貫の半、百貫の半たりとも王侯貴人などには如何あらん、いかにとなれば、三年の貯なきは國

其國にあらずといふとて、諸侯封地多く賜はるは此等に財費やせとの事にはあらず、天下の御爲にこそ封地賜ひて藩翰となし玉ふならずや、されば第一藩翰の任よりして或は公に奉ずる用度、または臣民を養ない、荒政の備なんど、もとより一つも缺ぐ可らず、何の餘財ありて器にも及びなむ、それらの事も足りつくしたりとも、君の躬は臣民の教ともなれば下これより甚しき事あるは習ひにして臣民こぞりて無益の玩物に志を喪ひぬらん、左れば事たりたればとても又心得こそありぬべけれ、夫々の器とてもあながちに捨べきにはあらず、又あながちに求め傳へんとは露も思はず、賢者の持たりと聞かば、いと慕はしくも尊くもありなむ、夫とても其言行こそあれ牛滓存する器は貴とく慕はしき計りにて、强ひて求め得んとは思はず、まして茶人をや、かく言へばとて、衆に背きて人の尊とむものを態といやしみ、名物の茶人を唾壺とし、水さしを便器になすなどは、世に逆らひ人を撓ろかすの業にして、いとねじけたる心也、たゞ名物として、昔よりあらばあるに隨はん、なくば無きに隨はん、豐臣氏などの頃、高料の價を定めしは英雄の心にして、是らは今の人の知る所にあらず、たとへば軍功戰功あるに一つ一つ釆地を割與へんやうもなし、金與へんには英雄の士いかで悅ばん、故に斯かるものも其時の用を爲しゝにてそありけめ』と。凡そ風流を見ること、如此くにして初めて活眼ありとは言ふべけれ、

故に、戶々の家庭、其の格式、貧富相應に、風流の樂しみを味はひ、分に適ひたる淸潔に和らぎを爲さば、風雅の趣むきは自然に發揮すべし、奴僕をむごく叱り乍ら酒宴を爲たりとも、何の風流ぞ、侍べるもの過つて燈火を消したる途端、風、竹梢を拂ひ月光、窓に音してフトさし込みたるこそ面白けれ之にすら見惚れず、たゞはしたなく落度を叱るに、何の風流ぞ、

數枚の鹽せんべいを割つて分ち、番茶を酌みかはし乍ら語らひても、心に樂地あれば、一家の風流は

得らるべし、假令ひ、器具は足らず、裝飾は不十分なりとも其の配置を調のえたる妙味を掬しつゝ、團欒して之を樂しむときの心地は如何に、加賀の千代が風雅の樂しみは、物に足りての榮耀にはあらず、一輪の花、一杯の水、見樣、思ひ樣によりては、無限の風流となるものゆゑ、此の風流の見方、思ひ方を家庭の内に味ひしめて、以の其の薫化を施こさずんばある可らず、子弟、人となつてのち、索然たる無味の族となるは、必竟、幼時、家庭に於ける風雅の素養なきが故なり、よし又此の素養を與ふと言ひて、琴を學び、歌よむことをさせても、其の心の調子を麗はしくして、物の外に美を味はふの習慣を得せしめぬときは、修藝多年にして得たる所なし、たゞ〳〵藝の幾分を修めたる計りにて、心は依然として下賤なるべし、風雅の品格に何の價ひかある、玆になみ〳〵の家庭に一樣に施すことを得べき二三の例言を擧げんか、實際に風流を活かすの覺悟を試みに少こしく大方に問はんとてなり、

むかし、利休の尙若きとき、或日、庭の掃除を命ぜられしことあり、塵一つなき迄に奇麗に掃き淸めて扨て落葉二三葉をパラ〳〵と散し置きしが、之より其の天才は認ためられたりとぞ、劇場にて演ぜる鬼一法眼の智慧内も亦た此の工夫を施こしたり、庭前の掃除にもたしなみはあるものなり、

上り口こそ、入り來るものに感を與ふる最初の門なれ、之を取次の取次とは謂ふ、せゝこましく、窮屈に且つ無愛想なるは、其の建築方にのみよるにはあらず、はき物の片付け方、掃除の届き樣などに由ること多し、願はくば、この第一の入口にて、人に不快の感を與へまじきなり、

取次の人のしとやかなるは、家の光を增す、何程玄關を美々しくするとも、出で來る應接の人の見惡くきときは、毫も價値なし、敷居いかめしき邊りに溫柔謙遜の取次を見れば、陰陽照映じて、其美たとへん方なし、

應接の間こそ、心得ありたきものかな、あらん限

りの品物を骨とう店の如く列べたる西洋風を慕はんものは、兎に角、成べくは、優に、雅に、奥床しくありたけれ、但し、庭前、窓外、もしくは遠山の景色などの勝れたるものあるを差し措き、只管らに室内のみにて飾りを了へんとするもの多きこそ心小きわざなれ、若し四方の廣き景色あり、庭前に物ふりたる木立あり、全體のおもむき宏大なれば、此の廣き限りを家の裝ほひの中に取こめて、飾りを壯大にすべし、之れ活きたる風流なり、然るに、斯る家居に住ひ乍ら、徒らに古俗の雅趣にまね、風流は必ずしも一定せしものと誤まりて、わざと修飾を狹き家の内にのみ限り、観る人の眼界を屋外にもたしめぬこそ小膽と言ふべけれ、家もし富士を望むことを得ば、之を庭園内に取いるべし、窓もし隅田川を見下さば、之を床の置物とすべし、何んぞ必らずしも、軸と額とを以てのみ飾らんとはするや、元來、是等のものは、皆な已むを得ずして生じたる假作の裝飾に過ぎざることを知らずや、

すべて家内の飾りを餘りに綺羅びやかにする勿れこれ子弟をして、修飾に流れしむるの基ひなり、質實にして目あかぬものを重んじ、年ふりて光澤の次第に増すを賞美する樣にあらしむるを可とす、

家族團欒して自然の美を樂しむの趣向を佳とす、昔しは五節句、四時折々祭りは、主として時節の妙に合はせて天然の美を賞せるの便りとなせしことなるが、今の大祭日はもと歴史に緣みを深くし、自然の風景によりて割出したるものにあらず、左れば、よく／＼都合して、月、雪、花の佳節を計算し、豫じめ一家團欒の仕度をとゝのへて、十分に風雅の宴樂を爲せ。

たとひ親しき家族の間柄なりとも、禮はなかる可らず、禮も義の心よりして發するのみならず、美の感情より發すること肝要なり、卑き言語、賤しき風釆は一切嚴禁すべし、

不淨場の掃除に注意すべきことは勿論なり、之に出入するの心得を嚴そかにして、互ひに好品格を崩

すなかれ、取わけて、女性は此邊の用心尤とも細やかなるべし、
家庭共同の讀物、たとへば購讀する新聞雜誌の類には分きて撰擇を注意せよ、
食後もしくは夜な〱打よりての物語りの折こそ家庭の風雅を上品にも下品にもする機會なれ、屢ば耳にする問題は何事ぞ、もし、風影のはなし、花月のはなし、文雅美談の逸事など多からば、其家庭は自からにして風流の住處たるべし、

家事注意の二つ三つ

石川殘月

玄關を見て其主婦の品を知れ、とはよく人の申す言葉ですが、實に其通りで、一家の内は入口より厨の隅に至るまで、凡て其主婦たる人の管理の中にあるのですから、主婦たる人は常に勤勉と忍耐と周到たる注意とを以て、一家をよく治め、何事にも心を用ひなければなりません、來客がありました時に下婢が禮儀よく誠に丁寧に取り次ぎますのも、又面倒しさうに不行儀にとりつきますのも、皆其家の主婦たる人の常の心掛によるのです、斯ることに注意しませんと、交際上にまでも不都合を及ぼします、其から玄關の庭ですが、或家などに參りますと、片方の下駄は向ふの隅に飛んで、片々のは此處の隅に返つたまゝありましたり、二三日前の雨降りに用ゐた高下駄が天氣の良い日になるにもかゝはらず、其儘横に立てゝあつたりする家があります、中には、小供が多くて、某れまでは中々とゝかぬと申されるかも知れませんが、併し二三日もたちます中には、下駄の土を拂ふぐらひの時間の出ない事はありますまい、雨降りの翌日は之をなすことゝ定めて置きましたならば、必ず出來ませう、又小供は、遊戲にまぎれて、兎角下駄のぬぎやうなどには氣を附けぬものですから、小供が多くて行きとゝかないと云ふよりは、常々母として、よく敎へて置いたならば決して

さまでには至らないでせう、

家内の住居も　小供の無い家はともかく、小供のある處などでは、家内の平常の住居室を定めた方が宜いではありますまいか（ならば小供部屋として、又別に定めておきますれば、猶よろしいが、是は一般の家に實行することは出來ますまい）彼方にも此方にも玩具がとり散らされたり、縫ひかけの仕事が廣がつて居たりして、來客を見て、狼狽へてかたづけるなどは　誠に見苦うもありますし、又客にも氣の毒な思ひをさせまして、まことによくありません、甚しきは、座敷の椽側に小供の襁褓などを置いてあるのは猶更です、



椽前の庭なども、掃除をすれば可嘉の庭でありながら、紙屑や、絲屑が掃き下されたまゝ、半ば土に埋められて居たり、又折角其處この掃除はしてありましても、庭の木葉は烟がまひて居る樣に蜘蛛の巣にからまれて、心地よい綠の色は見ることも出來ん樣になつて居ることがありますが、斯んなこまかしいことは、凡て一家の女たる者の心にすべきことです、萬事何事も清潔を旨として何時來客がありましても、狼狽へぬ樣にして居らねばなりません、

又主婦たる人には相應の美術的思想も必要かと思はれます、例へば、書物棚に就ても、眞直に並んでさへあれば良いとも申しますもの丶、赤色樣のクロースばかり一ッ處にありますよりは、處々に青色のクロースをとりませて並べた方が、赤と海老と、黒と青と、斯う並んで居るよりは、一寸見ましても美しく見えますでせう、斯んなことは極些細なことですが、やはり室内裝飾の一部分です、庭なども、餘地があれば、なるべく木や花を澤山に植えて、品よく作らなければなりません、室内にも、今頃よりは椿の二三輪とか、又もッと前なれば菊とか、桔梗とか、夏ならば朝顔とか、白百合とかの二三本さして置かれ度と思ひます、庭に花を植えたり、室内に飾つたりしますのは、來客をして手持無沙汰ならしめんのみならず、家内の者も、其花に對ひますれば美の思想をやしないますと同時に、愛らしいと云ふ誠に清い念が浮びます、此の愛と云ふ思での中には、怒りたいと思うたことも、悪い心も、皆頭を下げてしまいまして、自然平和な心を起さしめます、其上子女には、高尚な思ひを養ふ大なる助になると思ふのです、けれども外觀を飾ることにばかり重きを置いて、屛風一枚の後は塵芥溜同然の樣では、一層こまります、其故前にも申した通り、清潔と云ふことを深く心得られるが緊要です、

衣食のことは、勿論主婦の役に掛るのでして、之に由りて衛生上に大に關係を及しますから、一層心を用ひて、清潔に致さなければなりません、殊に衣服の仕事は、是非々々充分に心得て居らるべきです或婦人などは、一家の洗濯や、仕立物をば、まるで他人に賴んで、却つて誇り顔に話して居られるが、此は誠に不都合なことにて、女としては實に耻かしきことです、彼の歐洲の中で最も服裝の整つて居る君はゼルマンの皇帝であると云ふ評判をお聞きになりましたでせう、其は他の國の皇帝等は、大抵外に出しても、衣服を調達せさせられますが、ゼルマンの皇帝ばかりは、内に針仕事にゆきとゞかせられて

ある皇后陛下がおはすから猶さうです、之によつても、主婦たる人には、針仕事が必要ではありませんか、其にマア第一他人に縫つてもらうたりして不經濟ではありまするし、金を出してゞすら、さう度々縫ひ返すことも出來ません故、自然に汚れた物を着せるやうになりませう、さうすれば、只自分ばかりが笑はれるのならばまだも宜しからうけれど、良人や其小供までが、指さゝるゝ様になるのです、

其他に心得られたいことは、まだ〱澤山ありますが、斯様に何事も自分の手で致さうとするには一秒時の間も惜しまねばなりません、昨日は五時頃に起きたかと思へば、今日は又七時過になりても起きないと云ふ様な不規律では、とても一日に一つの事をもなし兼ねます、一家には、一定した規律を立てゝ、規律通りに行うたならば、決して無用の時間を過すことはありますまい、一週間の内にも、一日と同じく、ほゞ日割をして、此日には何をするとか、と云ふことを定めて置く方が宜いと思ひます、

凡て主婦たる者は、清潔を旨とし、秩序規律を正しく、良き家風を立て、家内には趣味あらしめ、誠實にして、快活ならしめて、家族の者に、己の家ほど樂しい良い處はないと思はしめる様に致さねばなりません、

染色と色揚の話

田部井竹香

「○唐紅に水くゝるとは」ハイありました「○紅葉の錦○神のまに〱」へイこゝにと、互に雌雄を爭ひ、奮闘激戰疲れに疲れて交綏し、暫時まどろむ夢の中、百人一首中錚々の聞え高き紫式部、赤染衛門、右近周防内侍、等四五の姫君寄合給ひ、互に打私語けるやう、

紫式部『今の海老茶式部だの、菫式部だのといふ蓮葉娘は、只文學だの、美術だのとて、主に不生産的の事業にのみ耽り、實業といふとは、絶えて顧みぬ

かゝる有様にては、とても戰捷國の婦人として、萬國に誇るに足らぬのみか、戰後經營として、孜々富强を增進しつゝある夫に對し、內助後援の功を上ぐる事の出來ぬは實に愧づべきとではありませんか。

との發題に、小野小町は引き續き、

小町『左樣ですよ。此の頃も、或る女學生が、下女に申付けて居るを聞けば、あの足曳の山の芋を買ふてよだの、千早振紙屑買を呼べだのといつていましたよ。如何にもあんな無益な枕詞や、掛詞など計り研究して居るかと思ふと、誠に心配で堪りません。

と申されけるに、周防內侍、右近の兩姫は、口を揃へて、

右近周防『これは止むを得ぬことであります。畢竟お互が、久しく平安の御世の恩澤に浴して、多くは詩歌文章の研究に身をやつし。彼れ等にその模範を示したからです、若し春秋の筆法でいへば、其の罪は實に妾共にありといつてよかろうと思ひます。されば如何にもして彼れ等に實業を奬勵し其の罪を償はんければなりません、

といひければ、一同も、

それがよろしう御座いませう。然しそれにしてもどんな實業が、最も彼れ等に適當しませう？

といへば、赤染衞門は特意氣に、

それはいろ〳〵ありはありますが、差當り妾の考には、彼の海老茶式部や、菫式部などが、最も好むは色彩でありますから、色に就て研究させるのがよからうと思ひます。即ち染色や、色揚法などと實習させるのは、實業思想養成の上に、大層効果があらふかと思ひます、

との事に、一同贊成して、

妾等素より其の智識のないでもないから、先づ其の講習會を開き、各々卒先して講師となり、說明の勞と執りませう、

とて、先つ其の下調べにかゝりけり。されば小野小町は、まづ染色の目的につき申されるは、

小町『染色の目的は、是初染料を水に溶かして・或

る適當のしかたで、纖維を染めた後に、水にとけぬ物とするのであります。即ちぬれにぞぬれし色は變らじ」といふ樣にするのです。此のしかたに二種ありまして、一を浸染法といひ、一を捺染法といひます、捺染法と申すのは、忍ぶ文字摺などといふ染め方ですが、之れには、型紙だの、糊ベラだの、其の他いろ／＼の器具が要ますから、一寸行ひ難いから之れは暫らく後にして、主に浸染法に就き、御話しを致しませう、

又同じ色を着けるにも、「ペンキ」屋や、畫家のなす事は、塗色法と申しまして、完全に纖維に着けたものを、染色法と申します。更にくはしく申せば、塗色法は機械的で、染色法は、化學的です。染色には、染料研究が必要であります。染料に、天然染料と、人造染料とありまして、更に天然染料中に、植物染料、動物染料、鑛物染料、があります。人造染料には、鹽基性染料、酸性染料、直接染料、アリザリン染料、雜屬染料等があります。

◎植物性染料　は、其の種類が澤山ありますが、其の第一は　藍

であります。藍は古來本邦に產しまして、其の種類に、蓼藍、山藍、等があります。琉球、阿波は、其の產地です、藍の葉より製した玉藍を、藍瓶の、中に入れて、醱酵させるのを、俗に立てると申します其の立て方の、日本で行て居りますのは、玉藍、十貫匁計りに、石灰八合、小麥糠、一升二合、冷水五斗、木灰(吉田灰といふ)三升を加へて、よく攪拌まして、一晝夜捨置き、温湯七斗を加へて、消石灰を、中石、止石、といふて、少量ヅヽ二回加へて三日程經て、使用致しますのです。

精練漂白の濟みました糸類を、藍瓶に入れて、藍液を吸收させて、後絞り、空氣に曝すと、纖が還元して白くなつて居るのが、酸化して青藍が纖維の中に沈澱し、染まるのです。色が薄ければ、繰返すです。染め上げた後、大量の水を、硫酸の少許を混せ

液の中に通し、後清水の中に通すと、日光に堪ゆる藍色となります。

右近「一寸伺ひますが、只今藍の稍淡いのを、はな色といひますが、あれは貴孃の御歌の意の如く、花が移つて、青褪めた處でせうか。

小町「いへ／＼さうではありません、あれは縹色の略であります。縹は青い色のもので御座いますから。さて是からは、紅の御話ですよ、紅の事は、赤染衛門樣か、周防内侍樣が、お委しいでせうから、どうぞお代り下さいませ。

赤染「イヘ／＼矢張小町紅とか申して、小町樣はお委しいのですから、どうぞ、今少しお續け下さい。

小町「そんなら序に、今一つ二つ申しあげませう。

紅

は一にくれなゐといひます、くれの國から來た藍といふことでせう。それば昔くれなゐは、今の如く眞赤のものでなかつたでせう、併し韓紅といふはそれが更に韓國より來たのであらう、此の韓紅は、非

常に赤い色であつた樣です、龍田の川の紅葉が水をくゞつて流れるときの樣に非常に鮮で赤いのをいふのです。

紅花は本邦羽前羽後などに產します。普通餅紅といふものは、花を練り固めて蔭乾にした物です。先づ之れで染める時は、最初餅紅を水に入れますと黄色な物が溶けて出ます、其れから「アルカリ」液の中に餅紅を入れますと、赤い色素が溶けて來ます、それに烏梅の酢を入れると、酸類であるから、紅色素のみ沈澱して來ます、之れを正味紅といひます。

絹や木綿を染めるには正味紅を「アルカリ」に溶かし、可染物を入れ、漸次酸を入れて、適當の色のとき引出し、水洗し、蔭乾にします。緋色染は最初鬱金で黄色に下染めをして、其れから前の樣にすればよいのです。

と述べ終りしとき周防内侍は傍より

周防「それでは、今の紅に次で、赤色の事につき、

妾も少し申し述べませう。

蘇枋と申しまするのは、熱帯に生ずる樹の名で、蛾形の小い花を開きます。その材の削り片を水にて煮たてますと紫色の染料を得ます、又その汁に明礬を加へますと、紅の少し黒んだ色に出ます。それから此の頃山邊の赤人様に承りましたには、茜は山野に生ずる蔓草で、その茎は角に葉と共に刺があります、秋に小さい白花が多く簇り咲きます、その根に赤の汁が多いので古來赤色染に用ひて居ます、產地は遠江だとの事です。

紫

紫式部『こん度が妾の番ですか、妾が申ますと、何だか些と可笑い様ですが、紫と申す色は古來我邦で最上位に尊重せられたのでありまして、朝庭の衣冠より僧侶の法服、藝人の諸器具等、皆紫の色を用ひるを最上等と致しました、併し染といふ色は、どの色が本色かといふことはよく分りません。古語にも紫の朱を奪ふを憎むと申す事がありますから、其の頃の紫は朱と大差がなかつたものと見えますね。只今でも紫紺とて極く濃い紫もあれば、菫色の如き薄くて鮮かなのも御座います。染料もいろ〳〵御座いますが、只其の植物性に屬したものは、紫根とて一年草で、高さは二尺ばかりの梅花に似た五瓣の小さい花がさきます。その根の皮が深紫色で、その汁を搾つて、染物に用ひるのです。安藝と備後とを本場とします。

鬱金

右近『鬱金はその形だんどく草に似た草で、秋葉の心から小さい白花を出します、その根が黄色の染料うこんなのです、この他黄色染料の苅安草、櫨樹、山梔子、蘖等かあります。次は黒染に用ひます「ログウード」の事は、御歌仲間の大伴の黒主様が専門でいらつしやるけれども、今日御出がありませんから、妾が代理で申し上げませう。

「ログウーデ」

は西印度と南亜米利加に產します大樹であります

之は「ヘマトキシリン」といふ無色結晶體のものがありまして、酸化しますと、「ヘマテイン」といふ黒色物體となるのです。之で木綿、麻、等を黒染するには、可染物の重量、三割の「スマック」の浸出液を入れ、翌朝、綠礬又に醋酸鐵液の稀薄なものに、三十分も入れると、黒くなる、今度に「ログウードエッキス」の冷液中に入れて、温度を上せて煮ること一時間計りで染まりますから、最後に水洗するのです。羊毛は重「クロム」酸加里の三分と、强硫酸一割を含む冷液中に入れ、沸煮、一時間の後、「ログウード」冷液中に入れ、煮沸ればよい。絹は、薄い硝酸鐵液中に入れ、二時間計りで引上げ、洗濯曹達液で洗ふ、其の法を五回も繰返し、鹽酸と、黄色血鹼鹽との溶液に入れて、青色とし、後水洗して「ログウード」と「フスチック」の浸出液の中に入れ、煮て染めるのです。後石鹼で洗うて、醋酸の薄い液に入れ、水洗せずに乾すと、光澤と鳴いが出るのです。我立杣に黒染の袖などいふこともありますが。

あれば、墨染と申しても、そんなに眞黒に染めるのではありません。即ち鼠色にするのです。鼠色は、前の方法で、薄くさへすればよろしいのです。

◎動物染料

「コチニール」

赤染右衛門『動物染料には「コチニール」一つであります。赤染染料で、只羊毛より外に用ひません。「コチニール」といふは、熱帶の植物「シャボテン」に寄生する蟲であります。それは、染め物の重量の六分の明礬と、同量の酒石英の溶液に入れて、一時間半も浸して置きます。後二割の「コチニール」の浸出液の中で、一時間許り染めるです。第一鹽化錫を少し入れると緋色になります。

◎鑛物染料 には、繪具の醋酸鐵（鐵漿）明礬、綠礬、等をも使ひましたが、近來餘り用ひませんかり、止めます。

◎人造染料 は、「コールタール」より製造するのです。此の種類は、前の分類で御話し致した通り、五

種類であります。先づ各種に就て、御話し致しませう。第一が

鹽基性染料

であります。これは、絹羊毛は、媒染なく染める事が出來ますが、木綿は、直接に染める事は出來ません。又「タンニン」酸や、吐酒石で沈澱します。木綿、麻の浸染法は、可染物百匁に對し、五匁の「タンニン」酸の溶液に浸して、十二時間の後、取出して、二匁の吐酒石と、極少量の鹽化「アンモニヤ」液に、三十分計り浸して、能く水洗し、次に二匁乃至五匁の染料溶液に入れて、六七十度の温度で、一時間許り染めるのです。勿論後で水洗はするのです。

羊毛、絹及び野蠶糸は、染粉の中性、又は酸性液に入れ、七十度位で、一時間染め、適宜の色となつた時、引出して、石鹼液で洗ふのです。色は何色でも同じです。

◎酸性染料　は、大別して「ニトロ」化合物、「アゾ」化合物、鹽基性染料の「スルフオ」酸化物、フタレイン」染料、の四つとします。

酸性染料は、媒染なくして、絹、羊毛は染められるですが、木綿は直接に染める事は出來ませんですから、木綿を染めるには、鹽基性染料で、木綿を染めるのと同じですから、略します。

羊毛を染めますには、適量の水に、濃硫酸三分と、硫酸曹達一乃至二匁を加へて攪拌して倘之に染料の三匁乃至五匁を混加して、羊毛を入れて、遂次温度を上せて、百度にして三十分間保たして置き、後引上げて水洗すれば、よいのです。

絹は、適量の水の中に、練液と、染料の三匁（百匁の絹に對し）を入れ、倘醋酸を入れて、三十分間六七十度にして、後引上げて、水洗し、猶微量の醋酸を含む液中に通じ、水洗せずに、其の儘乾かすのです。

直接木綿染料

は、媒染せずして、木綿を染められる染料です。之で染めるには、食鹽、硫酸曹達、炭酸曹達、炭酸加

里」等と一所に、染料を溶かすのです。之に染めたものは、薄き酸類に遭つて、變色しますが、「アルカリ」に遭ふて、原色に復します。

木綿の浸染法は、可染物、百匁に對し、三匁乃至五匁の染料を溶かし、其の中に、硫酸曹達一匁と、炭酸曹達五分とを加へて、一時間煮沸して、取出し洗濯曹達の薄き液で洗ふて、後能く水洗すればよいのであります。

又顯色々素といふは、「プリムリン」といふもので之で染めると、僅に黄色になります。之と亞硝酸曹達の液に入れますと、少しく褐色となる。それから、石炭酸に入れると、黄色となり、「レゾシン」に入れゝば、橙色となり、其の他、顯色劑の異るに依て發現する色が、變じます。

此の屬に、又硫化色素といふものがありまして、硫化曹達と、一所に溶かして、煮ると染まります。次は

媒染色素

であります。之は媒染劑がなければ、色が出來ない染料で、「アリザリン」染料とも云ひます。其れで媒染劑によつて色が變じ、「アルミニユム」であると赤色、鐵は紫、「クローム」は褐色、錫は橙色であります。その木綿の染法は、精練した糸を十倍に薄めた「ロード」油中に一夜浸し置て、後斑なく絞り乾かして、後色によつて種々の金屬鹽類の溶液に浸して、後「アリザリン」の一割五分を溶かせる洗浴中に入れて、三十分の後、徐々に熱して、一時間に七十度になして、再び「ロート」油に浸して絞つて、蒸箱に入れて蒸時は、其の媒染劑として用ひた金屬によつて、色が出ます。羊毛は、明礬と、酒石英との冷液中に入れて、一時間煮るのです。後引上げて水洗して、次に「アリシリン」の中で、十五分間染めるのです。絹は、羊毛と大差はありません、唯終りに第一鹽化錫の入つた石鹼液に入れて熱し、最後に水洗するのです。次は

雜屬染料

ですが、方法が面倒であつて、家庭的には、些と行はれ難い事が多くありますから、止めます。扨前に御話し致しましたのは、極簡單に、色素といふものは斯ういふものだ、染め方はかうするのだといふ事の大體を申しあげた計りで御座いますから、皆さんが、よくはお分りにならんかもしれませんから、實驗のとき、更に御尋ね下さい。之れで染色の事は、止めに致しませうか、

といへば、紫式部は、

紫式部『いへ〳〵まだかんじんの色揚の事が殘つて居ますよ。實に小町樣の御歌の通り「袴の色はうつりにけりないたづらに」とて、今の女學生は、只うか〳〵と袴の色の褪めるのも知らず、遊びくらして居ますから、實に見ともない程褪めて居ますよ。ですからどうか、夫れを少し色揚でもさせたいと思ひます、どうか色揚の法を、簡單にお話し下さい」との請に、赤染右衞門は、されば序に。

袴の色上げ法

をも、申上げませう。

先づ色の褪めた袴、即ち色揚すべき袴を解いて、よく洗濯せねばなりません。洗濯と云ふても、日本在來の樣な、石鹼を着けて、揉むではならぬ、石鹼液で、一時間位、煮沸て後、完全な水洗をして乾かせばよい。それから色上すべき袴の量目を見る事を忘れてはならぬ。

其の目方を量つた袴地百匁に對し、三匁乃至十匁の「タンニン」酸か、或は二十匁許りの矢車の煮出液の中に、凡そ一夜間浸し置くのである、無論液の表面に袴地が出てはならぬ、一夜浸した後引上げて後絞るのです、勿論此の時水洗してはなりませぬ。

そして袴地百匁に對し二匁の吐酒石（劇藥）と極少量の鹽化「アンモニヤ」を溶かした液の中に浸し置く、其の時間は、凡そ三十分間で、温度は五十度（攝氏）にして、置くのです。

偖でいよ〳〵今度で染めに掛るのです。先づ染法を御話して、其れから染粉の名を申しませう。染め

る前には、染粉を溶かさねばならぬ。先づ使ふ丈けの染粉即ち布百匁に對し三匁乃至五匁を別の小さな器に溶かす、水に溶け難い樣だつたら「アルコール」を少し入れると、善い、兎も角も、染粉が溶けたら漉過のであるが能く溶けてある樣だつたら、漉過なくてもよいのです。

其れで別器に水を入れ、其の中に、徐々に染粉を注加して攪拌し、其の中に袴地を繰り入れゝばよい然し眞正なる方法は、水を盛れる別器に、濃厚なる染粉の溶液を少量入れ、よく攪拌してから袴地を入れ、徐々に殘餘の染粉の液を加へ、後漸次に温度を上せて、攝氏八十度位にする、此の温度で三十分間程置き引上げて水洗するのです。

然し手馴れないと、よく染粉が吸收された所と左程よく吸はれない所とが出來て、兎角斑點に成り易いものです。此の恐れを除く爲には、酒石酸か蓚酸の極少量を溶かして加へると染粉が徐々に吸はれるから、決して斑點の生ずる事はない。

それで如何云ふ染粉が善いかといふと「セリスプライマ」結昌海老茶といふ染粉であります。海老茶は多く配合色でありますから。一々言ふことは出來ませぬが、配合色で、海老茶色を染め樣とする時は近所の染粉を賣つて居る所で聞くのがよろしい、「セリスプライマ」百六十匁、一圓四十錢位です。

紫の方は「メシールヴイオレツト」と云ふ、染粉である、紫の染粉といふても、幾種もありますから其の積りで、之も前と同じ位の價だろうと思ひますが、此等の染粉は、日本橋瀬戸物町の桂屋に行けばあります。

此れ迄述べた染法で行へば、決して褪色する恐れがない、夫から袴地は無論「カシメヤ」で話したのですが木綿にも完全に染まります。染粉さへ替へれば何色でも染まります、又釜や鍋で煮る時には、表面計りでなく、内部迄熱が通る樣にするが宜しいのです。

とかく懇ろに敎へ給ひしかと思ふ間もなく、夢さめて二三の歌牌枕邊に散亂するのみ。

幼兒の教育

鈴木清子

世に子を慈しまぬ親はあらじ、わけて母の慈愛の深きことは何にかくらぶべき、されどこのたふとき愛も、すぎては却りてまゝ其愛子をあやまり、思はぬ方に導く事の少からぬは口惜しき限りにこそ、近頃家庭教育の大切なる事は漸やく世の人に認められ大方の人々これに心を用ひらるゝに至りしは、いと喜ばしけれど、其多くは學校時代に於ける兒童の家庭教育にのみ重きを置かるゝ傾なれど、諺にも三ツ兒の魂と云ふ事あれば、幼きより心して敎へ導くこそ、いと大切ならめ、

小兒二三才ともなれば、はや己が欲する事は何にても強いて遂げんとの望みを起し、得られぬ時は、うち返り足ずりして泣きさけぶなり、これをたゞをてねると云ひ、小兒には普通の性質の如く思ひなし、まげて其心に從ひ、欲する儘に與へて其意を滿さしめ、却りて親の慈愛と思ひ居らるゝならん、故に幼兒の多き家庭にて、食物玩具等を與ふる時は、年長の幼兒をして、年少者に讓らしめ、又は年長者の所持品にても、年少者の望むまゝに、與へしむるの習はしを見る事あり、こは年長者にはよき敎育の方法なれど、年少者のためには、欲しと云へば得られ、泣けば其欲を滿たすを得るより、己がものならぬも強いて奪ひとらんとの、惡しき望みを起すに至る、かゝる心は正しからぬ性質の源ともなるべければ、二葉の中に刈り取るべきを、愛にのみ傾きつる親は、泣くてふ武器にはもろくも打負けて、其我儘を通さしむる故、果ては小兒に甘く見られ、年と共に茂りし我儘はいよゝはびこり、すべての事に、從順の心を失ひ、終にはやさしき母の手には持て餘すに至るあり、かゝる時に至り、我儘なる子よ、如何なればかくはならじとて、只管子の惡しき樣にのみ叱りつ

くるが多かれど、己が注意の足らぬより、かゝる惡しき性質たらしめしを思ひ出なば、中々に恐しき心地ぞせらるゝ、

されば泣きて物を求むる折には、泣き止むまでは與へぬ樣になし、又與へて惡しきものか、與へられぬものなれば、如何に泣きたればとて、必ず與へぬ樣にせば、初め苦しと思ふ事も、後には習慣となりて却りてたやすく、小兒も又泣きても得られぬものと思ふ故に終には思ひ止まるべし、

又小兒のまろびて、石につまづき、柱につき當りたる時など、石や柱をわるしと云ひ、打返して其子の泣くをすかすなり、こはさゝやかなる事の樣なれども、幼き心に復讐して思ひを晴らすてふ性質を養ふのみかは、己が過をば他にかづけると云ふ、賤しき心を生ぜしむる萠芽とてなるべし、己が過を隱し泣きて其罪を詫びぬのみか、果てはそは我ならず、誰の業にこそなど云ふ如き不正の性質も、幼きものゝわざなればと、大方は見過すが多かれども、かゝる事はよく〳〵戒めて、正直なる心を養ふべき事にこそ、

或人は、小兒に與へ得ざる物を目に觸れしむるは惡しき事よと云はるれど、余はしか思はぬなり、小兒のために一家の必要を廢する事能はず、例へば間食は小兒に害あればとて、來客に茶菓を供する習はしを破りがたく、食事の際も、大人の食物にて、小兒に與へて惡しきものもあるべし、すべて目に觸るゝ物は、何にても理非の別なく必ず得らるゝと、思はしむるは望ましからぬ事なれば、日頃より克己の習はしを養ひ、手に入れ難きものは見るとも欲しと思はざる樣に敎へ置かば、成長の後多くの誘ひに勝つべき階梯ともならん、

かほどの事位は、幼くとも分り居るべしと、大人には思はるゝ事にても、よく敎ふるは大切の事なるべし、又小兒は今敎へられし事をもすぐ忘れ、爲すまじと云ひし事をも、幾度もなすものなれば、其度毎にいよ〳〵懇に敎へ、苟にも怒り罵るべからず、叱

るべき時にもしばし耐へて、何かよき事を見出し、少しはほめながら前の悪しかりし事を教へなば、小児の心にもよく入るなるべし、或人の歌に

可愛くば五分の数に三分ほめ
二分はしかりて善き人にせよ

と、くり返し讀む毎に、味深く思ひぬ

手紙の認めやう

齋藤好糸

電話機使用のはじめには、色々と面白き話しが多くありけり、或る官吏が、長官の官宅より電話がゝりて呼び出さるゝ時、『クヤ／＼お前は何かエ』と話す聲の正しく長官なれば、『ハハ、ハイ』早速に應答しながら、暫らくお待ち下さいと斷り、チヨツキの上にフロツクコートを襲ひたりと云ふ實談あり、これは聲の近きによつて眼前にある心地し、愼みて容儀を正したる殊勝の話しなり、手紙を書く時の第一の心得は、相手の目前にて話しすると覺悟することにあり、此の覺悟なき故に、不當のこともあり、怠慢の事もあり、情愛の通ぜぬこともあるものなり、

先づ昔は、親しき間柄にても片苦しき手紙を認たむるが習ひなりしが、之も餘り宜しきことにあらず、平生の交際相應にして、眼前談話する格式を標準にせれば、過度の禮式に縛られて、親和の情を通じがたきこともあるべし、左れば餘り片くるしき事も善きことにあられど、當節の如きは又餘りに亂暴なり、目前に出でゝは、叮寧殊勝に談話すべき身を以て、手紙となれば、粗率狼藉なること以ての外の仕義なり、及ばざるは過ぎたるに及ばず、亂暴ならんよりは寧ろ叮寧過ろが優れり、今時の手紙の認ため方は、一段改良せしめざる可らず、

榎本子爵は、手紙を認むるに、特の外叮寧なる人なり、如何に短かき書面にても、卷紙を立てゝ走り書するなどの事は曾てなし、必らず臺上に正しく伸ばし、居ずまひを直し、一大事業に專心するかの體裁にて、謹んで筆を下し、緩やかに認ため了らるゝが例なりと聞けり、

こは何故と云ふに、子爵も元は亂暴の質にて、昔榎本釜次郎と云へる頃は、なか／＼手紙の書き方に注意するなどの事はあらざりしと云へり、函館より、軍艦より、當時勝安房守（後の海舟先生）許へ送られし書面多くありし由なるが、其後同家に訪問して談、其時の事に及びし時、安房守が一々保存されし當時の手紙を差出され、自分にて讀み返せば、文辭の亂暴、文章の錯誤、驚くべきほどにて如何に多忙の間に認めたりとも、之はまた甚だしき失體ぞと、吾な

がら慚愧汗顔をきはめ、此時より大に注意して以後は、文書の認め方に大層の用心を成すに至られしとなり、

佐久間象山が、吾書は後世に尊重せらるべきものなればとて、奉書紙の外には認ためざりしてふ抱負は必らずしも持たずもあれ、上下り、消し字、間違ひ、月日の落し、無用のくりかへし、軽薄なる空世辞の類に満ちたる書状は、他人とは言はず、後の吾身に再たび見せられしとき、誰か能く顔を真向にして、之を讀むことを得んや、

『忘れればこそ思ひ出さず候かしこ』など、小悧巧なる認め方が必ずしも善きことにはあらず、頼山陽の所云る『くさりと言ふなら巳かゆく、龜のうでには骨がある』の真純なる文言が遙かに優りたれば、手紙の文は飾れとは云はず、體裁を作れとも言はず、正に談話相應の標準によつて、眼前、其人に申すの心得を失なはず、尊長には尊長、同輩には同輩、過ぎたることなく、及ばざることなき、情愛圓満の文書を認めたきものにこそ、蓋し文書は人間交道の一大器關、和樂親睦の此上なき仲媒なればなり、而して女の文と云ふものは、取わけ其人となりと其たしなみとを露はすことの多きものにてあれば也、

本誌和歌兼題

三月（春風 春雨）　四月（山花 落花）　五月（更衣 小野小町）

茶亭の掃除

薪瓢庵宗水

天井及窓の芳竹等夏季は殊に蜘蛛の巣をかけ易き物なれば、掃除をするには第一番に是等の所々を箒でよく拂ひ落し、而して後にはくべき事（障子のみはたきてはく者多し）

障子をはたくに紙の處を打べからず、棧の塵を拂ふを専とす、

雑巾をかくるに一度拭たる計にては必ず其跡縞目つく物なり、桶水を清く取替へて清拭するをよしとす、惣して掃除は心なき下女下僕等に任せては行屆く物に非ず、主婦たる人自らなすべし、

庭の掃除は必草履を用ゐ齒ある下駄をはくべからず、雑草は根を堀りて扱去り、苔はおこすべからず苔上の木葉は竹串の長さ一尺計なるを拵へ置、夫にて突刺て拾ふべし、竹箒は苔を損す、

庭の掃除も又第一番は樹木を揺りて、落べき葉を

落し、蜘蛛の巣を去るには、必先虫の居る處を窺ひて、箒に掛て取、地に落して踏殺すべし、虫を殺さゞれば幾度とるも、逃去てやがて又巣を作るなれば必虫を捕て後に巣を拂ひ去べし、

苔なき所に掃きよせたる塵木葉と共に、土のへる物なれば、土ふるひにかけて掃たる跡へ土をまき、其上へ足跡のつかぬ樣に注意すべし、

砂地の處は箒目を入れて、波紋などを畫くもよし掃除仕上りたる跡にて、ちる木葉は其儘におくべし却て風情有て面白き物也、

石手洗は中を清潔に洗て、外の苔豆蔦等をおとすべからず、水は溢らして廻りの濡たるをよしとす、

打水の仕樣、先始に樹木に沃ぎ、次に地に打最終に石に沃ぐべし、石を先にし地を後にすれば泥の飛走り、石面を汚して見苦敷なるが故也、又枝折戸、柴垣なども泥のかゝりたるは、見苦しければ注意すべき也、

雪院は殊に注意して、平日客なき時にても掃除を怠るべからず、俄に借りらるゝ事もあるもの也、其時蜘蛛の巣、鼠糞等あり守宮の壁に這たるなど、甚心よからぬ物にて、主人の怠りの知らるゝなれば、いつ何時にても、能く注意して、清潔になしおき度きもの也、

次には毎朝煙草盆、火鉢を掃除し、灰吹には清く掃除したる跡にて、底に少しの水を入おき、吸空をはたけば直に火の消る樣になし、煙草盆の底には白紙を折て敷《此紙折々取替べし》火鉢は灰をふるひて、切炭をよき程に入置、廻りの灰をもり上て、ふちを絹布巾にてよく拭ひ、何時客あるも火を入るばかりになし置くべし

茶人の家にても客來て始に出すは、煎茶なれば、煎茶具をも毎朝掃除して備へおくべし、是等の事は茶人に限らず、いづれの家にても、兼て心得おくべき也、客を見て俄に火鉢、煙草盆を掃除し、手間取はまだしも、ろくに掃除も爲ざる物を持出すは、客に對し失禮極まる也、

臺どころ

霞袖女史

一種の折衷料理

胡蘿蔔、午蒡、椎茸等を細く切つて、各淡味に下煮をなし、それを牛肉の薄切（三寸四方位の）巻込んで、二ヶ所程干瓢で括り、玉子燒鍋へ胡麻油なりヘットなりを引いてその中へ轉がしながら燒き、他の鍋へ三等分の酒、味淋、煮出汁を煮沸て、その中でザッと煮て、二ッ庖丁して器へ盛る、

干鱈の櫻煮

干鱈を一晝夜ほど水に漬け、鰭を取り、腹部の黒皮を剝ぎ去りたる後、適宜の切身となし、ザッと湯を通し、煮汁を充分加へて鍋に入れ、煮つまる頃砂糖と醬油とをさし、後葛粉を少しばかり攪きて鱈にかけるなり、

午蒡酢漬

午蒡の大なるを、二つ或は四ッ切にして、竪は一寸程に切り、中心を少々も取りたる後、上皮を薄く剝いで鍋へ糠を少し入れ、それに水を混じて、此鍋に午蒡を茹で、柔らかくなりたる頃、水を移して晒し、次に沸湯の鍋に入れて、ザッと茹で上げ、後鹽と酢の中に一日程漬け置き、引揚げて皮目へ火取り青海苔をかけるなり、

鯖の押酢

鯖を三枚におろして鹽をくるめ、小深き鉢に入れ押蓋をし、重壓を置いて、二三時間置き、軈て取出して小骨を拔取り、三時間程酢へ浸して皮を剝ぐ、飯は普通の水加減に味淋を炊き込んで、出來たれば大鉢へ移し、飯一升なら酢五勺へ鹽二滴を合せて、飯へふりかけ、杓子で攪拌せ冷めて後葉蘭か笹の葉を敷いた鮨枠へ入れ、上へ前の鯖を並べて、押蓋をして重壓をかけ、一二時間經て取出して適宜に庖丁し、鹽酢に浸した剝生姜を添へて皿に盛るなり、婦人客に殊によし、



米國婦人と衣食

共立女子職業學校幹事　淀三樹太郎

米國には衣服を入るゝ、土藏といふやうな大袈裟なものはない、額其他の裝飾は立派であるが、衣服は四つ抽斗の簞笥一個位で事足り、晴着に常着などいふ區別はない、それは數百萬の資産を有する人で夜會服とか、交際服とかを作るのは別の話であるがそれとても入用なればこそ作るので、幾年も着ないで虫に食はせるといふやうなことはない、中流以下では大抵着のみ着のまゝで、火事に燒出された位の有樣、それで着られぬやうになると、慈善會などへやつてしまふ、夏秋の合服などをこしらへるのは上の部で、夏は白い金巾に、上は綸子で、上下揃うて三ドル位なのが通例、それを起るより寐るまで着て居る、その上に上ッ張をして働いて居るのであるから、應接所に行く時には、それさへとれば下は今着たばかりに見える、それから押入やうな所に外套は折釘にかゝつて居る、頸卷もそこにある、靴も磨いて其下に置いてあるといふ風であるから、用事を終へて外出でもしやうとすると、少しの煩ひもなくすぐに出られる、

すべて不用のものを集めるといふことをしない、一枚ですむ着物を二枚三枚こしらへて、一枚を寐させて置くといふのは不經濟といふので、大抵は一枚で押通して行く、そのうちに流行が變つて來る、それを二枚一時に作ると、一枚は無事の間に流行に後れる、流行は一進歩である、その進歩に伴はないで

は風采に關する、であるから着のみ着のまゝで、誠に心細いやうであるが、常に流行に伴ふ衣服を着けることが出來て、而も時間の上にも金錢の上にも塲所の上にも經濟である、米國はこの主義であるが、日本では食ふや食はずの貧乏生活をしても、中々衣服の數を持つて居る、上等社會では兎ても一生着つくすことの出來ないほど持て居る、であるから自分の嫁入した時に着た衣服を、孫に仕立直して着せるといふこともある、實に不經濟な話で、祖母さんが昔着たものを孫が着て可笑しくないといふことになれば、流行も何もあつた話ではない、この點に於ては大に着のみ着のまゝ主義が賛成である、それでこのことを米國婦人に語ると、それはよいが、日本の服を米國風に改めるやうなことはよくない、日本服は衞生的で、格構もよく、洋服が殊更に便利なる時の外は、どこまでも日本式にして貰ひたい、斯く云ふ我々も、日本服が優美にして申分がないので、それに改めたいと思ふ位であるが、祖先からの風俗を破るのは面白くないから、日本服を着けない次第である、日本人は猶更の事であると答へた、さて着のみ着のまゝと云ふても、洋服の事であるから、下着さへ取替れば、一年や半年何の事はない、その下着肌着は、頗る數多く拵へて、絶えず洗濯をして清潔にして居る、肌着は少々持越しても流行に後れるやうなことはないから、その洗濯の序に夜具を包むタオルなども洗ひ、着のみ着のまゝで、然も極めて淸潔な譯である、

食物は肉食によつて滋養をとり、食卓は客の有無に拘らず、分限相當の裝飾をなし、白き綸子の裂を掛け、コツ／＼音のせぬやうに、下に軟らかなものを敷いてある、それで食物を匕にする前に愉快を感ずる、實に食卓には和氣湧くが如くで、さてその仕度の盛んなるに似ず、極めて小食である、日曜日などには牛の腿肉を皿に盛つてあるが、それを細くそいて、主人が一同に渡す、外にはパンを二切位、日本人の我々のには、中々これでは腹の中に物が入つ

たやうには感じられぬ、出て居る分を、一人でも食へないことはない位である、裝飾はよし、一同歡喜の顏を呈して、その肉、そのパン實に美味であるが何さま腹に充たないものであるから、外の人々のやうに笑顏もつくれない、どうか一工夫せねばならぬ、そこで食事の時間を外し後で自分一人澤山の御馳走に有付きたいと思ひ一日それを試みた、米國では食事が前述の如く、極めて樂しい團欒をつくつて居るから、その時間を後れるやうなことを甚しく嫌ふので、少しばかり小言があつた、さて食事は濟んだ跡であるから、臺所で食はねばならぬ臺所には裝飾のある譯でも無く、皿小鉢なども取ち



らしてあるから、あまり奇麗なとも云はれない、併し皿に殘つて居る御馳走は、なか／＼豐富である、いざや腹の正月をしやうと云ふので、盛んにそれをつめこむ、それから何時もかういふ譯には行かぬので、肉の切方を考へて成るべく容量の多くそげるやうにするなど、なか／＼食意地の張つたものである、それとさとつた米國婦人は、大食するは精神上にも肉體の上にもよろしくない、成るべく滋養物を小食するに限るなど云はれたこともあつた、實にその通りで、馴れて初めて小食の利益をさとつた、これ等の話はあまり芳ばしいことでもないが、事實で

あるから述でたやうな次第である、すべて米國では食物を食ふ前に、眼をたのしませる、心をたのしませる、それから七をとるといふ風であるから、一せん飯屋の如き飲食店に行つても、それ〳〵の装飾を施こし、樂器を奏して居る家などもある、

露國婦人と祭日

瀬沼恪太郎

私はあちらに居る間、大方は大學の寄宿舍に居つたのですから、詳しいことは中々判らないのですがスウヤッキの節句のお話をしませう、

　このスウヤッキの節句といふのは、十二月廿四日即ち基督降誕祭の前日から、一月五日、即ち洗禮祭の前日まで十三日間の事で、この間は全露國人が、最も歓喜し、最も怡樂するときで、隨つて家庭の娯樂中その要めな時も實にこれと云つてよいのです、で、スウヤッキの間にも、いろいろ面白い事がありますが、取分け無邪氣で、而も詩的な、占事の興味ある風俗を述べやうと思ひます、

　さて露西亞の民間には、唯今も尚古代の宗教思想四季折々に隨つて生れ、成長し、結婚し、死するといふ樣に、時を追うて種々に變化してゆく神を信ずる心が、未だそれとはなしに殘つて居る、此神が生れる時は丁度冬、恰も太陽が天文學上夏の方に傾いて、日が追々に延びて來る時節、日本で云ふと、まづ冬至といつたやうな時で、これで見ても古代のスラブ人種が、明かにオリンブの神の一つであつた、ゼープス（太陽）を、如何に崇拜して居たかといふ痕跡を認むることが出來るのである、

　それで今も少なからず此風習は殘つて居て、殊に基督の降誕祭は、不思議にも古代宗教の神の更生節と、偶然ながら其期を同うして居るので、愈以ツて其風俗は相合するに至つた、

　この祭に就いての古代スラヴ人種の宗教思想を聞くのに、其日更生した神は地に下つて徧く四方を經

廻る、それ故此時期は最も神聖なものとして、凡べて通常の生活は玆に一轉するのであれば、此際に業務をとるのは其神聖を汚す罪であると信じられてあつた、そして此祭の前日夜半に、天門忽ちにして開け、彼の樂園はその秘密をあらはし、河水又新なる活動を呈し、花開き果熟し、幼き神々地に下つて諸の賜を豐かにする、と傳へられて居る、

降誕祭を迎へる風式は、小露西亞に最も多く古代の風儀が殘つて居る、其前日の夕刻、晩餐に就く前に、一家の主人はまづ聖像の前に燈明と蠟燭を捧げ夫から家族は擧つて熱心に祈禱する、それが濟むと清らかな布と、枯草で蔽はれて居る食卓に就いて、クチャ(麻、罌粟の實、桃の核などより取つた一種の乳汁)や、蜜などをかけた米麥等の飯と、又ウヅッルと名づける乾果の甘露煮を食ふ、この際必らず鷄に幾分をわけてやる、それが濟むとこの占事が始まるので、これがこの國の家々に於ける此上もない樂みなのです、で、何を占ふのかと言ふと、作物のこと、畜類の事は勿論、花婿、花嫁、親戚、知己とありとあらゆる物及び事の吉凶を見るので、これを夕暮の占ひ、夜中の占ひ、寢際の占ひの三つに區別する、

夕暮の占ひは丁度火灯し時に始まるので、村の娘等は群をなして街道に出かけ、自分に逢ふた第一番目の男を喚んで其名を尋ねる、そしてそれの答へたのが未來の夫の名だと信ずる、又窓外に佇立して内から漏れて來る話を聞く、そして其話の性質によつて身の上の吉凶禍福を判斷する、

それから面白いのは薪小屋に忍むで行つて、手あたり次第にその一本を引拔いて來る、でその薪が節滑かなものであれば好い夫、節瘤だらけなれば怒り易い夫を持つの前兆とするのです、其他にも夕暮の占ひにいろいろありますが、まづは似たりよつたりのもので、夜中の占ひはこれもいろ〳〵ありますが一番凄いのは鏡でするのです、これは妙齡の少女が鏡の前に立つて、身動きもせずそれを見つめて居る

と、次第に疲れて來て、軈ては興奮の餘り非常なる想像力がガーリユシナーシヨン（幻影）を生むで、その少女は未來の夫の面影ばかりか、その聲音をも聞くことが出來るとしてある、

寢際の占ひは夕飯の時何か鹽辛いものを喰べて、眠つてから喉の渴くやうにして置くので、さすれば其人は夢中に水を求めて、それを持つて來て呉れる人を夢見る、其人こそ自分の後の夫とし又は妻とする人だと傳へられて、露西亞人の家庭では、また一種の信仰に伴ふた娛樂、神聖なものとしてゐるのでそしてこれは大抵十二月の大晦日の晩にするのであります、

米國婦人と職業

我國にては女子の職業問題の起れる事、既に久しき以前よりなれども、女子にして相應の職業をなし居る者、今に誠に少く、人口に比しては何百分の一とも知れず、判任官の地位を得たる者すら、各新聞が爭つて肖像を出し、傳記を傳ふる事、少々心細き心地するなり米國に於ては、今より五年前の統計にて、女子の職業を有し、相當の收入を得つゝある者、五百三十一萬九千三百餘人ありて、是を人口六千六百餘萬の半分を婦人と見て、職業を有する婦人と有せざる婦人との比例大約一と六の割合となる、爾後五年の今日は正確なる數を算出するは困難なれども、先づ少く見積りても六百萬人以上なる可しと云ふ、然して此五百三十一萬九千三百餘と數へし五年前の統計に依りて見るに、此内一百萬人は農業に從事し、白人は材木運搬又は筏師百十三人は山樵を業とす、是等の特殊の技能なく境遇上得たる職業にして、三十二萬五千の女教師六千四百十八の女優、布教に從事する宣教師三千四百五名とある如きは、女子の特性を發揮せるものなる可し、次に聊か驚く可きは土木技師たるもの四十人、器械及電氣技師鑛山技師三人を數ふる事にて、外科醫四十四人、圖書館員三千百二十五人、會堂管理者二千八十六人、酒場番頭四百四十人などゝいふは、普通の事なる可きも、ずつと下つて百六十七人の石工、五百四十五人の大工、四十五人の漆工、千七百五十九人のペンキ職及びワニス塗、百廿六人の鉛氣細工人、二百四十一人の經師職、二人の屋根屋あるに至つては大の男跣足と云ふ可く、是等の人この首腦ともなる可く、百人の建築技師と、百五十人の受負師あるに至つては、愈々驚く可し、六人中一人の割合が、僅に五年の今日五人中一人の比例となり、男子の職業を一日一日に侵略する有樣なるは、米國に於ける實際の情況なる可く、此頃にては男子が電車汽車等にて、婦人に逢つても、一向席を讓らず、彼等は悲むべき婦人ではない恐る可き婦人だから、席を讓つて保護などせずとも好いと、皆な敵愾心を起す樣になりしなりと、

肅親王の家庭教師

此程蒙古の特爾圖王と同道して歸朝したる、北京肅親王家の家庭教師にして、傍ら淑範女學堂に教鞭などとりし成田よし子女史が、莞爾なる笑を湛えつゝ、赤坂檜町三番地の住居に、常世の春を擅き顔なる、蒙古より持歸りし眞鶴の長閑に遊べる廣庭を見晴しの客室にて語られし、清國婦人の俤など些か記さん、

◎和育女學堂　之が王家の家庭學校の名で、王の命名せられたもでのムいます、私の渡清したのが一昨年の一月で、三月から始めました、生徒は王樣のお嬢樣やらお嫁樣やら侍女やらで、ほんの家族の方ばかり時間は從來が不規則に馴れて居るので朝は十時から始めて居ります、

◎教育課目　は編物、造化、音樂、體操等を主にして、讀書習字など簡易なものを私の外に彼地の教師なども傭んでお教え致して居りますが、一番悦ばれるのは編物でムいます、之は眼で見て手先で出來る仕事で有るのと、一體に彼地の婦人は非常に器用なので、その結果僅々二ヶ年足らずの間に、編物などはお手本さへあれば、何樣な物でも出來る樣にお成なさいました、

◎愛情の深い事　王妃は勿論お嬢樣でも侍女でも、其愛情の深いお優しい事と言つたら、眞個に涙が溢れる樣でムいますよ一例を擧げますと、今度私の歸國致しましたのは特爾圖王樣と御一所に歸れるといふ好い便りがムいましたので急の思ひ立で有たのでムいましたが、その出立の前日、一番年上の廿歲と其次のお嬢樣とが態々お出で下さいまして、貴女は大變お母樣思ひだから、貴女の好きな色の服を拵へて持て來たから、日本へ歸つたら之を着てお母樣に見せて上げて下さいと仰しやつて、靴まで私の足に合ふのを揃へて下さいまして、若し身に合はないと不可ないから一寸着て見よと、寒い晩でムいましたが、無理に私にお着せなさるのでムいます、……ハ、來月下旬には出立致す心算でございます、

◎男女の交際　は深うは存じませんが、私の見る處では、餘程嚴格な樣でムいます、王妃などは一切男子に御面會なさいません……尤も彼國の例で王樣のお妾四人に、二十人のお子樣はございますけれど……

◎女子教育　北京に始めて女學校らしいものが出來たのは、前に申しました王家の和育女學堂でムいますが、其以來ずん〳〵設立されて只今では八堂ございます、生徒數は三四十名から百五六十名位で、何れも中流以上のお嬢さん達でございます、只今の樣子で進んで參りましたら、遠からず女子の面目を一新するであらうと存じます……」云々

マニラの女子風俗

坂本志魯雄

衣服は上流にては西洋服に土人服を折衷し、木綿の白い下着の上に、薄物のチョッキやうの物をつけ前は足首まで、後は裾を長く引ける袴をつけ、歩行の際には、後の長い分を提げて行くのである、チョッキの上には、麻の薄物にて襞のあるものを、肩か首にかけ、前に垂れた所をピンでとめる、中流になると襞のない、後へ裾を引かぬ袴を、日本の男子のやうにつけ、行動を自由ならしめて居る、下流社會市中へ出ぬ、たとへば北海道のアイヌの如き、元始時代の蠻風を繼承して居る民族は、布片で僅に腰部を纏ふに過ぎないのである、就中市中へ出て中流以上の家の下女などに使はれて居るのは、その家の體裁上裸體にして置くやうなことはない、

食物は上流社會は、西洋料理と支那料理の折衷したもので、各種の原料に必ず豚の膏を用ひて居る飯は米を用ひ、中以下にては、三度三度土の鍋で炊き、西洋皿に入れて、手づかみにして之を食する、尤も熱帶地の米故、煮てもザク／＼して手につくやうなことはない、食卓の上には手あらひ鉢があつて食物を手づかみにした手を洗ふことになつて居る、

住居は、家の建方は、日本と西洋の折衷で、支那風は少しもまじつて居らぬ、窓には鴨居敷居があつて障子を入れて居る、この障子は棧が細かくて、紙の代りに貝を張る、この貝は紙の如く薄い平らなもので四方を切ればそれで用ひられる、ガラスより貝の方が光線を避けるに都合がよいからである、戸も同じことで、左右に開くやうになつて、全く日本式である、斯の如く日本式なのは、日本人が早くから入込んだからであらう、豐太閤時代に、カドリックの僧正が日本に來て慈善を説き、不幸なる孤獨の移住をすゝめた、すると太閤は御願ひ申すものがあると云ふので、癩病患者を三百人送つたといふことである、これには流石の僧正も閉口したが、今更致し

方がないから癩病院をつくつてそれに收容したとのことである、その遺傳か今でも癩病患者は多いが、いづれも癩病院に收容して、世間と隔離せしめて居る、その後間もなく攝州高槻の城主高山右近が、このマニラに追放されたことがある、すると右近は家來を引連れて馬上で練歩き、宛で內地の殿樣風をふかしたものであるから、土人から亦ホロウといふ所へ追放された、そこで右近の臣下に刀劍をよく鍜へるものがあつて、兜でも鎧でも切れるといふ刀劍が今日まで殘つて居り、斯やうな風に段々日本人が入込んで、建築は日本式が多くなつたのであらう、それから最下層になると、日本で云ふと極めて風流な竹の柱に茅の軒、床も天井も梯子もすべて竹細工で上を覆ふものは悉く茅である、家の周圍には大抵バナヽを植ゑて、それを常食にして居る、上等社會の家は大抵二階建である、尤も三階といふのはなく、煉化石造は地震の烈しい所であるから、法律で嚴禁せられて居る、家は絶えず磨いて居るから、實に淸潔である、身體も同じく淸潔にして居るが、熱帶地故少しも溫浴をせず、家の中へ浴室をつくり、水道を引いて霧の立つやうに、瀧の落つるやうに、其他種々な仕掛をして水をとる、中流にては煉化又は陶器で小さな浴槽をつくり、それで洗ふやうにし、下層社會では大きな瓶へ水を入れて、それに浴するのである、人口は三十萬、上水下水の設備も可なりに整ふて居る、水を引けぬ所は井戸を掘り、多くは天水を飲む、天水を取る瓶の準備は、貧富の度によるのである、

上流社會の女子は往來するに馬車に乗り、歩くにはスリッパを穿いて居る、下流社會は跣足で歩き、腰へ赤きものを卷きつけ、買つたものでも、水を運ぶにもすべて頭の上へ置いて、身體に品をつくつて歩く風は、甚だ異彩を放つて居る、

宗敎はカドリックを奉じ、大僧正は總督の下、副總督の上に地位を占めて居る、そこで寺參りは中々盛んで、何かの折には盛裝して出掛ける、若き男女

の見合をなすも多くは寺である、然しカドリック教を信仰する所より、男女ともに節操は正しく、女子が處女時代に醜聞を洩らすやうなことは絶えてない職業は各煙草工場に於ける葉卷に、小學校の敎師位、官吏も、鐵道員も、商館員も婦人にはない、

風俗は歐米の流行を追ひ、ダンス、舞踏などが盛んに行はれ、就中交際員を傭ふといふ有樣、音樂は立琴、胡弓等で、婦人はなか／＼その趣味を解して居る、男子には大學があるが、女子は中學程度まで裁縫學校、舞踏敎習所などは盛んである、すべて歐米の短所をとつて、女權は盛んで、舞踏も盛んであるが、女に文學者はまだないやうである、

上流社會の樂みは、夫婦日沒前晩餐を終へ、馬車で公園を乘廻はし、公園の音樂堂にて毎夜演奏する音樂を聞く位のことで、それ以下の身分の人も、辻馬車を乘廻はして樂んで居る有樣である、

氣候は一般に四季の區別なく、一年を晴雨の二季に分ち、上半年を晴季といひ、下半年を雨季と稱し誂へたやうに、晴季は半年晴れつゞき、雨季は毎日ショボ／＼雨が降つて居る、米は二度も三度も收穫し、草花は四季絶えず美しく咲きほこり、茄子や瓜を一月に食することが出來る、菓物は蜜柑も柿もあるが、これは一年に一度である、併しバナヽは二度三度實を結ぶやうである、梅といひ櫻といふものは更に見受けない、暑い日には、日本では障子を開放して、風を呼んで居るが、マニラでは戸障子を閉切つて、暑熱の入らないやうにする、それであるから室內の温度は九十七八度位から下つて、寒い時は七十四五度止りである、

蚊と蠅と蟻とはマニラの三名物で、靴でも蟻に見付けられたら奇麗に食平げられ、木材でも軟らかのを用ひると、忽ち蟻の巣になつてしまふ、であるから鉋のかゝらぬやうな朱檀黒檀を漸く斧で削り、それを柱にも板敷にもする、さうすれば何十年でも保つことが出來る、その外の名物はマラリヤ熱で、他國から來る人は、必ず二三度は見舞れずにはすまぬ、その代りペストや虎列拉は少しもない、

在米日本兒童の敎育

在桑港　高橋瀧尾

私は是迄身に學んだ長所とては一つもない、至りて淺學、至りて不才、之に加ふるに精神至りて薄弱、是迄南越の片田舍に蟄居しつゝ、數年の間地方兒童の敎育にたずさはり、敎職の大任を帶びて居つたが、數年前から心竊かに感ずる所あつたので、唯に日本敎育に止まらず、進んで泰西の文物を吸收し、海外各國に於ける敎育の發展を視察し、聊さか日本敎育界に貢献せんとの、希望を抱いたけれども、余には天運なきか幸期未だ熟せなかつたが、たま〳〵余が實兄は本願寺から開敎師として、北米合衆國カリフオルニヤ州、サンノゼ市本願寺出張所、日本佛敎會駐在を命ぜられ、渡米する事になつたので、幸ひ此期失すべからず、我も奬勵一番と云ふ勢で實兄の渡米を幸ひ私が日頃の大望と、秘密の理想を語り、同航渡米する事を結約し、愈々渡米すると云ふ一段に立至つて、福井縣に於ては、余は余が實兄と同航渡米する事を聞て、一日余に托するに、米國敎育事情視察の大任を囑託せられた、此榮譽ある大任を囑託されたる余は、果して余が能力と過去の經驗とを以て、其重任を全うする事が得るや、否やに付て轉た心痛しましたが、余が個人としての渡米の目的も、此囑託を受けての渡米も、此目的に於ては何等相違する所なく、全く一致の目的なるを以て、今は甘んじて此榮譽ある囑託を請けた次第である、そこで私の心底眞意を知らぬ人は、彼此異議するでもあらう、如何に婦人の身ながらも、一度志を立てなば斷然獨立獨行之を斷行するの、勇氣を存せざるか、幸期の來るを待つの必要ないではないかと、一應御最な質疑ではあるが、余が出發の當時は、北米合衆國殊にカリフオルニヤ州は、日本人排斥の攻擊最も高く、男十ですらも自由渡航は困難と來て居る、まして況や婦人の身にして、單身渡航は至難の內の至難に屬するので、例ひ自由渡航を以て單身渡米するも、上陸の際腐敗せる或一種の醜業婦と同視され、若しも上陸を拒絕せられては遺憾なりとの、憂慮心から身を秘するに足るべき幸期は、實兄の渡航時期を待つたので、如何に淺學不才弱年なる婦女子とはいへ、絕對的に單身渡航が出來ない譯ではない、只つまらぬ事情の爲めに、日頃の大望を失せねばならぬ事になるのを、恐れての只一の憂慮に過ぎないので、勇氣活然たる 私ですもの、神功皇后 三韓征伐の轍を踏む 覺悟であつたなら、五千哩の波濤を踏破る位な旅行は、何でもない 業である、殊更そんな 勇氣比べをする必要もないが、余は 余が 實兄に 一名の事務補助員と 都合三名の同航者を得て、八月四日 橫濱發一萬二千噸のコリヤ號に乘じ、漠々たる 大平洋を橫ぎりて、同二十日桑港に 上陸し、余が實兄は一名の事務補助員と共に、任地駐在先なるサンノゼ市に 向つて出發し、余は 桑港明治小學校より聘せられ、敎頭の任務に、學校管理の責務を採る事に決したので、其後余が實兄は、任地サンノゼ本願寺出張所に駐在着任の上、會堂新築に着手し、東奔西走してゐるのである、上米は單に余が渡航の順序に過ぎないが、余は單に米國敎育事情視察を以て滿足する者でない、進んでは支那、朝鮮、布哇、印度、英、佛、獨の世界各國を漫遊して、海外に於ける敎育事情の視察を遂げ、聊か皇國敎育界に貢献せんと欲する、之れ余が人世最後

の希望である、余が渡米に付ての北米紀行の一班は、余が實兄の著に係る、亞米利加旅行記にも羅してあるから、今さら稿を改めて陳ぶるの必要を認めませんから、玆に之れ略し、二一天作の五と繰揚げて置いて、余が渡米上陸以來感慨に打たれたる、在米日本兒童の敎育に付ての、觀察の一班と、余が日頃の素見を述ぶる事に致しましやう、

申す迄もない何れの國に於ても、其國盛衰文野如何は、敎育の發展如何に起因するのでありまして、敎育の進步發展の如何を以て、其國の盛衰と文野の如何を察する事が出來ます、之は一國に於ける國家と、敎育の關係問題であるが、今は在米兒童の敎育に付て、以下論ぜんとするのである、そも米國に於ける日本兒童の敎育は、實に刻下緊急の大問題である、之は單に一個人の上より、且は一家庭の上より見たる問題でなく、米國に於ける日本同胞社界の一問題である、今しばらく余をして現在米國に於ける、幾多の日本兒童が被れる有ゆる方面の敎育的感化を、自由に觀察せしめ、自由に之を述べしめよ、余は唯に小學敎育のみを以て、兒童の敎育的感化を成すものでない、有ゆる社會の各方面から、兒童の一身上に被れる、敎育的感化である、兒童の敎育的感化は、小學敎育のみではない、社會の各方面から與ふる感化も、彼等兒童にとりては、至大なる敎育的感化となるので、實に恐るべくして、最も注意を要するのである、時として、此社會的感化は、彼等兒童に採りては、學校敎育よりもより多く、偉大なる感化を與ふる者である、然らば果して現在米國に於ける、幾多の日本兒童は、如何なる學校敎育によりて、又如何なる社會的感化を被り、養成されつゝあるか、是れ實に忽緒に附すべからざる敎育上の一問題であつて、否な國家の一大問題である、今や余が米國に於ける日本兒童の、敎育上に及ぼす感化を論ずるに先立ち、亦竊かに提供想起するものは、余が幼年時代に於て被れる、敎育的の感化である、余は故國の小學校には簡單ながらも、祖國二千有余年の精華たる歷史を學び、父母の膝下に親しく歷史の遺跡を尋ね、故山絕景の風物を樂みたるの記憶は、余をして今日偶々愛國の情緖を喚起して、春風秋雨懷國の情に堪へざらしむるのである、之はこれ必らずしも、幼年時代に於ける、小學敎育の感化のみでない、又た家庭の感化のみでもない、自然の感化と社會の感化、又與りて力あるのである、されば兒童の敎育は、四邊境遇の感化である、若しも其境遇が兒童の、健全なる個人的性格と、國民的性格を形るに適當なりとせば、兒童の敎育はそれのみにても足るのである、今余は米國に於ける日本兒童が、果して余の期待するが如き、社會の好境遇を有するや否やを檢するに、米國に於ける白人社會が、日本兒童に及ぼす感化は、寧ろ在米日本人社會が、日本兒童に與ふる感化の如く、直接のものにあらで、習慣を異にし、言語を異にし、風俗を異にし、人種を異にし、國體を異にする米人社會は、例ひ日本兒童に感化を與ふる事あるも、さのみ根本的のものにあらざる事は、余の斷言して憚らざる所である、

然らば余は此所に、幾多の在米日本兒童が、米人社會より被りつゝある、社會的感化、若くば敎育的感化に付て、多くを語らざるも、幾多の在米日本兒童が被れる、社會的感化の最も直接的にして、且其効果の最も至大なる、日本人社會に就ては、大に考察を要すべきものあるを信ずるのである、

余は必らずしも、在米日本人社會を以て、日本兒童の教育に、不適當なる社會なりと拒斷する者ではない、されど尠なくとも或る側面の觀察、即ち局部の觀察を以てすれば、在米日本人社會が、在米日本人兒童の教育に、資裕を與ふるの甚だ尠なきを覺ゆるのである、元より余は在米日本人社會に望むに、本國に於けるが如き、完全完備せる教育機關を以て期する譯ではないが、在米日本人現今の社會が、其兒童に與ふる感化の不備と云はんよりも、寧ろ消極的に惡感化を與ふる、社會を形作りつゝあるにあらざるかを、深く疑ふ所であつて、余が在米日本人兒童の教育上、日頃心を惱ます所である、

此缺點たるや余は元より、在米日本人社會にのみ其缺點を責むるは、最も過酷なりと信ずるので、何れの世何れの國に在ても、古今世界の歷史に徵して、所謂殖民地或は或る特種の目的を以て、遠く本國を離れ、異鄕の天地に一小社會を、形作る者の通弊として、常に最も缺如する社會的機關、若くば社會的制度の一は、必らず其一小社會に於ける、教育制度、若くば教育の機關其一である、之等の缺點は其社會が、或特種の目的を以て集合せる一種の團體、移民特殊の習風に起因するのである、けれども是等團體移民の一小社會に於ては、專に物質上の要求のみを以て滿足し、精神上の要求を熱望せざるに依るのである、古今萬國殖民の歷史を通觀するに、何れの移民社會に於ても、最も第一に特種の發達をなすものは、工業にあらで農業にあらで、商業制度の發達興隆である、而して此一小社會の商業制度、發達の裏面には必らず商業以外の缺如せる、社會的制度の附隨し來るは、免るべからざるの通弊である、

以上は物質的の缺如であるが、殊に精神的なる教育制度の如き、極端に迄缺如せるものゝ存するあるは、古今の歷史に徵して明白なる事實である、在米日本人社會は一種の殖民的一小社會である、余は此の在米日本人殖民社會が、其軌道を超出せずして、其社會の一局部に一の缺陷をも有せざるや、否やに付て深く心疑を夾み、在米日本人兒童の爲めに、將たまた國家の將來に、幾多の心痛を惱むと共に、一大理想を抱く者である、

既に知る社會は、渾一的の者にして、又た一種の有機體なる事は、之れ余の呼稱にあらで、現今社會學專門研究家の稱導する所である、然りと雖ども實際上事實の上に於て、余は社會が渾一的の發達をなさずして、片輪片翼の發達をなする者あるを、多々認むるのであつて、余が渡米上陸の當初觀察の結果として、第一着に余が頭腦を惱ませし者は、在米日本人社會に於ける、教育上に付ての一大缺陷それである、在米日本人社會に於て、物質上の發達は見事に一大成功を遂げて居るけれども、無形の精神上に於ける有ゆる方面の發達は、確かに一大不成功を來しつゝあるのである、物質上の一大成功たる商業の主義をして、一度教育上の主義として、混同混視應用されなば、余の甚だ遺憾に堪へない所である、

在米日本人社會が、最も注意を加へ、最も直接に關係せる教育事項の大問題は、在留青年學生の教制、如何の問題にありて、小學教育と家庭教育とによりて、薫陶せらるゝ日本兒童の教育上にあるのである、此等の日本兒童に對して、執りつゝある日本兒童教育の機關と、其主義は如何、此等幾多の日本兒童を教養し、將來國家の國民として、社會に恥ざる國民を養成すべき機關が、果して北米の天地

に完備せるや、否や、又た其教育上に及ぼす主義は如何、此二問題をして在米兒童父兄の眼前に提擧せば、在米父兄は此質疑に對して、果して完全なる回答を與ふるの餘裕ありや否や、想うて茲に至れば實に遺憾に堪ざる所である、在米父兄にして右の質疑に完全なる回答を與ふる事を得ざる限りに於ては、在米日本人社會が、孜々奮勵して國家の爲め、教會の爲め、在米兒童の爲めに完全なる發達と、其進歩の現著を期すべきは、目下緊急の一大問題である、余は今回渡米航海中にコレヤの大船に、同船渡航せる日韓美以教會監督、米國ハリス博士に會見し、親しく聞く所に依れば、日本に在留せる外國人は、其兒をして故國家庭の教養に、學校教育と其感化趣味を與へん爲めに、少なくとも國民教育を授くるの間、六七年間は其愛兒を本國に送りて、本國の教育と其訓化を授くる事に、注意しつゝありと、余は博士の此談話を聞て、實に敬服した次第である、之を以て見ても外人が如何に故國の教育を重んずるかは、其一斑を推知する事が出來るであらう、子を持てる父兄の心得として、さもあるべき事である、

茲に我在米日本人にして、子を持てる幾多の父兄にして、自己在米日本人社會が、完全なる教育を施す事を得るの曉まで、責めては外人の其顰に傚ふて、其愛兒の幼年時代、即ち日本國民教育を終る迄の數年を、本國に送りて故國の完全なる教育を受けしめ、以て故國の趣味を與へしむるか、然らざれば在米日本人が、一致協力して故國の教育に劣らざる、教育を施すに足るべき機關を設くるか、二者何れにか期せずんば、二世の青年は半身不隨の極に陷り、完全なる國民を養成する事は出來ない、隨つて將來國運の隆盛に一大影響を及ぼし、容易に之を改進する事は至難である、故國日本の教育制度は、決して米國教育に劣るものでない、否なむしろ完全の域に進みてある事を、余は斷言して憚らんのである、就中日本教育中、國民教育に意を用ひたるものは、恐らく列國に其比を見ざる所である、余は渡米上陸早々米國に於ける、有ゆる教育の方面に付て觀察を遂げ、初めて故國の小學教育が、米國の教育に數等優れる事を實證したので、故國にあつての豫想とは、實に想半に過ぐるのである、要するに故國日本教育は、國民の情性に統一を與へん事を以て、全力を注いだものであつて、教育上一點の缺損を認めんのである、故國日本教育は實に萬國に、其比を見ざる教育中の教育、其統を得たる者である、

上來述べし如く在米日本人社會に於ける、日本兒童を養成すべき教育、并に機關は全然缺損してある、勿論日本人有志の創立に係る、日本教育を施すべき學舍至る所に建設され、日本教育の施設に全力を極めて居るけれども、未だ完全と言ふを得ない、特に學校と家庭上の聯絡の如きは皆無であつて、余は在米幾多の日本兒童が此現狀に沈めるを見て、傍觀するに忍びないものである余は、茲に在米日本人兒童の教育現狀を觀察し、之が動機となつて永住の目的を起した余は永住の目的を以て、一身を在米日本人兒童教養の犧牲に供し、幾多の兒童をして故國に送りて、故國の國民教育を受けし者と比して、劣らざるの教育を授け、國家忠良の臣民として、完全なるの人たる國民を、北米の天地に養成せん事を期し、一日桑港日本帝國領事に會見を遂げ、余が在米兒童の教養に對する、日頃の感激と、在米日本童教育事業經營の大問題に付て、親しく謀した次第であつて、近き將來に於て北米の天地に完全なる、日本移民學校建設の擧を懇請した次第である、

米國奇談

工學士　長橋芝翁

御承知の通り幽靈や夢の話は何處にもあるものと見え、米國などでもソレハ／＼澤山あるのです、之を學術的に研究するのは別問題ですが、兎も角も見たか感じたには相違ないのです、先づどんなのが米國にあるか、一つ御覽に入れませう、

額にかき傷

ハーバート大學の教授ヨンアロイス氏が慥かに在つた事實だと保證する話はかうだ、

千八百七十六年に一人の旅行商人がミゾリー州セントジヨセフの太平洋ホテルに宿つて居て、商賣の具合も好都合いろ／＼要事の重さなつて來たので、丁度お晝頃自分の室になにやかとやつて居りましたお天氣は上々で、少しも幽靈臭い模樣もなかつたのです、サテ用箋紙を出して用事を二三行書き下すと、フアーツと誰か自分の左へ來て坐り、片手をテーブルへ上せた樣に感じましたからフト見返ると、どうです九年前に亡くなつた一人娘が其處に居るのではありませんか、しばらく見て居たがうれしまぎれに、マーどうして來たと娘の名を呼びながら手を握らうとすると、手答がない、オヤと思ふ内に娘の姿は消えてしまひました、どうも不思議だと云ふので次の汽車で歸宅して、それから父母や他の人の居るところで此話を致しますと、その人の父は氣丈夫な男で實驗家ですから、ナーニよい年をして馬鹿なことをいつて居ると、いはぬばかりにフヽーと吹出して笑ひました、併しその人が熱心に話をつゞけて、どうも不審なのは娘の額にかき傷のあつたことだと申しましたときは、サスがの父もソーカと聊か話に實を入れましたが、同時に母はスート立つて卒倒いたしました、漸く氣が付いた後、サメ／＼と泣きながら、ア、實にそのかき傷を知つて居るものは私獨りで、九年の間誰にも話さなかつたのだ、あの孫の死んで間もなくどうしたはづみか、私が誤つて額へかき傷

をつけたから、ア、氣の毒の事をしたとひそかにお白粉で其處をかくしたことがあつたと申しました、此人は名をいはんでくれと同教授に賴んだそうで名は知れません、

赤い切の下に七十圓

アイオヨ州アイオニア附近に住んで居た百姓のミケールコントーが、千八百九十一年二月一日に醫師の診察を受けるとて、デイビユークへまゐりましたところが、二日後にその人の死體がチエツフナフンハウスの離れ家にあつたから、早速不明死體留置所へ運んでいろ〳〵調べた上何住所も知れたので、白のシャツに黒の衣に着換へさせ、又黒繻子の足袋をはかせて棺に納めましたその足袋は丁度一つあり合せもので、その當時どこの店へ行つてもない品物だつたそうです、息子のパトリックはその棺を運んで郷里へ歸り、妹のクッヂーに父の死んだことを話しますと、餘りに驚いて數時間氣絶いたしました、勿論 妹は父の死骸を見ないのです、氣がつくとヤア

ー不思議だ〳〵今父に會つて來たと云ふものですから、皆がソレナラどんな姿かと尋ねますと、白のシャツに黒の衣その外見たこともない妙な黒繻子の足袋をはいて、之々と詳しく話したのではありませんか、而して全體父の古い着物はどうしたのですか、父の云ますにはあのデイビユークへ立つてから、鼠色の下着へ金を縫ひつけてその上を赤い切でかくしてあると、ナーニそれは今お前が氣絶して精神が錯亂した時浮んだ妄想だと、皆が相手にしなかつたが、獨り兄のパトリックはもしやと思ひまして先きの死骸留置所へ電報をかけ、アノ古い着物はまた其處にあるかと尋ね、あると云ふ返事を得て早速出かけ、一束になつた中から鼠色の下着を取出して見ると、ナル程眼の惡い老人でなければこんなに下手には縫ひつけられまいと想像せらるゝ程麁末ではあるが、チヤンと縫ひつけられて赤い切の下に七十圓の金があつたのです、

イヤまてよ

千八百九十二年一月廿六日の夜ニユーヨークでグリーソンとジョスリンが同時に同樣の夢を見ました、グリーソンの夢はかうです、

『私は二時と三時との間に寂しい薄暗い森へ來て、何となく恐ろしくなつて之は困つたと思ふ時ジョスリンが來て森の木を振つたのです、而すると其葉が皆火になつてしまつた、』

四日たつてグリーソンがジョスリンに會い、先頃私は不思議な夢を見たと話しますと、イヤマテヨ私



も四日前に不思議な夢を見たから私から先に話さうと云つてジョスリンが、

『獵や旅行でどうしても見覺のあるシーンとした森へ來ると、道から二三間も離れた所に君が何だか恐ろしいと云ふ樣な顏をして立つて居たから、そばへ行つて木を振ると其葉が皆火になつたと』話しますと、どうも不思議だと云ふので二人がいろ／＼その時の樣子を語ると、全く一つの夢をくり返す樣に合つて居るのです、その上ジョス

リンの眼を覺ましたのは三時に家の側を通る汽車の汽笛の音ですし、グリーソンは夢から驚いて眼を覺まし、時計を見たら三時であつたと云ふから慥かに時間も一所であつたらしい、

妙な事を聞くネ

千八百八十五年にシカゴのタイムス記者ウヰルキー氏が或朝、寢臺から出やうとすると、

アナタはエスデールと云ふ樣な名の人を御存じですかと、奥樣が尋ねました、

『お前は、妙な事を聞くネーそんな名は知らんよ』

『實は昨夜變な夢を見たのです、ミシガン湖水の岸に新しい棺がありましたから妙だナーと思ふて見て居ると、其上にエスデールと書てあつたのです、

それから二人が食堂に入つて朝飯をたべながら新聞を讀むとシカゴから八哩程離れたハイドパークのエスデールが見えなくなつたと出て居るのです、かの二人の驚きはどうでしたらう、其後二三日過ぎて其人の死骸が湖水から上がりました、此奥樣が夢を見るまでは誰も此事を知らなかつたのです、而して此婦人は記憶の好い人ですが前にこんな名を聞かなかつたそうです、

ゾーッとするうめき聲

千八百九十一年十月二十九日の夜半、セントポールの辯護士ワック氏がいつもの如く床へ入つたのです、最も讀書で大部疲れて居たのですが、ウト〱としてかすかに二時の音を聞くと間もなく、自分はセントポールよりデユルスへ走つて居る汽車の寢臺に在る心地、窓から月の光りで外の景色も能く見え、ハヽーあすこがシエルレーキの町だなど、此地方を知り切つて居るものですから獨りでうなつて居る時骨迄つき通る樣なゾッとするうめき聲がして汽車はばッたり止つた、何事かしらんと客車から出て見ると、レールは血に染んで汽車はまた最大速力で進行を始めました、眼が覺めてから始めて夢と云ふ事を知りましたが、餘り奇態だといふので翌朝五六人で此話をして夕刻セントポール夕刊新聞を見ると、

十月二十日デユルス發、今朝セントポールより來りしオマハ列車は血に染み云々と出て居まして死體の見當らぬことなども詳しく記されてあつた、其又翌日バオニール新聞を開けると、十月三十日シユルレーキ炸發、何人の死體か不明なれども四離滅裂になりて今日鐵道線路に見出されたり、一部分は百哩も先きにありし由、多分昨日の夜行列車にひかれたるものゝ如し、何處に起りしことか場所は未だ確定せず、

此等の記事の出ないズット先きに他の人々に話して置いたものですから、皆が不思議なこともあればあるものと驚かぬものは一人もなかつたです、

スーと戸を開けて

南ダゴタ州セントラル市のケルノハンが妻を亡つたのは千八百七十九年の十月でした、其翌年四月の或夜ニユーヨークに住んで居る其人の義母クランス夫人が夢を見たのです、大急ぎで旅をしてケルノハンの室へ來て見ると、ケルノハンはスヤ〳〵と眠つて居りました、勿論其室は見たことがないのです、而して居る内に自分の娘即ちケルノハンの妻がスーと戸を開けて入つて來て、睡つて居る夫をサモうれしさうにキツスするのです、氣がついたかケルノハンが手をのばして妻を抑へ樣とすると、羽でも飛ぶ樣に去つてしまひました、そこでクランス夫人は不思議に思ひまして、夢に見た一什始終を次の日曜にケルノハンへ手紙を認め、且つ寢臺の側にあつた椅子の背の骨が一本折れて居つたことを迄書加へて送りました、ケルノハンも亦同夜實驗したことを同じ日曜にクランス夫人に書きましたが、二人の書いたことが全く符合して、見たこともない椅子のこと迄その通りでした、

左の手をスーと出しました

メーン州グリーエルに居つたフアーマーと云人が亡くなつて後、或夜教授ドルベーア氏が其家に宿つたことがありました、此教授は名の知られた電氣學者で、又發明家であるが其實話は下の通りです、

其夜ファーマーの姿は能く見えませんでしたが、ファーマーと同室に居ていろ〳〵話をした夢を見たのです、その時君の聲丈では君だと云ふことがわからん、何にか證據を見せろと云と、ソーか私の手を見せ樣と云つて左の手をスーと出しました、その手を握ると丸で氷に觸れた樣に身がシン〳〵としてホツト眼が覺めましたが、又直く睡ると同樣なことをくり返したのです、今度は其丈けではまだ充分の證據にならんと云と、ヨシ〳〵と云て、第一第三指を直ぐにし、第二第四指を人の出來ない妙な曲げ方をして見せました、誰でも人の手を借りなければ其眞似は出來ません、翌日朝飯の時ファーマー夫人に夢の話して指のことを云と、夫人はフォークを落して熱心に聞いて居ましたが、ハヽーそれは夫が一ッの藝として居たのです、而して友人や知巳が來ると、どうだ此眞似が出來るかと云て常に見せましたと申しました、私は只用事のことでファーマー氏とは二三度しか會はないので、此かくし藝のあることは知ならかつたから實に實に驚きました、

よみがへり

カンサス州スキッデーのドクトル、ソキルツ氏が、千八百八十九年の夏劇烈なるチブス熱にかゝり、モーとても自分は駄目だ死期が來たのだと覺悟いたしまして、家族のものやら朋友に暇乞して靜かに寢るが如く此世を去り、村の敎會は鐘を鳴らして村民と共に哀悼の意を表しました、勿論脈もなく心臟の鼓動も聞き知れなかつたのですが、幾分の生命は殘つて居つたものか、四時間許りの後再び生て歸りまして其經驗を話しました、

ポンヤリと死骸の頭から拔け出で、形はナンダかクラゲの樣であつたらしい、而してシャボン玉の如くフラ〳〵と極めて輕く動かれるのです、半透明で少し綠色がゝつて居た樣にも感ぜられる、最も着物はないのだ、左の方をふり向いたとき家の入口に二人の人が立つて居た、自分の肘が其一人の肘と觸れたと思ふのにズーと入込んで別にさわりもない、丁

度空氣と空氣が一所になる具合だ、この人はどんなに感ずるかと思つて顔をジッと見て居ても平氣で、何の感じもないらしい風で自分の乘つて來た車を見つめて居た、その內に其處に自分の死骸を見出した、それこれしてナンダか旅行して山やら森やらを通りぬけた時、奇態な音がしてフト眼をさましたら此世へ再び歸つたのだ、

　ホンニうれしかつた

日本の幽靈物語りと大に違ひ、ウラメシイのを除り聞かないので皆罪の少ない面白い、中には滑稽のもあり、目出度のもあり總じて根性が善さそうだ、

或人はかう云ふた、此文明の世の中にそんな馬鹿らしいことがあるものかと、勿論馬鹿らしいかもしれない、又偶然の出來事かもしれない、何んとも知れないのだから又何とも云はれない、例令へは肉體と精神の關係が學術的に少しもわかつて居らないのではありませんか、人間の知つて居ることより知らぬ事の方がどれ程多いかも知れないから、幽靈と夢物語も其知らぬ部に入れて置いて、只どう云ふ事があつたかを聞くのは決して不利益でない積りです、

終にもう一つ今度は生きながら幽靈になつてしばし太西洋の荒浪の上で無事を喜ぶと云ふ、無線電信などの及びもつかないうれしい話をいたしませう、

コンチクチカット州ブリッチポルトに住んで居た製造家のウイルモット氏が、シテーオブライムリック號でリバプールから米國へ歸る途中、九日間は非常な大嵐でありました、

其人の句調をそのまゝ上れば、

「丁度九日目の晩でした、少し海もないで船のゆれ方も減じましたから心持よく眠りました、朝方になつて米國に殘して置た妻が、カビンの入口へ來ながら他の人が同室に居るのを見て、ナンダカ入り惡くそうにモジ〳〵して居ましたが、ツート私の側へ來てキッスをするやら肩をなでるやら、ホンに無事で居られ嬉しかつたと云ふて、私の生涯に見たとのない笑顏を見せました、眼が覺めると何にも居らない

のです」

『眠をさますと同室のタイト氏がニコ〳〵笑つて肘枕で私を見つめながら、イヤウイルモット氏スバラシイものだが、何號にアノ美人が居るのだい、君も餘りだよ、僕を前に置いてサあんな眞似をするのだもの、僕にもチトおすそ分けをくれ玉へナ、と云ふからどうしたのだと聞くと、初めはナカ〳〵云はなかつたですが、實は大きな眼を明けて見て居たと、すまなかつたネと笑ふ、その話が全く自分の夢と寸分違はなかつたのです」

『翌日ニユーヨークへ上陸して、それから汽車でウオター、タウン、へ行きました、妻が子供を連れ父母を見舞ふとて此處へ來て居ましたからです、妻と二人ぎりになると妻の第一の質問は船の中でアナタにお目にかゝつたが御承知ですかと云ふのです、而して次の話をいたしました、

『實はお天氣が餘り惡いので、道中どうかとソレハ〳〵一通りの心配ではありませんでした、アノ晩風は少しもないのだしいろ〳〵アナタの事を想像してウツ〳〵と眠つたのが覺めて居たのか知れませんが朝の四時頃アナタを尋ねに出かけたのです、浪は荒らいし眞暗であつたが少しも恐ろしい感じもなく、身輕にどし〳〵走つた樣でした、ヤツトあなたの黒色の船を見つけてデツキからコレ〳〵の道を過ぎてアナタのカビンへ來ると、誰か他の人が居るのでしよう、ナンダかきまりが惡るかつたですが思切てアナタの側へ行つたのです」

『私は妻の話を聞てそれからアレはどうだコレはどうだと質問いたしますと、全く見た事もない船の樣子をチヤンと云ふのですもの驚くべきではありませんか、」

○看護婦の營口行　營口同仁病院にては、今後看護婦には專ら本邦婦人を採用することに決し、差向き峰越チイ、田卷ヒトの兩名を採用したるよし、

久邇宮家の御婚儀

◎宮の御家庭　同宮家御本邸は京都市上京區に在り御當主邦彥王殿下(御年卅五)には、朝彥親王の第三子に渡らせらるゝを以て、梨本宮守正王殿下(御年卅四)の直ぐ兄君に當らせられ、賀陽宮邦憲王殿下(御年四十一)の弟君に在らせらるゝが、俔子妃殿下(御年廿九)との御間に、朝融王(御七ッ)、邦久王(御六ッ)良子女王(御五ッ)信子女王(御四ッ)を擧げさせ給ひ、尙ほ御邸には御弟君多嘉王殿下(御年卅二)の在しますありて今回の御慶事を擧げさせ給ふ次第なるが、尙は御兄弟として、稔彥王(御年二十二)の在しますあり、王の御兄君鳩彥王殿下の大御心によりて、朝香の新宮家を立てさせられ、御姉君篶子女王の壬生伯爵家に御降嫁遊ばされし事は、既に世の人の知れる處なり、

◎水無瀨家の門閥　近き程に久邇宮多嘉王妃殿下に上らせ給ふ靜子姬は、大阪府下三島郡島本村大字廣瀨百卅七番地に子爵水無瀨忠輔氏(五十三)と云へるあり、同村なる官幣中社水無瀨神社の宮司なるが、同宮は後鳥羽天皇、土御門天皇、順德天皇の三帝を齋き祀れるものにて、水無瀨家は同地に代々の舊家として知られし、其の上を溫ぬれば洵とに舊く、彼の七條院は即はち水無瀨家より出で給まへる事あれば、七條院より出でゝ、帝位に即かせ給まへる後鳥羽天皇は同家の御先祖とも申し奉る可き御系統なりと承はれり然れば水無瀨家に於ても、後世後鳥羽天皇を其の皇子なる土御門、順德兩帝と共に奉祀して水無瀨宮と稱し、禁裏よりは特に祿を賜ひて、歷代同宮の御守役を命ぜられ、系統連綿として今日の伯爵に至れるなり、

◎靜子姬の兄妹　當主子爵には、昨年中故人となられし夫人富子(四十二)との仲に世嗣仲正氏を首め、二男仲房氏、三男仲則氏、四男仲臣氏、長女靜子、二女雪子、三女秋子、四女春子の四男四女あり、世嗣は現に早稻田大學に、二男は京都中學に、三男は京都濟誠學校に、四男は山口商業學校に、夫れ〳〵通學中にて、二女の雪子姬は、先年伊勢大廟の冷泉宮司邸に嫁し、秋子、春子の兩令孃は、京都なる某小學校に通學中ゆゑ、實際同邸に居らるゝは長女の靜子姬(二十二)のみあり、

◎ヴアイオリンの名手　同姬君には、幼少の頃より早く御兩親の膝下を離れ給ひて、京都に赴かせられ、新烏丸の別邸より小學校へ通學し、一昨年春中京都府立第一高等女學校を卒業の後は、同市の家政女學校に教鞭を執り居らるゝ內、昨年母君の死亡さるゝと同時に、職を辭して父の許に歸られ、子爵を扶けて家政の調理に心を委ね居らるゝ折柄、圖らずも今回久邇宮家より御婚儀の程を申込まるゝの榮に浴したる次第にて、姬は小學校通學時代より、既に秀才の譽れ高く、高等女學校の如きも學蹟優等にて卒業されたる上に、洋樂の嗜み深く、尙ほも深く鍛鍊せんと、廣瀨の鄕より京都へ通はせ居たるに、宮家より御內旨ありしと同時に、全く外出を禁ぜられ、目下謹んで光榮ある其の當日の到らんことを待たせ給ひつゝありと、

英國の家政學校

わが國婦人教育は近來長足の進歩をなし、各種專門の學校は到るところに其創立を見るに至れり、然るに婦人が第一必要なる品性の陶冶、家政上の心得、整家の技倆、職業の撰擇、訓練等に就て、整然たる秩序なきもの、多く徒らにほとんど生徒が荷ひきれぬ程多量の學科と、ほとんど形式のみと思はるゝばかりのお姫樣式の教練のみにて、無意味に時間を消費し、其割合に成績上らざる感あり、

英國の特種學校にては、其組織のよく整ひたるは、手工、縫匠、編物師たるに適當なる教授方法を施し、專門技藝の發達を期し居るは勿論、近世學校事業中の最新課目の一たる家政學の教授にありては、特に意を實用に用ひ、かりにも學校と家庭との聯絡なき教授課目を置かず、生徒は白き胸掛を蔽ふ、日本ならば襷かけといふ風にて立働き、學校即ち臺所なり、仕事部屋たり、實驗室たり、理論二分の實際八分といふことになり居れるに拘らず、日本にては八分理論に、二分實際、其實際といふは單に教育は空論のみにては駄目なりといふ世間の非難に對する防禦の方法として、唯ホンの間に合はせに過ぎず、されば料理一つにても砂糖の入れ加減鹽の加へ樣、醬油のさし工合も難かしいことは、先生がコツ／＼とやつて退け、生徒はお孃樣式の懷手して、傍觀せるが如き奇觀なきに非ず、かゝるは果して實用教授として、効果幾干あるべきや疑はし、英國のはメートル試驗管にても、化學實驗藥品にても、何にても自づから手を下して、一々理論に叶ふや否やを試みでは已まず、先生も頻りに手を勞して實驗をなしつゝあり、かくの如くにして學校を出で家庭に入るも、少しも別世界に泳ぎ出でたる如き感覺なく、至極圓滿に成功を收め得べきものなり、學科の時間割も、わが國にては家政講義一時間、次の時間が數學、其次の時間が讀書と漸く生徒の頭に興味を生ずるや、忽ち他の學科に移るなど、甚だ忙しくして、一物に集中の連續せる「時」の觀念を失なはしむ、成るべくは三日間つゞけて洗濯の理論、研究、實際を試み、次の三日間は衞生、看護、次の一週間は料理といふやうに研究時間の餘裕を存せしめば、自然學科に深き興味を有するに至るべく、隨つて女學校出の生徒が單に形式にのみ趨りて、實地を輕んずる如き風を撲滅し得べし、英國女學校より比較して日本の女學生は、決して劣等なりといふべからず、或ものは大いに立優れ居るに拘らず、其成績の彼に比し遜色あるは、教授者に巧妙なる教案を作成する智識なきに因る、漸を逐ふて進歩せしめたきものなり、（宮川すみ子談）

文藝

女子と文藝

文學博士　井上哲次郎

女子敎育は段々振興して來る有樣が見えて、實際の成功は如何なる點まで至つて居るかは明かではないが、兎に角女學校の數が近來著しく增加して、女子の就學する者も日に多くなつて來たことは事實である、それで此事は大に我國の爲に賀すべきことであるには相違ない、併なから女子敎育の盛に赴くに從ひ、斯う云ふことを考へなければならぬ、即ち如何なる學問が女子に最も適當であらうか、又は男子と違つて、或る特種の學問を硏究する方が得策であらうか此邊の事に關しては十分に硏究を要することであるが、其の精密なる硏究は他日に讓ることゝして、玆には私の常に考へて居ることの槪略を述べやう、

今日男子の硏究して居る學問は、實に種々なる方面に涉つて居つて、學科の數も段々多きを加ふる有樣である、然るに斯の如く多くある學科に就て、女子が男子と同樣に一々硏究することが出來るものであるや否や、先づ此事は日本人たるものが今日考へて置かなければならぬことである、殊に多數の學科中、數學とか、物理學とか、或は其他自然科學の如きものは、果して女子に適當なる學科であらうか、之を深く考へて見ると、果してそれが女子に不適當であると云ふ斷定を下すことは容易ならぬことである、併しながら玆に斯う云ふことは謂はれる、今人間の歷史に遡つて考へると、隨分永い間のことであ

つて、何千年と云ふ經歷があつて、其歷史に由て之を察すると、今までの所では自然學科であるとか、數學であるとか云ふやうなものは、餘り女子に適當でなかつたと云ふことは明かである、それは今後總ての女子に適當でないと云ふよりは、寧ろ是までの歷史に由ると自然學科とか數學とか云ふ學科は、餘り女子の爲に都合が宜しくなかつた方であると云ふことは、事實が證明して居る、尤も仔細に搜索して見れば、自然學科などに於ても女子の研究した者が絕えてないことはない、又醫學などにも隨分女子が力を用ゐたこともあるやうである、併しながら概していへば文藝の方に於て、女子が最も成功して居る、それは文藝と云ふても廣く指して云ふのであつて、詩であるとか歌であるとか、小說又は繪畫の如きものゝ方面に向つて、女子は是まで比較的に成功して居り、且自然學科とか數學とかに比して、遙に女子の性質に適して居ることは明かである、唯極めて稀なる場合に於て、女子が哲學界に勢力を及ぼした事があつた、今其の著しい例を少しばかり擧て見やう、

先づ詩人としては隨分有名なる女子が古來現れて居る、第一グレシアの時にあつてはサッフォと云ふ女詩人が歐羅巴に現はれた、是は紀元前六百三十年から五百七十年頃の間に生存して居つた人で、レスボスと云ふ島に生れましたのであるが、當時有名の詩人で今日に至るまで文學界に名を遺して居る人である、唯惜しい哉此の人の詩は今日までソックリ遺つて居らぬ、否僅かに殘闕が傳つて居る位である、又サッフォの友人に女詩人で、エリンナアと云ふ人があつて、サッフォとは無二の友であつた、所が此エリンナアと云ふ人は十九歲で夭折したが、其原因は能く解らぬけれども、有名な詩人であるのに、斯樣に若くして歿くなつたのは誠に惜しむべきことであつたと思ふ、又サッフォと云ふ人も不幸な終りを遂げたので、それに付て、種々の傳說があるが、一々信ずる譯には往かぬ、併し其最後は或る水夫と戀意になつた處が、其水夫に見捨てられ、失戀の餘り

ロイカーと云ふ島の岩上から海に身を投げて死したと云ふが聊か信ずべき一説である、此くグレシアの時にありてはサッフオ、エリンナアと云ふ二人の女子が詩人として名を揚げて居ると云ふことは最も注目すべきことである、

それから、近世になつて名聲を博した女の詩人が歐羅巴に現れたが、それ等は玆に一々擧げない、併し第一流の文學者として世に現れ作家として名聲を博した女子があるから其一二を述べやう、一人は佛蘭西のアダムス、スタエルと云ふ女子で千七百六十六年に巴



里に生れ、千八百十七年即ち十九世紀の始に歿くなつたが、是は作家としてはなか／＼名聲を博した人で、當時の豪傑にも段々知合があつて、奈勃烈翁第一世なども其一人であつた、此女子の一生涯には種々面白い出來事がある、又佛蘭西ではジヨルヂ、サンと云ふ作家があつて、是は有名の大家で、著述も非常に澤山ある、次に英吉利にはヂヨーヂ、エリオットと云ふ作家があつた、此人も著述が澤山あつて男子も容易に及び難い程の大家

であつた、近世にあつては多くの作家が現れて居るが、私のチョッと思ひ出しましたのは以上の三人であつて、孰れも第一流の文學者と見て差支ない人である、尚ほ此外にもあらうが、一々捜索する遑がないから、唯今思付いた所の人を二三擧げたに過ぎぬ

又東洋にありても、隨分詩人小説家が女子の中より現れて居る、支那でも古來女子にして詩を巧みに作つた人が隨分澤山あると思ふ、就中漢の時に班婕妤と云ふ女子が巧みに詩を作つて其名を後世に遺して居る、又日本では歌に巧みな人又は作家として第一流の名聲を博した者が古來乏しくない、殊に王朝の時代では、女子の作家が男子を壓倒したと云ふやうの有様が見える、鎌倉時代になつても女子で優美な物語などを書いて、男子も及ばぬやうな文學上の著述を後世に遺して居る者がある、それで詩人として又作家としては女子が成功し得ることを歴史上の事實が證據立てゝ居る、決して想像でなくして事實が證明して居るのである、又畫家として隨分名を顯した女子が日本に於てもあり、又西洋に於ても能く捜索致しましたならばあらうが、未だ其の誰々なるかは私は見出すことは出來ぬ、併し段々是より後女子が斯道に研究を怠らぬならば、繪畫に於て成功する望は十分あらうと思ふ、既に日本風の繪畫で名を博した女子がある以上は、今後日本風の繪畫ばかりでなく、油繪に於ても成功の望みが確かにあると信ずるのである、今日までの所日本では油繪の歴史が短い爲、男子と雖も未だ數多くない位ゆゑ、女子の油繪に從事した者が割合に少ないのは勿論であるが此方面に於ての成功は明かに見えるのであるから、女子と雖も油繪に從事して大に力を盡したならば、必ず成功の望ありと申しても差支はなからうと思ふ

次に女子は音樂に於てどうであるかと云ふに、音樂に於ては西洋では第一流の地位に達した女子があるやうである、作曲の側ではどう云ふ人があるか一向私は知らぬが、多くは作曲の大家は男子のやうである、又樂器音樂では何如なる女子が名聲を博した

か、それ等のことは精しく知らぬが、唱歌の方では成功した女子が少くない、そうして或る種類の音聲は殊に、女子に適して居ると思はれる、今唱歌の方で成功した女子に付き、一二思ひ出したものをお話し致さう、

瑞典の人でニルソンと云ふ女子が唱歌の道に成功した一人であつて、曾て私が歐羅巴に居た時に、名聲譽甚と云ふやうな有樣であつたが、其頃ニルソンの唱歌の爲一珍事を現出したことがあつた、それはニルソンの誕生日を祝する時であつたか、何であつたか確かと記憶せぬが、兎に角ニルソンの何か祝の日に當つて、瑞典の都ストックホルムのグランドホテルの樓上より外に向つて公衆に只聽くことを許した、然るに常にはニルソンのやうな有名の唱歌師の唱歌を聽くには、可なり金を出さねばならぬのに、其日に限つて無料で唱歌を聽かすと云ふことであつたから、非常に多くの人が群集した、それで此グランドホテルの前の方は入江になつて居つて、隨分塲所も廣いのであるが、餘り雜踏で互に押合揉合つた爲多くの死傷者を生じた、

是は畢竟ニルソンが有名なる唱歌師であつた所から誰も彼も皆爭うて其の唱歌を聽かんと欲し、斯かる災難に遭遇したのであつた、其災難は悲しむべきことであつたが、之に依つても如何にニルソンが唱歌師として名聲を博して居つたかは蓋し想像するに難からないのである、又伊太利のバッテイと云ふ人が有名なる唱歌師であつた、是も全歐羅巴に名聲の轟いた人である、私は不幸にしてニルソンやバッテイの唱歌は聽かなかつたが、其他唱歌師の唱歌を聽いて感服したことがある、眞に音樂に達した人の唱歌を聞くと迚も鳥などの美音の及ぶ所ではない、鳥の音聲は單純なものであるけれども、人間の音聲を十分に練磨したものは一語々々一句々々金玉の如き音聲を發して來るのであつて、變化も亦多いのである、故に女子が音樂の側に於て成功する望みは十分あると思ふが、唯日本の女子に付ては少しく疑問

の存して居ることがある、それは何かと云ふに、日本では今日までの所單獨に唱歌を以て世に立ち、大勢の人を引着くるやうな場合が餘りなかつたやうであつて、其適例が未だ現れて居らぬのである、併し是より追々唱歌が盛になるに從つて、次第にさういふ經驗をするやうになるであらう、私も折々音樂學校に行つて音樂を聽いたが、器樂でなく聲樂は餘程其人の身體の構造に關係するやうであつて、殊にコンセルトと云つて多人數一緒に唱歌をする場合は、西洋の人の方が音聲の種類が多いかと思はれる、非常に細く高い音や、太く低い音が錯綜して起つて來ると、コンセルトが最も妙に感じられるが、日本人は未だ太く低い音を十分に出すことが出來ないかと思はれる、是は尤も男子の方のことであるが、今までは唱歌を學ぶ者が少ないからでもあらう、是から多くの人の中には、さう云ふ音聲を十分に發し得る者が出て來るか分らぬが、唱歌の方では今日の所では男女共に餘り成功した人がないやうである、此事に付ては音樂學校に關係ある斯道の人に段々問ふて見ても、矢張日本人は未だ不完全であると云つて居る、次に器樂の方は十分成功の望みがあると思ふ、此方は別段體格に關係のあるものでなく、殊に日本人は男女に限らず手藝は優れて居るやうに思はれる、さうして器樂は手の働きでやれるものであるから、勿論手の働きのみでなく耳の修練もなければならず、其他種々の事が關係しては居らうが、先づ主なるものは手の働である、して見れば器樂即ち『ヴワキオリン』『ピアノ』『オルガン』の如きものは、日本の女子が勉強して磨上げたならば、遂には西洋の音樂師にも劣らぬやうな人が出來て來るであらう、

折にふれて

文學博士　末松青萍

初春月

春は猶あさき汀に月おちて

水よりしらむ花水のはし

寺島村なる井上某の別墅に
古書畫を見て歸さ
歸るさは朧月夜になりにけり

小梅の里にひと日くらして
信濃なる清音の瀧のほとりにて
ゆき〳〵てつかれし駒はしばしとて
とむる木蔭にひゞくたきつ瀬

渡波離橋に得ゆかざりければ
時しあらば訪はむとひしとばり橋
過がてにすぐるわれな恨みそ

若葉つみ

小川直子

今年は例の年よりも寒さのゆるうて、雪もつもらねば、野邊の若菜もはや萌え出たりと語れる人ありけり、かゝる折しも、近きわたりの少女等三人四人とふらひ來て、何くれの物がたりするに、一人がいふ、今日は空の氣色もいと長閑なれば、逍遙の爲いづれにか行まほしなどあるに、さらば若菜摘にとて打連て、そことしもなく出行くに、道の程は急ぎつゝある野邊に至りぬ、此野はかたへに小高き岡ありて、常磐の老松影をならべて、綠の色を爭ひ、麓には一すぢの小川流れたり、淺けれど水いと清う下つかたは遠ほくて、汀には根芹ふさやかに生ひ出でたれば、少女等はこゝに下り立ち、枯蘆を分つゝ、袂のひづるもしらず、心をいれて、我多からんとふくつけがるめり、われも岡のなかからばかりの所、こゝかしこ尋ぬるに、まだうら若き嫁なのさゝやかなるを見いでゝ、摘めどもかたみに滿たねば、あかぬ心ちして、猶あさりあるくに、父子草母子草の僅に見ゆれば、なほなつかしみつみいるゝに、ありし昔のこゝろに思ひ出でられて、袂もうるほひぬ、やがて枯たる芝生の上に息ひつゝ、心を慰めむと、四方の氣色を見渡せば、北にあたれる遠山は、まだ白妙の

雪に埋れて、間近う見え、佐保姫が引渡せる霞の眉雪の上に二すぢ三すぢ打靡きたるなどえも云はず面白し、かくてこぼるゝ涙も少しまぎるゝに、彼少女等が嬉しさも籠に餘りて、こぼるゝ根芹の色にわらはれ、ほこらはしげなるまみのわたり打かをりて、わが傍により來つゝ、さゝえなどとり出でゝ、何くれとゝりまかなひつゝ、喜びあへるを見るに、心ゆく事限なし、おのれ盞とりながら、彼の古唐土の后か、芣苢といふ草をとり給へる古事かたりいでゝ、事なき世の長閑けさをいひ聞かせなどして、樂めるほどに、覺えず時も移りぬれば、いざ〳〵と催し立てこそ歸りしか

竹柏漫吟

佐々木信綱

夜の雨の名殘木立に露おちて
　朝月しろき湖そひのみち

夕づく日百舌鳥なく村を行過ぎて
　野道にかゝるたゞ一人かな

荒浪の勢ひ猛に寄せ來るが
　近づくまちて立つ鷗かな

山の湖氷れる上を馬ひきて
　老人わたる木がらしの風

さよ風は四つ手の小屋のともし火を
　さびしうゆりて蘆の穂にふく

つなぎたる舟底かろくうつ浪の
　音しめやかに水海くれぬ

櫓も光り櫂も光りて珊瑚船
　こぎ並め歸る春の日の海

おろかなる事おもひつゝいつも來る
　はやしの道のはてに來にけり

くれていぬる二十の春のゆくへ惜み
　そゞろひと夜を泣きてあかしぬ

八千尋のいはほうちうつ荒浪の
　あらき雄ごゝろなつかしみ思ふ

有明の月ほのしろし玉鉾の
　道におちたる黄楊の小櫛に
白かばに杖さしかはすから松や
　何をか語るさむき谷間に
島の家に火はともりけり夕もやの
　磯にたつ我影見ゆるらんか

女子の技藝に就て

梶田半古

近來女子敎育の盛んなるに從つて、裁縫、造花、刺繍、編物、音樂、繪畫、茶の湯、生花等も女子の技藝として、大に歡迎せられるやうになつた、實に女子が是等の技藝を嗜好するのは結構なことであるが、成るべく應用のひろい、傍ら實用に適するものを學ぶがよい、如何なる人でも、裁縫とか割烹とか云ふものは無論必要であるが、茶の湯・生花などはさう實用とも感じられない、殊に私は、頗る俗なる不實用の技藝として、之を敎へることを好まぬ、昔の人は、茶の湯の道は奥床しい高尙なるものとして賞翫し來つたのであるが、何故に奥床しいか高尙なものであるかゞ解らない、尤も不自然な動作をして、衛生上から云うても、在來のまゝではよろしくない、又生花も、自然の植物を不自然極まる振に生けて賞美して居るやうであるが、それでは折角の植物の美點を失はしむるもので、これも實用の技藝として推選せられぬと同時に、又美術に叶ふものでもないと信ずる、

繪畫は婦人の技藝として、或程度まではよいが、それ以上は不適當である、繪畫といふものは、男子でも其神髓を解し、其堂奥に達し難いもので、容易に成功するものではない、故に婦人が繪畫を學ぶといふことは、全體無理な考である、其證據は、昔から女子で繪畫を好くしたものはない、結局女子に適せぬのである、されど昔からある流派によつて、規則通り運筆し、それが段々熟練して、物になつたと

いふ位の、極めて單純な程度のものでなれば、それは宜からうと思ふ、

音樂、これもむづかしい、併し婦人の性格に適當して、學べば成功を期することが出來るであらう、併しその音樂も我國のならば雅樂、西洋のでも、大に其材料を選擇して、優美に且つ高雅なるものでなければならぬ、近來女學校などで、音樂を惡用して舞踏など丶稱する遊戯をやつて居るが、それも學業の餘暇、ほんの樂み位ならばよいが、段々それが演劇となり、女學生が男子に扮するといふ滑稽を演じ群衆の前に臆面もなく、見るに忍びぬことを演じて居る、斯の如きは學校の風習がよくないからで、女子教育の墮落と見るべきものである、それが爲に立派な處女もあばずれ物となり、學問はさせたくも、都會へは出されぬといふ話になる、女子教育もよいが、無闇に音樂を惡用して、舞踏の演劇のと、處女の精神を浮華に導いて、其人格を損し、此一身をあやまたせるやうな事のないやうに願たいものである

裁縫の如きも、單に形さへ縫へればよいといふのでなく、服地の撰擇、又は其人々の性質に對する配合等も大に必要なることで、自分の體格、肉色等を考へ、それには如何なるものが適當であるか、否やといふ注意が大切で、たゞ流行に走つて、それを趁ふ如きはよろしくない、殊に近來は、猫も杓子も、ヤレ元祿式がよいとか、オリーブ色がよいとか、單に世間の指圖にのみ從うて居るやうな有樣である、それでは自分を沒却したものである、色又地質は、云ふまでもなく季節によつて變化せねばならぬものである、よつて四季に分つて標準をつくり、これは春の色として、自分に適する、これは夏の色といふ風に研究して、自分と衣服とが仲違ひをする如きでは困る、衣服からそれに對する帶の色、細かく云へば頭の裂布、下駄の花緒の色まで、其配合のよいやうにせねば、同じ風采をつくつても、それが引立たない、併し寒い時は色の濃きもの、暑き時は、淡きものを撰ぶことは、誰彼を論せず一定せねばならぬこ

とであらう、次に模樣の撰擇、縞物でも小紋でも、卑俗な流行を趁はず、帶地其他との調和、及び其人物に對する注意が必要である、然るにやゝもすれば其注意が缺げて、戶外を美裝して行く婦人を見てもこれこそ完備して居る、調和して居るといふのは稀で、たゞ金錢を多くかけたといふことが見えるに過ぎない、それで婦人の智識のないことが解る、故に裁縫の必要なると同時に、其材料を選ぶことには、更に一段の注意を拂はねばならぬ。

漁夫の妻

立花磐橋

二人手携はりこゝにのがれてより四十年、うき世の運命は、士といはれし二人の身に、漁夫といふ名をとらせぬ、おもへば春は錦着かざりて、くれゆくをうらみ、秋は綺羅をよそひて、曉をかこちたりしは昔にて、今は花も面白しと見ざれど、うき世の塵の交らぬぞうれしき、月もたのしとは見ざれど、うき世の雲はたかゝらぬぞうれしき、暖かなるにつけ冷やかなるにつけて、其をり〳〵をしり、海藻の如くわゝけ裂れる衣をきても、人は何ともいはず、われはたみにくしとも、ひつかしともおもはず、世はいかさまになりゆくらむ、つゆしらぬ身の上の安らけさ、三百年の長き代にうけし恩惠を打わすれ、二人の君に仕へて、美しき衣服をかざり、肥えたる馬にむちうち、鎗長刀挾箱の行列はれ〳〵しく、ほこりかに出立ちたりとて、其心やいかに、はた其友とする人は、みなわが敵とねらひよりし人ともならむを、いかにかはりゆく世なりとて、いかに心に耻ちざらめやは、そをおもへば中々に、よせくる波の音に心をすまし、淸き渚に庵結びて、松ふく風に昔かなてしすかゝきの聲をおもひ、色くろくふくやかに肥えふとつて、憎々しげなれど、心は全く反對なる漁夫等と交らふ身の心安さには、錦衣肥馬美々しき行列などたくへおもふべき隙なし、さるにてもわ

が妻の歸りのおそさよ、隣の某も歸りぬとか、くれかしも歸れりとか、海幸さはにて歸ることを忘れ玉ひてか、いかにさはなれはとて、そをうりしろなして、富まむともおもひ玉はぬに、われは花のさかむをまち、月のいでこむをわびたりし昔にも引かへ、たゞ獨その花にも、その月にもまさりて、待わびをらむとはよくしり玉へるに、さてはこの清き世界にすみわび玉ひて、濁れる世におち入り玉ひしか、いなわが夫に限りてはよもさることあらじ、さても歸りのおそさよ、けさ釣り得たまひし魚の、かく煮えすぐるまで煮えたりとはしり玉はぬか、遠き路をいとはず酒まで買ひて來つとはしり玉はぬか、いかにしても歸りのおそさよ、いざ濱に出て見む、あはれ風のはげしさ、波の高さ、さるにても月は上りぬ、その影をたよりにてとく歸り玉へよ、三十年の間自ら慣れ玉へりとはいへ、このころの老い玉へるにつけて、梶とる事も櫓おす事も、自らゆるひ勝なりと談り玉ひしこともありしを、あはれこの風にては、あはれこの波にては、

樂みのいろ〳〵

佛國　スーベストル作
淺岡一譯

外の方が大變喧噪しい、あの叫ぶ聲あの罵る聲…ハテ、あれは何であらう、アー思ひ出した、今日はカルナバール祭の最終の日だ、今のさわぎは面を被つて、仁和賀の樣な事をしつゝ歩くのであるな、一體、キリシタン宗の人は昔から、妙な習慣があつて夫を止めずに居る、昔は酒神祭と云つた、今は夫を替てカルナバール祭と云ふのだな、抑も、カルナバールと云ふ事は、肉を下にと云ふ言葉である、肉を机の上へ乘せずに置くと云ふ事か、今迄置いた肉を机の上から取り除くと云ふ意味か、何でも今から四十日の間肉を食ぬは勿論、酒も飲まずに、愼んで神に事へると云ふので、其食べる事飲む事の出來ない埋め合せに、此三日の間飲んだり食べたりすると云

ふ譯と見える、人が懺悔をすれば甚麼罪でも消滅するからと云つて、其懺悔をする前に、悪い事をすることは、決して人の同意することの出來ぬ事であらう、此のカルナバールのさわぎも夫れに似た様なもの……併しながら人間社會には、よく斯う云ふ事がある、殊に、此の祭は、誰がすると云ふでも無い一般の人の祭だ、して見れば、自分も矢張り此の中の一人である何か、自分も一つ樂みをしやうか……アー自分の友達を集めて遊ばう、併し自分の友達は本箱の中に居るのだ、ムードンの書を讀んで見やうか、否之はあまり言葉が野卑でいかん、ボルテールの書を讀んで見やうか、否此人の云ふ事はあまり嚴格に過ぎて、人の



勇氣を折く様な事がある、之も面白く無い、モリエールの書を讀んで見やうか否これもいけん、餘り人に物を考へさせ過ぎて、笑ふ様な事が無くなつて仕舞ふ、夫れならばルサージユの書を讀んで見やうか、む丶之れは人の不徳を笑ふやうな諷誨で、そこに自ら道徳を勸める様子面白い味がある、言はゞ眞綿で首を括る様な所がある、アー之が宜しからう……、イヤ〳〵斯んな事をしては居られん、大事な用があつた、人から頼まれて居つた手紙を書なければならない、其れは自分の隣の室に住んで居る、あの老人に頼まれた手紙、昨日頼まれたのであつた、其れは老人の一人息子が英吉利で以て結婚

した所が夫が死んだ、そして年寄と小供丈とが殘つた、夫れで悴の後家(即ち嫁)から何卒保護してもらひたいと云つて賴んで來たのである、其英文の手紙を老人が讀めぬからして、自分に翻譯して呉れと云ふたので、夫を翻譯して遣つたら、今度は返事を書いて呉れと云ふのであつた、其れを書かねばならんとはいへ、師匠なしにはどうも書けない、小供の步き始めの時には、傅母の手を借りなければあるくことが出來ない、手を放すと直倒れる、恰度自分が英文で手紙を書くに辭書が無いと、小供の手を取つて呉れる傅母が無いやうなものぢや、未だ自分も英文の上には一人步きが出來ないのだ、それ師匠即辭書先生に來て貰はなければならない、けれども其辭書は餘り破れたので、綴直しに遣つて、ビールと云ふ男に直すのを賴んでおいた、今頃は綴臺の上に乘つて居るであらうか、モウ己に綴て仕舞つたであらふか、一つ之を持て來なければ、手紙は書かれん、夫れから、自分で出掛けて往つた、するとビールの家の入口は半開いてあつた、其所から人の呻吟樣な聲が聞えた、それで案内も乞はずに這入て見た、ビールの寢床の前に、職人體のものが寢て居る、同居して居るのと見える、酷い熱病らしく思はれた、ビールに聞けば、昨夜以來寢たぎりで、頭を上げ得ず、其上段々惡るくなるばかりで、一向に善くならんと云ふ事であつた、

そこで自分は醫師に見せたかと問ふた、彼れは驚いた樣子で直ぐに答へた、醫師に見せれば、金が要る、同居人は借金の外には何も持たぬ男ですから却く醫師どころでは……と答へた、イヤ夫れは不可、此の人は貴公の朋友ではないかと斯う云うと、そうするとビールは、ヘイ、馬丁から云へば馬車馬も朋友でせうネー、彼れは一所に起臥をして、一所に奔走いて、同じ鍋で煮た麥を食べて、始終離れずに居るのですから、之も朋友でせう、しかし同居して居る丈で、私の眞の朋友では無いと斯う云ふた、されど此のまゝ病人を構はずに置く譯には往くまいと云

ふとピールはナーニ私が宴會に出て居る間寢床の番位は一人で出來ませうと云ふから、自分は、夫では此儘おいて往くのかと斯う問うた、所が夫は勿論です、此儘にして、私はお祭にゆくのですと云つた、夫から、それはあんまり人情に缺けた話だから、兎に角に醫師に見せてと云つた所が、ピールは腹を立て丶、動くことも出來ない病人を、肩に引掛けて起さうとした、自分は驚いて、どうするのかと云ふとピールは醫師に見せれば病院にと謂ふであらう寧そのこと病院に遣りますと、無理に引起して、幾段も〳〵ある高い所から降りて往つた、夫から餘り可愛想であるから、自分も手を借して、助け下して、門番に頼んで、二輪車を借りて夫に乘せて病院に送つた、其時、病人の有樣は、人事不省とでも云ふべきやうに思はれた、然るにピールは衣服を改めて意氣揚々として、宴席に行くとて出掛けて仕舞つた、そこで自分は辭書を抱えて自分の室に歸つて來て、其頼まれた手紙を書いて、隣りの老人のところへ持つて往つた、先づ這入つて其容子を見ると、机の上に切片を懸けてあつたけれ共、醬油で煮たやうによごれてあつた、其室の敷物は所々に穴があいて居つて其穴が指の尖か何かで撚つてある樣で、昨日や今日出來た穴では無い、餘程久敷以前に出來たものとは誰が目にも察せられる、其の室の隅の方に老人は、椅子に憑り。小さな机を前に置き、其机の眞中にコップを一つ載せて。其コップの中に麵包の切を浸しつ丶、其れを食べて居つた、其水は鹽か砂糖でも溶かして有るのか、何にせよ、麵包の外には、此コップより何にも目に入るものは無かつた、此老人は、更まつて挨拶もせず、只一と言、先生御免をといふたばかりであつた、自分は只管老人の擧動を見て居つた、すると、老人は先生御試み下さいと云ふべきソップもない樣な始末でといひつ丶、矢張り麵包を水に浸して食べて居る、自分も返答に困つて、先生の御食事は、餘程高尙な哲學者じみて居ますなと斯う云ふた、此言葉をば、老人得意に思ふたか高聲に

ハ……と笑つた、そこで又自分は考へた、今日カルナバール祭の末日であるから、國人の多數は立派な御馳走を食べる日である、然るに此の老人は麵包と水とて、此外に食べるものは無い樣子である、斯樣に、水に麵包を浸して食べて居る抔と云ふことは、殆と困窮の極度である、然るに、老人の顏を見ると誠に色艶も善く、にこ〱して居つて如何にも、幸福な相貌である、どうも、不思議ぢや、斯る粗食をして居つては顏色なども蒼褪めて居なければならぬ筈ぢや、通常の人ならば、耐へられることでは無いそれに此老人は平氣で、艶々した美しい顏色をして居る所を見ると、何か無上の樂を持つて居るに相違無い、必ず人に勝れた藝能のある老人であらうと斯う思つた、其顏色が先方にも通じたと見えて、老人は傲然として立ち擧つた室の一隅に徐ろに歩を移して卷物のやうなものや、厚き繪畫用紙の樣なものを抱へて夫を自分の前へ置いて、自分で披いて、先生これはどうです〱と云つた、夫から自分は眸を定めて其披げたものを見た所が、老人が二人並で、椅子に凭つて居る、其前に娘だか孫だか、二人の子供が歌を唱うて居る、又其後ろに音樂師が、コンカン〱とピアノを彈いて居る、其畵のさまが如何にも善く畵いてあつて、老人は耳を傾けて感心して居る樣に見え、其次の男女は、得意で謠ふやうに見え、音樂師は眞面目で奏でて居る樣に見え、いかにも善く畵いてあつた、老人は得意らしく、先生どうです此彩色、此の筆の使ひ方、此配合の工合、旨いものでせう先生と、頻りに自分の答を促した、そこで自分は斯う云つた、自分はルーブルで丁度此通りの畵を屡々見て感心しましたが、あの畵は、ショールダン氏の寫たと斷定しました、老人は此の言葉を聞くや聞かずや、先生そんなことはどうでもよい、マア此老人夫婦の頭の風などを御覽なさい、名作など〻云はんよりは、寧ろ、寶物、寶物と云はんよりは、寧ろ神聖、いやルーブルの畵が眞珠ならば、これは金剛石です、先生御驚きなさいますな、此畵は斯く

申す拙者が書いたのです、實に善く書いてありませう、然るに世の中には、目の無い奴があつて、此間此畫を五十フランクで賣つて呉れと云つたが直ぐに斷つて遣りました、定めし今頃は後悔して居るでせうと、斯う云つた、夫れからそれなら何程位ならよいのですかと聞くと、二萬圓なら賣ります、エイ二萬圓と云つて自分も驚いたから老人は價の高いには驚いたと思はぬらしく、畫の巧みなのに驚いたのだと早合點して、どうです先生、とうです善く書いてありませう、二萬圓では安いでせうと、斯う云つた夫れから自分は、二萬圓は相當かも知りませんが、自分の心が果して二萬圓丈の價があらうか、どうかと思ふのを自分で、打消すことは出來ませんなと斯う云つた、すると老人大いに立腹して、物をも云はずに、皆卷物を一纏めにして以前のところへ仕舞つて、又自分はもとの坐に復して麵包を水に浸して、もじ〳〵食べて居る、自分は餘り失禮な人だとは思つたけれども、折角書いて持つて往つたものだから

其手紙を其所へ置いて、自分の室に歸つて來た、すると兼ねて行く時から歸つて來たら、珈琲を呑まうと思つて酒精ランプを燃て珈琲罐を懸けて行つた、それが今歸つて來て見ると恰度沸騰た所でチン〳〵音がして、罐の口から煙りを吹いて居る、

此珈琲の事は原文に千一夜の國のモッカと斯申してありましたが、この千一夜と云ふのは「アラビヤ」の國のことであつて、何ゆゑ千一夜と云ふかと云ふに、昔アラビヤの國の王樣に、非常な嫉妬深い方があつて、皇后樣をお貰ひになつても、一晩で皆殺して仕舞ふ、夫故果は誰も皇后樣になる人が無くなつて仕舞つた、すると、其國の總理大臣の娘が是非后になりたいと斯う云ひ出した、夫れは素より皇后になるのですから實に立派な事で名譽な事ではあるけれども、又一晩で殺されて仕舞つてはならんから、そんな事は云はないで呉れ、若し王樣の御聞に達すると直ぐに召されるからと云つて、其親が止めましたけれども、どうしても娘が召されたいと云ふので

夫ではどうも仕方が無いと云つて、遂々皇后様に上げる事になつた、そうすると其娘は大變怜悧な人であつて、面白い御話を王様の御耳に入れた、王様は御感斜ならず、夫れから〳〵と云つて、其先を御聞きになる、するとモウ今晩は遅くなりましたからお休み遊ばせ、又明晩お聞せ申しますと斯う申上げた又明る晩になると其續きを申上る、又最も面白き所に至ると前夜の通り又明晩に、と申上げて翌晩に譲り、遂に其御話の續きで、千と一夜御機嫌をとつた其内に王子御誕生となつて、御疑もかゝらず、後には、太后ともなる程に、榮えられたと申す小説があるので、千一夜の國と申す名をアラビヤの國に與へられたので御座います、又モッカと云ふのは、アラビヤの地名で、最もよろしい珈琲の產地で御座いますから、それで珈琲のことをモッカと申すので御座います、

斯うもよい加減に珈琲が出來て居るから、自分は直に飲まうとした、所が牛乳を入れて呑みたくなつた、素より人を遣つて乳を取寄せる程の身分ではありませんが、自分の住居の高い所から下りて、直ぐ向ふに牛乳屋があるから、其所へ乳を買ひに往つた所が其家の主人は女主人で、メールドニーと云ふ名であつた、此人は非常に慈善事業が好で、少しでも金が出來ると皆人に施して仕舞う、夫れ故世の人がメール 即母といふ字を名の上に添へてメールドニーと呼だので御座います、自分が乳を買いに參りました所が、少し待つて呉れと云ふから、待つて居ると、メールドニーは三人の乞食の一人は、九歳か十歳ばかり、一人は、七ッか八ッばかり、今一人は四ッか五ッばかりと思はれた此三人の乞食に、麵包を大きく切つて牛酪を塗つて分けて遣つた、すると三人の内の一番幼ない子供は、牛酪を顔中に塗り付けて其上麵包の粉が付たから、恰で妖怪のやうな顔になつた、此時にドニーは其子供の顔の上に手を加へて、先生どう思召しますか、此の幼い無邪氣な此小供は、兩親も何もない様子で、神の外には助けて下

さる方も無いと云ふことで御座いますが、親の無い小供程憐れなものは御座いますまい、夫れで私などは、可愛さうだと思ひまして、一日に一回は情を懸けて遣りますが、此の蒲公英のお槍の様な天窓のふさ／＼して居る此愛らしさはと、其手をもて頭を撫で廻はした、其子供は撫でられながら、數十間前を指して、彼處に未だ何も戴かぬ子が居ますといつたするとドニーは直に其子に、お前はよい子じやから彼子を呼んで來てお呉れといつた、それで子供がドニーの前に四人集つた、ドニーは重て麵包を厚く切つて、牛酪を、したゝる程に塗つて、前の通り四人に與へ、猶其上に林檎だの栗だの、其外種々の菓物などを遣つて、之は一度に食べるのでは無い、何度にも食べるが宜いと云つて、持たせて遣つた、小供は莞爾として立去つて仕舞つた、其跡を見送つて、彼の可愛さうな子供の嬉しがる顔を、見る程嬉しいことは無い、其顔を見たい爲に、自分の食物を遣つて仕舞つた、身代限りをした、併し先生今日はカルナバール祭のお仕舞の日だ、人々の御馳走を食べたり、食させたりする日だから、此位の散財は宜しいでは御座いませんかと斯云つて、乳を量つて呉た、と斯う云ふまでゞ、珈琲を飲んだことは何も書いてありません、そしてスーベストル先生の短い評が御座います、其評は大略斯う云ふことで御座います今日はカルナベール祭の末日と云ふので、樂んで居る人を三人見た、其の一人は病に臥した友達を世話もせずに御馳走を食べに往くことを樂んで居つた人。其次の一人は、麵包と水とで食事を濟まして、平氣で居るが、世に自分の畫程上手な畫は無いと思ひ定めて、其藝能を唯一の樂みとするらしい、最終の一人は、自分の衣食は減じても、人の飢寒を救ふことを、此上もない樂みとするやうに思はれた、口腹の樂しみよりは、藝能の樂みの方が數等高い、藝能の樂みよりも慈善の樂みが數等高い、世人如何に評するとも、自分はメールドニーの樂みを以て、最高尚の樂みとして、稱讚するのである、

歌御會始式

一月十八日午前十時宮中に於て、歌御會始式を擧げられたるが、今當日御式の模樣を漏れ承るに

▲御前披講の光榮　毎年詠進は御題發表後數日にして、續々到着を見るが例にて、其の數は實に非常のものなるが、是等は到着するに從ひて、一々豫選を行ひ、御歌始會當日の四五日前までに之を終り、茲に係員の總會を開きて、高崎御歌所長其の長となりて、秀逸を決定するにて、此の選に入りたるものが、御前披講の光榮を辱うするなり、

▲落選者の榮譽　去れど落選者と雖も、詠進者は至大の榮譽を得るにて、其は是等詠進の數は、幾萬首と云ふ多數なるを、前記預選に際して、各府縣別に分ち、二三百首を一冊として、各數十冊に裝訂し、御會の後奉行より侍從の手を經て、乙夜の覽に供へ奉るにて、田婦野人の吟詠にして、至尊の御手に上ること、是ぞ歌道の德とや云ふべき、

▲當日の役員　この御式に連る役員は、所長高崎正風氏外十名にて題者、發聲、點者、讀師、講師各一名、奉行二名、講頌四名あり、各々當日の役を勤む、其人々は讀師鍋島侯爵、講師堤子爵、發聲綾小路子爵、講頌滋野井伯爵、藤井子爵、西五辻子爵、長谷正五位、奉行宮地、藤枝兩御歌所參候諸氏なるが、就中詠進を讀解する讀師と云ふは、頗る重き役にて、昨年は渡邊千秋男なりしも、本年は鍋島直大侯が勤められたり、

▲御會の式場　此式を擧させらるゝ御殿は、新年に各皇族親任官の拜賀を受けさせ玉ふ鳳凰の御内間とて、五間四方の廣間にて一月九日の御講書始も、同じくこの廣間にて行はせ玉ふ由なるが、當日は、玉座の前に二個の卓を据ゑ、中央に幅廣卓數脚を並べて、是を披講臺とし、別に東宮、同妃兩殿下の御詠の爲め、二個の卓を備へ、この幅廣卓を圍で講師鍋島侯爵を始め講頌、發聲の各役員席を占め、披講前詠進歌を讀み上る、講師一人だけ御前に對ひて、椅子を設くるなり、又兩陛下には左右に併びまして、御着席、其前に東宮同妃兩殿下御懷紙をのせたる御机を置く、又正面東側南寄りに奉行席、北寄に皇后宮大夫及び宮内書記官席、正面西側南寄には宮内大臣及び次官、侍從武官長、御歌所長の席を設けあり、

▲御式の次第　當日の役員及び各參候、寄人等は八九時の頃より、夫れ〲出頭して十時には各席に着きて出御を待ち奉り、奉行の一人當日御披講の各親王を始め奉り詠進の選歌を御淺硯蓋に載せて中央に据ゑ置き、軈て兩陛下の出御あるや、供俸の侍從は御製竝に御詠を卓上なる御硯蓋に載せ、夫れより讀師の合圖にて、講師以下皆な椅子に着き、讀師鍋島侯は其の懷紙と字本を陛下の御前に向けて御淺硯蓋に載せ、次で講師は詠進者の屬籍氏名を讀み、其の下讀一番なすを披講の音頭と爲して、「發聲」は之に續節をつけて一の句を詠み二の句より「講頌」「發聲」同音にてうたひ終るなり、

御題『新年松』

御製

新らしき年のほぎ言きくにはによろづよよばふのきの松風

皇后宮御歌

年たちて松もよろこぶ聲すなりやしまの外も波たゝぬよを

東宮御歌

民は皆年のはじめをまつのえだかどに飾りて御代祝ふらん

東宮妃御歌

門松のみどりも清きあしたかなちりやはらへる年の初風

老松も小松も共に榮えゆくいろこそみゆれ年の初に　威仁親王

櫻田の御堀にたてる老松もいろあらたなり年の初に　同妃慰子

かぎりなき千代のこもれる若松は年とともにぞたちさかえける　德大寺實則

召人

さしのぼる年の初日のかげうけて千代の色そふみねのまつばら　東久世通禧

題者點者

かどまつの色にもしるし神代よりかはらぬ國のたみのみさをは　高崎正風

讀師

ときはなる松のふたもと家ごとにたてゝことほぐ今日の嬉しさ　鍋島直大

講頌

松の千代しめ飾りしてあまがやもきこりがいほも年むかふらん　滋野井實麗

發聲

年たちて初日にほへるおほそらのみどりにつゞく峯のまつはら　綾小路有良

講師

九重のみかきのまつをふくかぜのおとものどかに年たちにけり　堤功長

講頌

家ごとにかどまつたてゝたつ年を祝ふ心は千代もかはらず　藤井行德

講頌

うちひさす都もひなもかどごとに松をばたてゝとしむかへけり　西五辻文仲

奉行

あらたまの年のひかりも見ゆる哉のきばの松にはつ日にほひて　藤枝雅之

奉行

みしめなはかけてかざれる門松に神代のさまの見ゆる今日かな　宮地巖夫

○

常磐山きごとにむすぶまつかさのかさなる年をいはふ今日かな　慈光寺仲敏

○

幾千代の年のはじめをいはひきて松はときはのものとなりけん　額賀大直

○

年々に高くなりゆくまつのうへに今年もあふぐはつひかげかな　柴田承桂

○

松風の千代のこゑこそあらたまの年のよごとのはじめなりけれ　仙田敏德

○

たてまつるとしのよごとの數々にひかるゝ松やいかにうれしき　名取正代子

○

もひとりかくむ若水にきみがよの千代田の松のかげうつるらん　藤吉三近

○

朝日さす春のみやまにとしたちて小松のたけものびまさるらん　森山まん子

繪畫に就て

野口小蘋

私の流派では、最初は四君子(蘭、竹、梅、菊)其次は花卉折枝位で、それより着色を敎へ、追々翎毛昆蟲等に及ぶ、石は其間に必ず敎へます、山水を學ぶには最初は石、皴法、點法、樹法等より、前景、中景主山、屋宇、橋梁と次第に敎へます、

三四年前までは、文人畫と稱し、洒々落々なる畫が大に流行いたしました、これ等は用筆用墨には心を用ゆるも、其物に就て、寫生するなどは餘りいたしません、もつとも善文能詩併て書に工みなる人が傍ら畫を作り、氣品極めて高きもの、眞の文人畫でございませう、しかしかゝる畫の流行時代には、文字のない人までも流行致しましたが、此頃と今日とは世の中も違ひ、日本の畫が外國人の眼にも多く觸る樣になりましたから、各寶物に就き眞を寫し、譏りをうけぬやう注意せねばなりません、

山水を畫くには山川を跋渉して、眞景を寫し、花卉翎毛昆蟲を學ぶには、寫生は必要でありますが、餘り寫生に拘泥して、只形似にのみ苦しみ筆を失ふてはいけません、諸流派を問はず、良師に就き敎導を受け、其技稍熟して後各寶物に依りて研究し、眞をきわめ、これを活動さして初めて畫になるのでござります、畫を學ぶに最必要とするは、古人の名蹟を博覽し、又觀る計りでなく、意を用ひて臨摹し古人の秘奥を窮ひ、工夫を凝し、漸く趣味を解するれば、未だ純熟に臻らずとも鑑識が博くなります、鑑識があれば手腕も隨つて日に進みます、しかしこれは少し技術の上達してからの事を申すのでござります、初歩の人が何の趣味も解せず、流派の何たるをしらず、眞僞もとより知らず、よきもあしきも分別せずして、古人の筆蹟さへ見れば、見當り次第に摹寫すると、所謂流派のたゝぬものに成つていけません、最初はやはり古人の畫を臨摹するにも、師の指揮を乞ふて致すが宜しうござります、第一着眼が

大切であります、着眼が低くければ到底高尙の畫を作り出す事は出來ません、技倆鑑識ふたつながら進みて後ならば、己が恣にしてもさしつかへありません、寫生も必要ですし、古人の名蹟を模寫するは最必要でございますが、只邪道に入らぬやういたしたいと存じます、又自分が精神を發揮して、一機軸を出すと云ふ事は尤も妙でありますが、これは濫奥に究めて後の事にて、容易に企及ぶ所ではあるまいかと存じます、私の考は先ヶ樣な者であります

春の歌

男爵　千家尊福

梅有佳色

十返の松だに知らぬ千代の色を
　わか木の梅の花に見るかな

若草

春の野の草はみながら角杙の
　神のみ霊やおふしたつらん

春雨

花をまつ心の外はしづかにて
　わかぬ眺に今日もくらしつ

池邊花

池水は花のかゞみと成にけり
　常見ぬ人のかげ見ゆるまで

春夜

蛙なく門田の月のうすぐもり
　雨にやならん人の來ぬまに

山家霞

まれ人の歸さ送りて見つる哉
　我すむ山のかすむけしきを

旅亭柳

宿からんしるしの柳ほの見えて
　かすむ軒端に夕かぜぞ吹く

山春月

櫻狩おくれてかへる家土産は

われこそ見つれ山のはの月

夕花

暮れゆくを飽かず眺むる人のみか
花も夕べはいそがざりけり

柳交花

立ちまじる花におもてやふせつらむ
なみ木のやなぎ只靡きつゝ

梅の花

紫菫女史

こそめの梅

見渡の、岡の彼方に紅の、こそめの梅の花咲ぬ、昨日に今日に色そへて、ちかまさり行花のおも、道行人も色にめで、香になつかしみ木の下を、さりがてにして仰ぐらん、ゆかしく匂ふこの花に、昔おもほゆ鶯の、宿はと問はゞこゝとしも、答へまほしき笑なれや、あはれこの花ちりすぎし、餘波の香をやまたをかね、櫻の枝のおも影に、それ忍べとや春の色ゆづる梢に香をとめて、深くも匂ふあはれこの花

鶯のやどはとゝはゞ色深み
こそめの梅やこゝとこたへん

君まつとあるし顔にも匂ふかな
うぐひすきなく岡のうめが枝

盆梅

霞動かす春風の吹き初めしより庭の梅
馨りやすると立寄りて見まくほりする心かな
交る枝は置霜の強さにたへし甲斐ありて、
姿めでたく見ゆれども花の美粧はそはざりき

○

淋しく暮らす昨日今日親しき友の玉章を
そへて一輪咲きそめし梅の一鉢たまひけり
たまひし人の情けさへ深くもこもる鉢のうち
厚き裏には根を閉ずるつちの下よりにほふかな

○

惠の露を朝夕に置きてそだてし此花を

惜しとも言はで賜はする人の心は誰か知る
知るも知らぬも此花のみさを慕ひていつしかに
その心まで花になしかくれなき香に匂ふなり

○

わが文机にほど近き鉢をし置きてわれ一人
ふみよむひまに眺むれば樂み限りなかりけり
知る人ぞ知る此花の高き操はちよろずの
花のなかなる花の君花の友とぞたゝふべき

○

三ッ四ッ花の綻びしゑまひを人にたとふれば、
春まだ知らぬ早乙女が後ぞゆかしき白玉の
露の光りを裹むごと澄める顔面に照る月の、
匂を袖にかくすごと袂ゆたにも見ゆるかな

○

朝に起きて我見れば匂は清みて色ふかく
いつか心も花を笑み夕べに見れば白妙の
雪恥かしき花の面清き肌もにゝほひけり、
ゆかりも深き十寸良雄の心の魂も消ぬべしや

○

筑紫の君よ此花にゝほひおこせと詠じけむ
佐野のわたりの夕暮に袖うち拂ふ影もなき
ゆきになやみし旅人を迎へ入れつゝ此花の
盛の枝を折焚きし人もむかしはありしとぞ

○

惜むにあまる此花の香にさへまさる其人の
昔ぞ遠く忍ばるゝゆふぐれはやく門とぢて
ひとり向へば紅の花の蕾も色づきて
そゞろ昔を語るごと淋しさ知らぬこよひかな

○

宵待君もさまさねばときめく花の香りにも
心はやすぐ眠るなり枕に通ふ梅が香の
かをりは著く匂ふとも誰が袖の香と咎むらん
人しなければ小夜ふかみゆめも靜に結ぶなり

○

出るに入るに手枕の夢に現に此花は
天つ乙女の美の靈か至誠の限みくり返し

たぐへぬ花の面影に心のかをり吹寄せて
われに語ると思へばや見れどもわかぬ花の影

二人の繪師

鈴木其青

一

今か昔か或處に富て貴き一人の老人がありました久しき病氣に今はたゞ死ぬのを待つばかりの時となりまして、一日家内の人々を喚びよせて申しまするには『おれは自分の肖像を上手な繪師に描かせて此の財産と一緒に相續人に傳へて永く後の世に殘さうと思ふから、兼て評判に聞いてをつた、甲と乙との二人の繪師を喚んで呉れよ』とのことで、早速二人の繪師を喚びよせました。

そこで老人は二人に向つて『お前等はお互に己の肖像を描いて呉れよ、眞物に一番近い繪を描いた方の人に澤山なお禮をするから』といふことで、確い約束を取り結びました、

やがて二人の繪師は各自その仕事を始めました、併し彼等は全く異つた繪を描き出した、

二

一人は極く眞面目な正直な男で、如何なる場合にも虚僞で人の機嫌を取るといふことの才能を全く缺いでをりました、彼は現在ありのまゝの老人を描かうと思ひました、見た通りに一つも缺かさず、皺のよつた額、痩凹んだ頰、年と共に衰へ果てた體軀、しかも杖に寄り掛つて僅に立つて居る老人を描きました、

卓越た手腕を持つた繪師が極念を入れて描き上げた肖像は出來上りました、丸で眞物が其處へ出て來たやうに、誰が見ても一目でそれと認ることの出來るやうに、や、非常な上出來でありました、

三

至つて狡猾い、そして正直な事の嫌な、今一人の繪師は、彼の老人の性質をよく知つて居りますから

全く別な人を描きました、若く立派な風采の、つやつやしい、誰が見ても、これが彼の老人であつた、即ちであつたと云ふ言なしには分らぬ壯年の男を描き上げました、二つの繪が、同じ日に老人の寢床の前に持ち出されました、老人は直樣眼鏡をかけて、二つの肖像を近づけ、第一番に甲の描いたものを注視て居りましたが、やがて嫌惡な顔をして、『これはいかぬ』と投げ出しました。

四

次に老人は、虚僞と諂諛の結晶ともいふべき乙の描いたものを手に取り、ためつすがめつして居りましたが、忽ちにこ〳〵と笑ひ出し、『ウンこれは上手だ、能く出來てる、實に生き寫しだ己の若い時と寸分違はぬ、これなら後へ遺しても耻しくはない』と口を極めて賞揚げた上、約束通りの禮金へ褒美の品まで添へてやりました、

此の有樣を見て居りました、甲の繪師は腹でも立つかと思ひの外、いと滿足な樣子で獨り心の中で、斯う申しました、

虚僞はいつでも不正直な人に喜ばれる、諂諛はいつでも傲慢な人に氣に入られる、己は寧ろ此樣な人から排斥されるのを以て無上の名譽と思つて滿足しなければならぬ。

女ごころ

有賀晴子

二三臺の車、門を過ぎて四つ角の方に馳せて行けば、引ちがへてねぶたげなる、飴屋の唐人笛、細く長く、向横町に消えぬ、臺所も片付きての一時過、女部屋の壁に身を凭せて、何となき溜息つく〳〵と思へば夢のやうな、さん〳〵乘り込まして、あのさとが眞面目さはと、奥樣お笑ひ遊ばさんお心か、いや〳〵今夜は暇をやる程に、父樣とも相談してこよとのお詞、どうも御笑顔とは思はれず、とにかく申して見ましようと、にえきらぬお返事はしたもの、

おさとほんとかと、父様内職のたづきも細き黒文字削る手とめて、膝お進なさるは目に見ゆる様、母様なくなりてより、めつきり年をお取りなされ、おさとを片付けて六之助を大きくしてとの外には埒もなき父様、年寄といふ者は强さうで脆いもの、祖父様大酒の後をうけて、卒中の兆あればと、母様いつも氣になされしが、ひよつとした事の無い内に御安心させまして、外に頼りの無い弟の片腕にならねばならず、けれども〳〵それは衣裳の無きも承知にていづれ一時にはゆかずとも、追々時節のものからこしらへてやりませう程に、其御斟酌は更にいらず、只あの氣立と働き振りそれさへ貰へば、簞笥長持幾棹ありとても、私の得でなし損で無しと、幸吉さんお云ひの由なれど、先は一人前の大工職、交際もあらう見えもあらうに、着のみ着のまゝの女房持つたとあつては、肩身が狭からう、人の口もうるさからうさりとて急に寶物の湧き出る氣づかひ無く、父様に心細い思ひさせますがつらいと、次第に思ふ事多くなり行けば、帶の間の手、力なく膝に置かれて、後れ毛もて遊ぶ風寒し、

日當りよからぬ四疊半の壁ぎはには葛籠を据え、上に積みたる粕天羅の箱ビスケツトのあき鑵それに並ぶ油のびん、硯の下には小學校に通ひ給ふ孃様念を入れてのお手本、文字知らぬ身の耻しや、あの小さなお手持ち添ての師匠顔、之は川の字それ〳〵汝が家の川村の其字、次はのゝ字、之はいろはにあつた筈、一番下は中と字と、幼いお方に敎へられ、時にはそれつくりは後より書くものとお笑なさるゝを、奥にて旦那様奥様お聞き遊ばさば、必ずお口に袖なるべし、たとへ貧しい暮はするとも、どうぞ六ちやんは學校へやつて、此様な耻は見さすまいと、おさとはいつもそれを云ひける、

ぶるッと身震ひして寒げに袖かき合し、此暇に本でも讀みませうと、押入あけに立上れば、かたことゝ門を入りくる足音、孃様が學校のお下りにはちと早し、誰ぞと耳を立つれば、御免下されの聲はそれ

よ六ちやんの聲そつと障子引あけて覗いて見れば、目倉縞の飛白の羽織しよんぼり彳む横顔も氣のせいか痩たやうなとおはてゝ、臺所の土間に馳せ下りどうしてまあと後は云ひ得ず引あくる水口、は入つてもよいかと奥をはゞかる手をとつて、父樣もお變りないか、今夜は少し話もありお暇を頂いて一寸下るつもりの所と、可愛や遠い淺草下りより此所本鄕も奥の〳〵の丸山のはてまで來しものを、寒からう手も冷たからう、女部屋になりと



上たきは山々なれど、奉公の悲しさにさもならず、上り框に腰掛けさせ我も並びて今更のやうに、よく來られたと眺め入れば、姉樣私は父樣に默つて來しのにて、行くなと仰しやりしならねど、父樣は一體わからぬなり、近頃は只此樣な貧乏では そればかり苦になされ、同じ棟續きに越して來し子のどことやらの給仕に出て暮しの助をするとお聞きなされ、どうでも其處へと頑固計り、姉樣も去年のお盆に學校はやめてはならぬと、仰しやつたものを私はいやと云つてもお聞きなされず、此頃は不景氣とやらにて出るものゝみ、月々に多く、月謝などは出しきれぬと今朝もお云ひなされしを、私は悲しいけれど…………表の新聞屋へ行つて、賣子にでもならうかと一圖に思つて……胸の底より突上ぐる悲しさを押へながら、萬盛堂へ行つて聞けば人はいらぬとの事、今一軒へ行けば駄目駄目矢張駄目、其樣な小さな瘦た體では續くまいつて……けなげには見ゆれどもまだ十三の少年つひほろ〳〵と膝の上に落してうつむけ

ば、脊を撫てやりつ 詞なき姉これも眼には……

私はどうしたらよいやらと、聲ふるはすを、口引しめて目をすゑて、心には迷ふ想のかず〳〵、奥樣の仰にも幸吉さんとて別に貯へのあるではなけれど腕と氣立が賴みになるとの事、其日暮しの職人のいくら私が儉約して貢げばとて人は褒めず、何の仕度持ちても來ず、夫の財布何程か運び出すと、云ひたがるは世間の口ぞかし、そればかりか六ちやんにも他人の兄に手を下げさし、父樣も肩身が狹からう、あゝ何もあの子の爲、思ひきれ〳〵かうして働く程は、知らず〳〵に通帳の升の中に字もふへて、はからぬうちに利も加りゆくものを、あの子の浮ぶ沈むは私の心一つ、見す〳〵沈むものを振り捨てゝ、どうして私許りが春の花の笑み榮えて居られやうと、賢く思ひ定めても、女氣の、奥樣のお膽いり仇にさせまして、幸吉さんも憎い女と思し召さん、そして又私の身の末も考へれば悲しい心細いと、思ひ亂るゝ其手を引いて、私は 羨 しいよ、誰かと問へば、

それ〳〵表の質屋の隣の官員樣の息子、大學卒業したら洋行とやらそれ聞いたら何だか憎く羨しくてとしをる、肩を抱き上げて、六ちやん私が手足の動く間は安心しておいで、

されども末は震へて、

其夜恐る〳〵申上げし一條、奥樣かつ〳〵うなづき給ひて、大工の幸吉へは小間使の花がお使者、横町の角にて逢ひしいづこかの婆の耳に口、おさとさんもおかしな人、何故いやか氣の知れぬと、笑ひて別れしとやら、折から通りかゝりの人の語りき、

箙の梅

中山幸子

宇治川におくれし事を思ひ出に
　生田の森のいさましきかな

須磨の浦に萠黄縅のものゝふは
　生田の森をさして行くらむ

梅のはなかざして敵に向ふかな
　今もかをりの殘りこそすれ

絶間なくやさけふ音を物かはと
　戰ひつゝもかをりちらして

一すぢの征矢を受けたる武士の
　かをりは梅に優りこそすれ

戰は火ばなちらすといふなるに
　生田の森にうめをちらして

いさましき心にまたも引かへて
　いとやさしくもうめの箙よ

いさましき箙の梅のものゝふを
　敵も味方もにほひこそすれ

けふはとていく田のもりの戰に
　梅をちらして勇むものゝふ

征矢つきて箙に梅のさすがにも
　父に似氣なき芳はしきかな

繪葉書に就て

△繪葉書を日本の政府が許したのは、八年前であるが、紙の製造などにいろ〳〵の制限があツた。
△此の制限に付て、西洋と日本とは大層趣きが違ふ、西洋では缺點を見出してから、改良をさせますが、日本は最初からいろいろのむづかしい規則を設けて居るので、其爲めに、發達が鈍い。
△政府が規定した法則によると、合せ紙は離るゝ患があるからいけぬといふ事になつて居たにも拘らず、或る本屋が私製端書を作ツた。
△處がさういふ規定がある爲に、其本屋は先づ郵便局へ行て、差支あるや否を尋れると、案に違はず合せ紙の端書はいけぬと斷はられたので、いろ〳〵苦心して政府發行の端書を二枚に離して、それを持つて行き政府發行の端書も此の樣に離るゝが、どうしたものだと詰ツたので、遂に發行の許可を得たさうです。
△それから大分繪端書が盛んになつて來まして、浮繪やら、金泥ものやら續々出る樣になつたが、浮出しを應用する樣になつのは、私が始めてからです、
△此の樣な小さな印刷物は石版や印刷術を發達せしむるもので、コロタイプなどの進歩は全く繪端書が始まツてからです。
△今日ではモウ西洋各國の繪端書に比較して、少しも遜色ありませぬ。
△然らば駄ものがないかといふに中々多いそれゆゑ繪端書の面目を汚し、之を沈銷させるといふ人があるけれども、總べて物は比較に依て顯はるゝものであるから、駄ものは、駄ものならざるものに對しての大恩人だらうと思ふ
△私の知ツて居るコロタイプ屋の技手が時々來まして、他のものを罵倒いたしますが、私はいつもいふのです、駄ものがあるから君の樣な上等のものが歡迎せらるゝので大恩患者ではないかといひましたが、此の頃は罵倒しなくなりました。
△苦心を要する處は意匠です、大體如何なる方面に赴きつゝあるかといふ事を觀破する必要が第一で、次に發行者にいつも大なる同情を持ツのです、發行者の程度の範圍に於て、圖案に取りかゝるのが私の癖です、啻に自分の事のみ考へては少しも發達しまいと思ふからです。
△それから日本對外國の繪端書ですが、輸出としては日本の風俗山水が最も行きます、吉川發行の北齋漫畫の繪はがきなどは多分外國へ行きませう。
△そして可成は日本からやるものは、木版摺がよろしい、又印刷術の上から見ても木板をやるのがよからうと思ふ。（松洲談）



御用 諸學校
S.A TRADE MARK
ANDO-SHOTEN
No.5 Urajimbo-cho. KANDA. TOKYO
S.A.
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
ピンポン室内テニス
一號一箱 一、二〇〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 〇、九六〇
其他各種御注文に應じ製造可仕候
御用 體操器械
体育用品
東京神田裏神保町五 S.A.安藤商店
電本 484.
確實 製造販賣
ピンポン改良室内テニス(旅行用)
一號一箱 二、〇三〇
二號同 二、三三〇
三號同 二、三五〇
四號同 二、五一〇
同用テーブル 上等一臺 拾參圓四拾錢 並等一臺十二圓
テニス用ラケット一組四本
一號大人用 一二、五〇〇
二號同 一一、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同 五、七〇〇
七號同 四、七〇〇
婦人用(小學用) 七圓
同二號(一號) 六圓
改良櫻二重枠ラケット一組
一號 拾參圓參拾錢
二號 拾壹圓七拾錢
三號 九圓五拾錢
四號 八圓貳拾錢
五號 七圓貳拾錢
六號 六圓貳拾錢
七號 五圓貳拾ヵ錢
テニス組一張一、八八〇ヨリ三、一一五〇迄各種あり升
東京市神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四



慈惠の心

醫學士　山根正次

從來は我國民一般に慈悲の心が非常に缺乏してゐた、此は甚だ慨歎しい事であつた、併し此心は日露戰爭と同時に大に發達したのであります、大にとはゆかぬまでも兎に角幾分か發達した事は確かであります、軍隊が滿洲の野における苦戰をおもふて、慰問袋繪はがきを送るとか、或は金員を出して、その勞をねぎらふが如き、或は歡迎の準備に、日夜心をなやますが如き事實は、すべて慈惠の心より出たのである、此等の事實はまことに喜ぶべき現象として見るべき事であらうと思ふ、

が、此は軍隊に對してのみの慈惠の心であつて、尚國民中には、甚だ殘忍な心をもつてゐるものが甚だ多い、此慈惠心といふ事は、その實、非常に薄いのである、どうかして一般に國民の性質をやはらげ大なる範圍に於いて、此心を豐かならしめるやうにしたいものである、

およそ人には依賴心といふものがある、此心は甚だよくないことゝ思ふ、友によりて救はれむとし、親によりて食はむとし、或は親族によりて生活せむとするものがある、是等はすべて甚だ賤しむべき心として、排斥せねばならぬ、人間の大切なる獨立心を失ふものであります、

しかるに此處に、獨立する能はずして、已むを得ず人に依りて生活せねばならぬものがある、病氣になやめる人、或は子供、或はすてごの如き、彼等は

自ら獨立して衣食する事が出來ない、已を得ず他に依らざるべからず、他は此を必ず救はねばならない、即ち彼等に對しては大に慈惠ねばならぬ、

一般の國民が是等の不幸の人、または貧民を救ふ心が、いまだ充分發達してゐない事は、一度散歩して市街をあるけば、すぐにわかる事實であります、途中必ず乞食を見うける事がある、癩病患者もしくは不具者が、地上にゐざりつゝ、食を乞ふの事實を見とめるのであらう、たゞもう是丈けでも日本國民が慈惠の心にいまだ甚だ缺乏してゐる事がわかるであらう、

是等の狀態を見ながら、是等を救ふ道をたてず、其のまゝにしておくと云ふが如きは、實に文明國民のするところではない、國として大に耻づべき事である、たま〳〵彼等を救ひ、彼等をめぐんでゐるものはすべて外國人ではないか、リーデル孃が熊本における、又目黑の癩病院の如きの慈善事業に對しては我々國民として實に耻かしい次第である、畢竟す

るに他の不幸をあはれむ念が極めて少ないのであるそれで、將來家庭においても、敎育上にも、すべて人をあはれみ、いつくしむ心を養成する事が極めて肝要な急務であらうとおもふ、

家庭に於ける下女の給金は僅に二三圓である、二三圓の薄給を與へて身はあたゝかき褥にゐて朝寢しながら、年わかき少女を朝はやくからたゝき起して、氷を割つて炊事をさせる、食物としては自らは甘きものをむさぼり食ひ、下女下男には甚だまづきものを食はせて、平氣でこぎ使ふまことに、殘酷である、社會を見渡して見れば、どうであるか、市中に仕事師が十二三の子供に車をひかせて、自らは平氣であとから歩いて行く、それはまだしものこと、甚だしきに至つては、自身、その車にのつて行くやうな事を我々はたび〳〵見うけるのである、

見よ冷酷なる人の心はどこまでも冷酷だ、十歲以下の子供をこぎ使ふに、寒中足袋もはかせないで、人はねしづまる頃に至つて、夜おそく遠方に荷物を

負はせて使にやる、少し躊躇すると頭をたゝくといふ有様であるのだ、すべて慈恵の心がとぼしいからである、

歐米諸國の狀態を見るに、施療病院の如き、不具者もしくは不幸者に對して、相當の順序がたち相當の方法が設けられてゐる、日本の如き目も見えない人が一人で、杖一本にすがつて行くが如きことは斷じてない、少し慈恵の心を有する人が、かういふ事をさせて一人で歩かせるやうな事が出來るものか、歐米諸國に於いて往々見る處であるが、競馬場において甲乙の人が、賭をする、數十萬金をかけるのがあるが、勝つてその金をどうするかと云ふに、慈善事業に使ふ、病院をたてる、そうして云ふには『此金は貧者より集まれる故に貧者にかへす』といひて、此上なきたのしみとしてゐるのである、

日本の相場師はどうであるか、勝てば必ず先づ祝ひと稱してよからぬ遊びをはじめ酒を飲み、妓に遊び、甚だしきは云ふにしのびざる事までもして、得意がつてゐる、博奕をするが如きは、極めて平氣である、かくて尚ほ餘あるものは別莊をこしらへる別莊をこしらへるまでは、かりにいゝとして、或はそこに何かすぐに養ひおく、是を彼の國で、公衆に最も有益なる事業に使用されるのと比して、其差は



どうであらう、自ら身をほろぼし家をほろぼす斧に用ゐられてゐるのではないか、

かくの如きは幼少の時代よりの教育の仕方によるのであるから、家庭小學校においては、大に注意して、其慈善の心を養成するにつとめねばならぬ、其方法としては時々養育院の如きを見せて、其貧苦あはれむべき狀態に同情するやうにせねばならぬ、

殊に女學生の如きは、自ら進んで、各種の工塲や、印刷局を見に行く必要がある、彼の貧民の小女等が、一日僅かの給料を得ながら、終日わきめもふらず、一生懸命にはたらいてゐるやうすを見ては、其身のあたゝかき家庭にゐて、我儘な生活をしてゐるのに比してどうであるか、自ら覺つたら、其精神の修養と勉學の資とすることが決して少くないのであります、

梅もまだ匂はぬ園の鶯は
なにをしるべにきつゝ鳴くらん

板額御前

附越後城氏の事

文學士　小林雨塔

平相國入道淸盛の祖なる平貞盛朝臣に一弟あり、鎭守府將軍惟茂とて、勇敢比類なく、武威を以て當代に誇りしものなり、其子出羽城介繁茂は、越後に居り、一方の豪强たりしが、其れ城氏の祖にして、實に板額御前の生まれし家にぞありける、繁茂より六代にして、城九郎資國に至る、陸奥の將軍三郎淸原武衡とて、往にし寛治元年末、所謂後三年の戰に、夫の八幡太郎義家に金澤柵を攻落され、身は逃れ出でゝ、とある池の萍の下に隱れ居りしを、義家の兵に見あらはされ、捕斬の最期を取りしものゝ女を娶りて、數子を擧げぬ、板額御前も其一人なり、板額の兄四郎資永は、養和元年平氏の命を受け、越後守に任ぜられ、去年信濃に兵を擧げて、鎌倉の頼朝に應じ、平家を滅さんとせし木曾冠者義仲を攻め

んとて、越後國中の軍士を駈け催し、用意半なりし時、九月三日頓死して果てたりければ、源氏にては、天譴を蒙むりしものと云ひ合へりき、されど資永の弟に四郎長茂あり、兄の遺跡を繼ぎ、尙も木曾を撃たんとせしが、翌壽永元年十月九日、義仲の軍勢と信濃筑摩河邊に合戰して、長茂脆くも敗北し、其後しばらく本國に潜在して出でざりき、かくて既に平家一同西海の藻屑と消へ果てし後、文治四年に至り、長茂は源氏に捕へられて、囚人となり、鎌倉に召されて、梶原景時に預けられたり、賴朝其武勇を惜みしにやあらん、之を殺さんともせざりしなり、翌五年賴朝陸奥の泰衡を撃たんとて、大軍を起せし時、景時は城四郎長茂は無雙の勇士なれば、今囚人の身なれども、此度の軍に召し具せらるゝも何事あらんとて、賴朝に勸めしかば、長茂は赦されて軍に從ふ事となりぬ、且つ己が家の旗を用ふるを許されしにより、長茂は心私かに、嚮に分散せし古の郎從の、此の旗を望みて、來り從ふべきを期したりけるが、果して賴朝の軍下野新戸渡驛に至り、各將士手勢の數を檢せし時、長茂の郎從既に二百餘人あり、賴朝も其意外に驚きしが、此邊本國に近ければ、長茂の豫期に違はず、散卒の集り來りしなりと云ふ、

かくて長茂は、梶原景時の庇護によりて、再び世に出でんとせしに、賴朝薨後正治二年、今迄餘りに君寵を擅にして、諸將を壓へしかば、其憎惡を受け、正月二十日鎌倉を逃れて、西上の途中、駿河にて人に殺され、尋で其一門滅亡せしかば、城長茂も景時に親しかりし者とて、首尾惡しかりけん、又もや鎌倉を去りにき、翌建仁元年の初に及び、長茂企つる所やありけん、京都に兵を擧げて、二月三日大番役にて在京せし鎌倉の將小山左衛門朝政の三條洞院の宿廬を襲ひ、果ては仙洞に推參して、四門を閉ぢ、關東追討の宣旨を得んと、後鳥羽上皇に迫りしも、勅許なかりしかば、長茂は詮なく、京師を出でゝ、行方知らずになりにけり、そも長茂は何とて此る擧に及びけん、確なる事にはあらねども、後鳥羽

上皇早く鎌倉を傾覆せんとの御志あり、梶原景時も密旨を受けて、事を企てし模様あり、當時幕府も明に上皇を疑ひまつりし趣見ゆれば、長茂の勅許を迫りしも、此の邊の消息あるに因るなるべし、

長茂は事の成らざるを覺悟したりしにや、京都を脱出せし後、吉野の奥に入りて、出家を遂げしが、二月廿二日鎌倉の兵に所在を認められ、伴類新津四郎以下と共に誅戮せられ、廿五日其首は京都の大路を渡されぬ、尙同月廿九日に、長茂の餘黨城小二郎資家入道、三郎資正、本吉冠者隆衡等も亦誅せられき、

城氏の一黨は、此にて滅びしかと思ふに然らず、長茂の兄越後守資永の子に小太郎資盛あり、本國越後に在りて、北國の輩を招き聚め、恢復を企てしかば、三月の頃にやありけん、佐渡越後兩國の鎌倉に從ふ兵ども、之を襲ひしも、資盛猛威を振ふに敵し兼ね、たやすく之を破り得ざりき、是に於て鎌倉幕府は捨て置き難く、四月上野磯部に在りし佐々木三

郎兵衛尉盛綱入道西念に仰せて、資盛を擊たしめたり、余の板額御前に就て語るは此後なり、

佐々木盛綱は、征伐の命を受くるや、會〻門外にありしが、頓て家にも入らず、其儘門傍にありし鞍馬に鞭ちて、越後に馳せ向ひしかば、郎從等後より追來れり、盛綱鞭を揚げて馳せ下る事三ヶ日、越後鳥坂口に至る、資盛は此の鳥坂に城廓を構へしなり、盛綱使者を資盛に遣はして、己れ來り討つ旨を告げやりしに、資盛は早く城邊に來るべしとて、戰を挑みぬ、乃ち越後佐渡信濃三國の兵等、盛綱の命を受けて競ひ攻む、盛綱の子息小三郎兵衛尉盛季、信濃の住人海野小太郎幸氏（余の以前に述べし清水冠者に代りて、其帳臺に臥せし人）等、先登を爭ふて進みしが、資盛の兵等矢を飛ばす事雨の如く、兩人とも疵を被り、其郎從等の死傷少なからざりき、殊に資盛の叔母板額御前、女性の身ながら、弓矢の道に長じ、百發百中の藝殆ど父兄に越へたり、此の合戰の日、殊に武勇を顯はし、童形の如く髮を上げ、身

は腹巻に固めて、矢倉の上に居登り、攻め來る敵兵を見下して、矢を放つ、之に中るもの死せざるはなく、盛綱の郎從等亦多く殪されぬ、爰に信濃國の住人藤澤四郎淸親なるものあり、此體を見て、安からず思ひ、越後山を廻りて、高所に出で、板額を下瞰し、能く狙て放つ矢、其の左右股を射通しぬ、流石の女房も、此の痛に堪へで、倒れし所を淸親の郎等馳せ上りて虜にせり、此の後資盛も支ふる能はずして、敗北せりと云ふ、

此くて板額の疵咎癒へければ、鎌倉に召し進めらるゝに決まり、六月廿八日、淸親に伴はれて將軍の營に赴く、將軍賴家之を覽んとて、簾中にあり、將士群參して市の如し、蓋し古今無双の女丈夫を見ん事の珍らしきなるべし、畠山重忠、小山朝政、和田義盛、比企能員、三浦義村以下の豪傑侍所に候せしに、板額御前は其の中央を押し通りて、將軍の前なる簾下に座を占め、此間聊も憚る氣色なく、其風姿勇力の丈夫にも對揚しつべく見えたりける、

爰に心外なる事あり、古來板額は支那の無鹽君同樣、非常の醜女なりと傳へられたる事なり、此は板額の事を記しある吾妻鏡の文を誤讀せしより、轉々傳へられし謬なり、同書に記する樣は、其顏色に於ては、殆ど陵薗の妾をも醜とすべしと、陵薗妾とは、夫の有名なる白樂天の文集に、陵薗妾と題せる樂府の題あり、山陵の守に、宮女の寵なき者を押籠め置きしを傷む詩にして、其首句に『陵園妾、顏色花の如く、命葉の如し』とあるなり、即ち板額の美色は、此顏色花の如き陵園妾をも、尙醜とするばかりの美しきなりとの意義なり、然るを讀書人の誤解によりて、絕世の美容を有しながら、無下の醜女と傳へられしこそあはれなれ、

されば板額の罪せられんとするに及び、阿佐利與一義遠と云ふ者あり、賴家將軍に請ふて、板額を預からんと云ふ、將軍其所存を問へば曰く、此の女丈夫と同穴の契を成して、壯力の男子を生み、朝廷武家を守護せしめんと欲するのみと、將軍曰く、夫の

女面貌宜しと雖も、其雄々しく健々しきを見ては、誰か愛情を催さんや 然るに今義遠の望む所人間の好む所にあらずとて、頻に嘲弄せしが、遂に其の請を許せしかば、板額御前は義遠に伴はれて、其本國甲斐に下りけるとなん、板額は果して義遠の望みし如く、勇力の勇子を擧げしや否や、吾之を知らず、此後所見なし、(完)

昆蟲の話

深井龍蛔

鰹節蟲 (鞘翅目)

紙で鶴や、鴛鴦の形を折りまして、其を鬢付油で、鰹節蟲の背上へ塗り付けますと、蟲は知らないで動き出しますから、恰も鶴や鴛鴦が自動して居る樣に見えます、少年の時はよく行つた遊びです、一體鰹節蟲は、七八種も類がありますが、皆害をする蟲なのです、其の中で最も普通なのをコカツブシムシと

申しまして、殆ど卵形の黒い粗な毛の生へた、二分五六分の甲蟲であります、此の蟲は鰹節や繭や標本などに、白い長形の卵を産みます、卵は六七日で孵化しますと、四分五厘まで位の大きさの、細長い地色は黒色と褐色の混合色で、各節は赤褐色の毛を生じた、頭の大きい脚の三對の幼蟲となるのであります、幼蟲は食物の内部へ食入することはなく、外部を食ふのですが、繭などへ卵を産みました時は、内部へ入ります、幼蟲は三週間位でした、八月中旬に蛹となります、而して九月上旬にはコカツブシムシ(成蟲)となり、其まゝ冬を越します、

此の蟲は養蠶地では、隨分烈しい害をしますですから、繭を收穫しましたら、直きに殺蛹して仕まふが宜ろしい、鰹節蟲其の他の乾魚を害した時は、一度攝氏の寒暖計五度の湯で煮て後乾かせば、宜ろしいのですが、それができないのなら、始めからブリキ罐中へ貯へると宜いのです、そして寒冷な室へ置き、食物にしない物を害したのなら、ナフタリンや

クレオソートで豫防するも宜いでせう、又二硫化炭素や、青酸加里などで殺す時もありますが、毒藥ですから、充分注意せねばなりません、

蓑蟲（鱗翅目）

釋迦の生れた印度のセイロン島の土人は、『蓑蟲は前の世には人間であつたのですが、常に他人の薪を盜んでは、脊に負ふて歸つたので、今世には蟲となりましても、未だ其の罪で薪を負はせられて居る』と云ふ傳說を信じて居ると申されます、蓑蟲が枝條を集めて綴りまして、其の內で生活して居るのは、誰でも知つて居ることでありますが、俳士也有の鶉衣の蓑蟲の、『父よと呼へば守宮の妻を思ふには似ず、去れど父のみ戀ひて、などかは母を慕はざらむ』の意味は、餘程面白いのであります、

蓑蟲にもそれは〳〵種類はありますが、英語で袋蟲と申します通り、木の枝や葉で袋をつくるのは同一であります、日本人が蓑と申し、英人が袋と云ふつまり、此の蟲の巣はなか〳〵强いので、好事家は蟇口（錢入）として用いた位です、此れで製した蟇口は、隨分雅致があります、惜哉大きく製すには不都合です、蓑蟲は、此の袋の內で生活して居るのでありますが、此の袋の上部に六月から八月までは、孔が開いて居て、此から出入して、櫻や李、梅などの葉を食害するのでありますが、寒くなると蓑の內へ蟄居して、孔を閉ぐのであります、而して『蓑蟲も息災で居る木の芽哉』四月下旬になると、蛹に化して仕まひます、雄の蛹は黑褐色でありまして、細長く、頭部は大きく、翅の痕跡は明でありますが、雌の蛹は翅鞘がなくつて、蜂の幼蟲の如くであります、でありますから、雄は羽化しますと、蓑の下方を破つて飛び出しますが、雌は翅がないので、飛べないから、巣に居りまして、淋しく妻戶を守つて居ると云ふ譯ですが、雄は妻や何處と尋ね飛ぶのであります、そして雌を發見しますと、雌は蓑で雄の姿も見ず、雄は蓑の外で、目的（交尾）を遂げて雄は飛び去り、雌は巣內へ卵を產んで、死んで仕まふの

であります、恰も人間で申すと、土耳古の貴婦人の生活の有様であります、卵は週日で孵化しまして、直ちに母の死體を食べ、巣から出て、各自皆巣を作ります、也有は恐らく此の事實を云つたのではないかと存じます、眞に然であつたとすれば、也有は實に大なる観察者と云はねばなりません、

　蜚蠊　（眞翅目）

蜚蠊はコキブリとも申しまして、世界には壹千種もありますが、日本には六、七種しか居りません、其の内で殊に多く害をするのは二種であります、

(一)コキブリ　體長雄は翅端まで、一寸ばかり雌は六分ばかりです、尤も雄の翅は、體の外へ長く出て居りますが、雌の翅は體より少く短いのであります、翅色は黒褐で、觸角は體よりも長くあります、

(二)チャバネコキブリ　體長雄も雌も共に五分内外でありますが　翅は體よりも長くあります、體色は黄褐ですからチャバネ（茶翅）と申すので、觸角は體の長さ位であります、最も古く知られて居りまして、古代の文書にあります、コキブリとは之であります、

　コキブリは一般に黒褐色をして居るのは、常に暗き所に住んで居るからで夜間厨房などで、悪い事をしても、なか〳〵見付かりません、甚だ厭ふべき悪臭を放ちますから、手などで直ちに獲るのは宜くありません、ですから一度此のコキブリの害を受けたら、食物は捨てねばなりません、又道具なら、湯で能く洗はねば、臭氣が除けないのです、コキブリの食物は、果實、澱粉、穀物、動物肉、菓子、毛織物、革物等であります、

　アブラムシは初夏から現れますが、大抵の方はコキブリ（アブラムシ）が『ワク』と申します、けれどもコキブリは、天然に生れるのではなくて、卵から發生するのですから、左樣な不合理な事は申さぬが宜しい、卵塊は蠶豆形でありまして、一方鋸の歯の樣になつて居ります、卵から生れた時には、翅はありませんが、漸々生長して三ケ月も經ると、美事な翅の生へたコキブリと申しまして、晝は器物や板

張の間の光の來ない、暗い處に住んで居りますが、夜になると、勝手元や座敷へ行て、隨分惡い事を致します、性質は明いのが嫌いなのですから、夜間コキブリの集合した所へ、突然燭火を見せると、直ぐ遁げて仕まふ、その遁げ方が可笑なのです、

　コキブリを驅除しますには、米國ではチヨコレートと、同量の硼砂を混合した物を、コキブリの出入する所へ散いて置いて、コキブリはチヨコレートが嗜きだから食べる、すると硼砂の中毒で死ぬと云ふ方法を行つて居ります、佛蘭西ではコキブリを殺すに、一つの箱が工夫されました、其の箱の蓋は、四面の縁から、中央に斜に向つた四枚のガラス板で製られ、其の中央に、孔がある、そして、此孔からコキブリを陷入させる、箱の中には、コキブリの好物を入れて置く、そしてコキブリを誘ふのであります、箱とは抽出が付けてあつて時々檢べると云ふ都合なのであります、

趣味の遺傳

（一家五人皆美術家）

舊幕臣にして有名なる陶業家たりし、故竹本隼太氏（去二十四年中死亡）の遺子は、五人ありて、それが皆美術思想に富めるとは、所謂趣味の遺傳と云ふものなるべし、先づ長男竹本鼎一氏（三十八）は既に父の遺業を繼ぎ、北豐島郡高田村の家に在り、竹本燒の家元として、盛んに其業を勵み、夫人信子（三十三）との間に十三雄（四つ）と云ふを設けて、樂しき家庭を作り、二男暲二氏（三十二）は美術學校圖按科に入學し、三十二年卒業後は、農商務省特許局審査官となり、女子職業學校出身のまさ子（二十八）と云ふを迎へて妻とし、隼人と云ふ男の子を生み、三男谷紀三郎氏（二十八）は、本郷の女子美術學校に教務主任として、生徒に美術史を教へ、昨年澁谷なる實踐女學校卒業生にて、矢張り美術の趣味を有せる富子（二十一）と云ふを迎へて妻となし、また長女琴子（二十六）は川端玉章翁の高弟として、日本女子大學校附屬高等女學校及び三輪田高等女學校に教鞭を取り、戸田玉秀氏（三十四）に嫁して、長女すみ子（七つ）を頭に一男一女を擧げ、二女みや子（二十四）は淑徳女學校卒業後、東京美術學校卒業生にして、曾て同校卒業生六角紫水氏と共に色漆を發明し青年調漆家として、名ある磯谷完山氏（三十二）に嫁し居れるが、斯の如く兄妹凡て五人が、同じ趣味を有して、同じ美術に緣ある職業に從ふとは、芽出度き話ならずや、

余が理想の婦人

竹街山人

余が理想の婦人といへば、四角張つた高論卓説であろうと早合點なさる讀者もあらんが、元々自分はそんな議論家でもなし、又教育家でもないのであるから、果して余の言ふ所が、其當を得て居るか否やと云ふ事は、讀者諸賢の御判斷に一任するのである、

近時婦人問題といふが流行となり、教育家も經世家も、專心之が研究に日もまた足らずといふ有樣で、余が敬慕する大隈伯も既に意見を發表されてあるが何れも根本的に、賢母良妻主義を否定したものはない、余も亦然りで、決して賢母良妻主義に反對はせぬが、大隈伯のそれとは聊か所見を異にする所がある、伯は今の婦人に高等教育の必要を說かれたが、余は反對で、今の婦人に高等教育は、絕對的ではないが不必要であると斷言する、見よ今の總ての教育は甚だ實際から遠く、一般家庭に適合して居ないでは

ないか、今の高等女學校に於ける課程でさへ不足であるではないか、若しそれ高等教育に進んでは、一層その甚しきを見るのである、余は賢母良妻たるべき資格に就て、先づ二ケ條を要求する、

(1) 家族をして滿足に被服せしむること
(2) 家族をして滿足に食事せしむること

である、此二ケ條の外に、賢母良妻たるべき要素があるであろうか、物理であれ、化學であれ、總ての學科はこの二條件を完全せしむる爲の附隨科目に外ならんのである、余輩の家庭を以てすれば、高等小學を卒へたるものにて學問の不足はない、學問を倘要求すれば、勢ひ技藝を次にせねばならん、此の技藝は我が國古來尊重し來つたもので、特に婦人は必要なる技藝を傳習し來つたものである、之は我が國體の然らしむるもので、歷史の明かに證する所である、又女子には一生の運命を定むべき、結婚の時機が男子のそれに比して、頗る短かい、之が爲に無暗に高尚の學問を强ゆる間に、機會を逸するの憂があ

る、理想の、運命の、獨身の、厭世のと、騒ぐ奴原が、教育ある女史に多いのは、之が爲めである、即ち機會を逸した連中である、今一つは例令配偶者を得ても、家庭には妄想的となり、社會には納れられず、舅姑との衝突頻繁となり、遂に破鏡の不幸を見ることがある、之等は皆高等敎育の不完備にも胚胎するが、多くは我が國現時の社會に、不必要不適當であるからである、今の高等女學校の卒業者にて、能く主婦の任務を盡し得るもの、果して幾人かある、之に反し既往を追懷せよ、又生きたる歴史を見よ、日清戰爭及日露戰爭に於て、世界列强をして一驚を喫せしめたる、大日本帝國の武士は、如何なる人が育てしぞ、又伊藤侯大隈伯は、如何なる母が生みしぞ、國の東西世の古今を問はず、偉人の母と余が謂はゆる二條件との關係を思はゞ思半ばに過ぐるものあらん、故に余は先づ之を完備せしめて、然る後に高等敎育をいふべしと信ずるのである、

以上述べ來つた余の理想の婦人といふを換言すれば、裁縫と割烹とに堪能なる婦人といふ簡單なるものになる、物皆階梯あり、所謂一足飛びの弊害や、實に恐るべきものにして、蠟燭時代より電燈時代に、一足飛びしたる我が日本國民の如き、未だ電氣の一燭能く人を斃すの危險を知らないのである、啻に一電氣のみならず、世事總て然りで、中にも敎育の如きはその影響容易ならぬ事である、余の愚見が讀者の首肯する所とならば……………例令首肯されざるも、一顧に價するものとならば幸甚、

指環に就て

山田素表

昔は未婚者と既婚者の鑑別は髮の結ひ方帶の結び方にて自づと其區別を示され、一見して見誤る事のなかりしも、今は概して服裝よりして頭髮の結樣に至るまで、大に變化を來たし、其既婚者なるや未婚者なるや容易く識別し難く、唯町家の婦女にありて

は猶ほ古風の存する所ありて其鑑別容易なれど、所謂女學生育ちの婦人に至りては兩者の區別殆ど立て難き趣きあり、然るに平素熟懇の間柄に於ては、之が爲に格別不便を感ずる事なからんも、初對面の際又は多數集會の場合等に至りては、大に不便なきを得ざるなり、抑々既婚者と未婚者に對しては、夫々應待に禮儀作法も異り、談話の種類も其位置に隨つて擇ぶところなかる可らざれども、夫等に就て容易く鑑別の特徵、未だ我婦人間に立たざるは甚だ遺憾なり、

　西洋の人々に就ては其區別明瞭にして、一見に識別するを得べし、そは指環の型に依りて知らるゝなり、色々飾りのある指環は未婚者も既婚者も共に隨意に用ゆれども、既婚者の特徵としては男女共必ず、平打ちの指環を指にするを例とせり、故に如何に數個の指環を嵌めたりとも、何れも皆飾りのあるものなる以上は、其人の未婚者なる事明らかにして、之と共に唯一箇に過ぎずとも苟も其平打のものならんには、其人の既婚者なるを知り得べし、

然るに我國に於ては、指環を用ふる者少からずと雖も、其は唯裝飾の意味に於てのみ用ゐられ、隨つて何等の區別あるなし、未婚者にして平打を指にし、若くは既婚者にして飾り指環を用ゆる等、頗る亂雜なり、甚しきは十二三才の少女にして、既婚者型の指環をはめたる等、之を西洋人の目より見ば隨分一驚を喫する事なるべし、固より指環に就て一定の習慣もなく、又西洋に於けるが如く宗教上の意義を有せざる、我國に於ては斯の如き狀態に在るは止むを得ざる事なれど、今や一體に婦人の服裝の變化し行きて、未婚既婚の區別明かならざらんとするに就いては、寧ろ西洋の例に倣うて指環を以て其區別を立つるは、最も便宜なる事ならずや、

○愛國婦人會　同會にては去る二十三日評議員會を開き、新に救護課なる一課を設けて、戰死、準戰死者の遺族、及び癈兵授産事業、其他救護事業に關する一切の件を擴張することに決したりと、

笑ひ草

慥々亭主人

井戸神

酒好の一老爺錢さへあれば酒舗へ飛込む、或る日四錢の酒を求めて一氣に呑乾したるが、何に思ひ出してか井戸傍へ行き、軈て戻つて二錢銅貨一つ置いてサッサと出て行かうとする、舗の者素早くも見咎めて、二錢の不足を言ふと、

『二錢は井戸神樣へ拂つて置た哩』

まこと水代二錢は井戸側の上にあつた、

消防夫

新消防規則の發布された其頃、何處の村々でも練習が頻繁であつた、今も又村の若者を集めて點呼の稽古が始まつた、一列に並んだ前に部長が嚴めしく立つて番號と命令すると、一、二、三、四と順次に呼んで行く、十八、十九と來て次の一人が

ハタチー

と呼んだ、

牛と牛

或る町にて始めて牛肉を賣り出した事がある、甲が乙を誘ふて食べに行つて、歸つてから頻りに其味を賞しながら、どうも牛の肉は甘いものだとやると乙は怒り出した

『何んだ、牛だ〳〵と言つて君は牛を食はせたな、』

そこで喧嘩が始まつた、

目が見えない

媒妁人『では悉皆目出度極りましたな、

主　人『先づお陰樣で至極どうも……

媒妁人『夫で拙者も折角骨折甲斐があつたと申すもの先づ安心いたしました、全くお爲になります、裁縫は固よりのこと之が一つ出來んと申すものは何もないといふ娘御で御座いやすからね、唯マア目の見えないのがチとその……

主　人『イヤ何に、手前共の樣な職人風情の事でげすから、目の見えぬ位のことは我慢が出來やす、何

卒何分宜しく、
媒妁人「委細承まりました、では復……
嫁入の晩大騷動が持上つた、但し眼の見えないと云ふことは、實際此肉眼の見えないのと、文字の讀めないのとの二つに通ずる、花嫁は片眼であつたのである、

みそか

或家で……或は貧乏な記者の家かも知らぬ、母が獨言して又三十日が來るのかと言ふて溜息すると、娘の子が其を聞いて、何故三十日が來ると不良のと問ふ、三十日が來るとお錢を拂はなければならぬからさ、と答へると、子供が言ふた、お母さん、そんなら二十九日に拂つたらえゝぢやないの、

苦學する姉と弟

豐多摩郡淀橋町字角筈八百廿五番地佐奈陸太郎（五十五）は妻お初（四十）長男義一郎（十七）長女靜子（十三）次男禮次（十一）の外に二人の子供もありて、手を束ねて居られれば、內藤新宿二丁目の新宿病院の小使となり、毎日通勤はするものゝ、薄給にて家族多く生活も意の如くならず、妻も內職をして之れを補助すれど、足らず勝なれば、是非なく長男義一郎を奉公に出したり、然るに長女の靜子は、子供ながらも家政の困難を氣にして、自から進で朝早く起きて、同町の晝間煙草工場の女工となつて、二時間ほど勞働しつゝ、淀橋小學校へ通學し、退校後再びその工塲へ出掛けて夕方まで働き、夜に入れば學校の復習をなすなど、一日も怠る事なく、僅かに得る處の賃錢で、自分の食料や學校の費用まで始末するに、親の喜び一方ならざるを、見やう見眞似に次男の禮次も、姉と共に日々晝間煙草工塲へ通ひて、得たる工錢にて、淀橋小學校へ通學し居りしが、兩人とも學校の成績も好きに、親はます／＼喜び、近所にては、此姉弟の苦學を感心せざるはなしと云ふ、

詠進者述懷の歌

今回詠進選歌の光榮を擔ひたる、鹿兒島縣森山彥太郎妻まん（二十三）は姶良郡加治木村丹土松田淺右衞門の長女にして、幼時より國風を好み、父作州にて死亡後伯父佐藤友樹に就て學び、常に雜誌歌文に寄稿し、又大日本女學會員となりて、和歌の通信敎授を受けつつありしが、此度預選の名譽を博し、喜ばしさの餘り、亡父を偲びたる詠歌は左の如し、

足乳根のちゝましまさば如何ばかり喜びまさんけふの譽を
身にあまるけふの譽の嬉しさに先づこそ偲べ父のみことを

訪外日記（二）

愛氷散士

第二月

明治三十九年十二月十六日より、同四十年一月十五日までの日記帳より、抄錄したるものである、この期間は雜誌編輯の大厄期で、上半期は歳末で猫の手さへほしき時、下半は年初できのふの鬼が禮に來ると云ふ時、即ち働くに忙がしいと、遊ぶに忙がしいとの兩極端に跨つて居るのであるから、外訪にはまことに不都合な時である。世話に申せばよい種も得られぬのである、いづれの雜誌も二月號の振はぬのはその理由で、かゝる中にも兎に角訪問した邸宅百五十餘、例によつてその間の所得を記さう、

順序と輕重

◎その一日　午前十時子爵松平乘長君を訪ふ、君は華族中寫眞嗜好者の隨一で、その研究も開業者の夢想だに及ばぬ所まで行き、現像、修正等に他手を借らぬはもとより、その寫眞室の整頓したること、いかに君の注意深きかを證明し得られる、君の寫眞談に曰く、

寫眞屋では、南が日當りがよいものであるから、早う仕上げやうと思うて、南光線で燒くやうであるが、南光線はその度が一定して居ないから、完全なものは出來ない、私はすべて北光線で燒くやうにして居る、急ぐ間には合はぬが、まことに寫り工合がよろしい、それから現像は此頃であれば冷たい仕事であるから、道樂にする人は、大抵他手を借るやうであるが、寫眞術の面白いのはこの現像にあるので、薄く映れば濃くするやうに、濃ければ薄く映るやうに、また寫した時の光線などをも參照せねばならぬので、この現像の如何は直に印畫に於てその巧拙を證明する、云はゞ現像は寫眞術の生命である、

予は以上の二例話は、寫眞術に限らず、處生の上に於ても應用すべき、寧ろ秘訣と見るを適當とすべき好話柄であらうと思ふ、急ぐ道とて荊棘の中へ足

を入れる如き、輕率な事をする人や、子女に衣服を着せることには親がうき身をやつして、大切な敎育は他任せにするなど丶云ふ、物の輕重さへ分らぬ人は、この話を參考すべきである、

日本式の女子敎育

◎その二日　午前九時男爵夫人金子彌壽子君を訪ふ何うぞこちらへと云ふ、書生の尾について行けば、夫人は二令孃と列座して、その前に予を迎へられた、煙草盆なども古風で、菓子は小さな盆に銘々盛、逢つての話は少し勝手が違ふやうである、語を換へていへば大名式であつて、奥床しい所がある、君は曰く、

私どもの家庭は姑が古風でありますから、私も古風に、成るべくハイカラがつたことはしないやうにして居ります、金子は永く外國へ參つて居つたものでありますから、どなたでも西洋風であらうと思ひまして、時々諸所の會合などへも、出るやうにと申されることでありますが、矢張女は古風に、家庭に立働くべきもので、女子の敎育は古風な方がよいと思ひます、それで娘なども一通りは學校へ出しますが、あとは家庭に敎師を招いて、自分でも監督の出來るやうにして居ります、一家のこと、敎育のこと、これに心を配りますと、なか／＼社交界に出る暇などは少しもございません、

古風と云うて、女大學ばかり敎へて居らる丶譯でもなく、學習院へも通はされて居るのであるが、古風といふ、即ち日本式女子の優美なる敎育が主となつて居るのであるから、論より證據、當日面會したる二令孃の擧止實に嫺雅で、これでこそ貴族の令孃であらうと思ふた、

女子學問の要

◎その三日　午前八時女子職業學校々長工學博士手島精一君を訪ひ、女子敎育談が始まつた、君は曰く、

女子は内にあつて家政を掌り、男子をして内顧の憂なからしめ、一意專心、圓滿なる家庭をつくるべきもので、敎育もその方針で行かねばならぬ、然る

に女子教育の盛んなるにつれて、たゞ學問さへすればよいと云ふやうになつては、却つて弊害を生ずるやうになる、現にニユーヨルクの女子大學卒業生の八分は寡婦で、漸く二分が家庭をつくつて居るといふことを見ても、女子教育が男子の教育の程度に相當しないといふことは、遂に女子をして其天職を忘れしめ、俗に所謂氣位の高い生意氣娘といふのが出來上り、往々一家の整理を忽諸に付するやうな事になる、故に女學校でも、女子の家庭をつくる上に必要なる學科と、必要なる技藝を授くるやうにしたいものである、あまり飛離れた學科や遊戲を授けると何うしても始末のわるい物が出來上らずには居られない、それで私の世話をして居る職業學校にしても初めは專ら女子に職業を授ける爲に、中流以下の女子を收容したいと思ひ、態と職業學校などゝいふ名をつけたのであるが、さて開校して見ると、世の風潮がそこへ來たのか、中流もしくはそれ以上のものが續々入學するやうになつたのであるから、それを幸ひ、一家の主婦として必要なる學術技藝を授くるやうにして居る、

實に君の言の通りで、寡婦で行くに便利な容貌、もしくは財産のあるものは別として、あまり女子に高等の學科を授くるのは考へ物である、如何となれば、大學とは名のみ、男子の高等學校以下の程度のものにさへ、それを消化する腦力に乏しく、多くは學問に食傷して居るのであるから、

女子と園藝

◎その四日　午前十時伯爵大隈重信君を訪ふ、予は伯を訪問したること、十數回、幸に一回も面會せられざりしことなく、一回も君の談話に二時間以上を費さゞりし事はない、自分のした話を聞かされる場合にも、それが大に潤飾せられて、耳を傾けざるを得なくなる、實に君の口は、話の泉であらうかとも思はれる、この日前後して訪問したる客三人、云ひ合はしたやう皆渡清する人で、君の高見を叩きに來たのであるが、一人は山を、一人は河を、一人は

海を利用すべく渡淸する人である、君は淸國に山を利用すべく行く人に對しては、淸國の山の利を說き、海を利用せんとする人には海の利、河の人には河、と云ふやうにその利を說き、而も山の利を說くときは、淸國には山あつて河なく海なきが如く、河また海を說く時もその如くで、いかにも重寶なる言說を持たるゝ、其博識には驚かざるを得ないのである、而して此時、野といふ問題は出なかつたので、予は君が得意の園藝談を乞うた、

女子に最も適して居るのは園藝で、人家稠密なる都會で、事情が許さぬのは仕方がないが、女子は臺所の主人で、臺所の庭は畑であれば、女子が園藝の趣味を持たねばならぬのは云ふまでもない、花の如きも目に奇麗と感ずるばかりでなく、目と舌とを結びつけて、味の上に於て、精神に大なる影響がある、而して園藝によつて四つの利益を得られる、その一は健康、その一は道德、その一は經濟、その一は交際の上である、即ち園藝によつて適宜の運動をなし、同時にあらゆる苦痛を忘れ、他の思想の働きが靜止して花卉に集中し、隨つて血の循環、胃の働きが活潑になる、その間は心の邪念も自ら消滅して、欲望が高尙になる、殊に女子は神經が過敏で、寬容の氣象に乏しいが、それをも園藝塲裡に一變することが出來て、夫婦家庭の關係を調和することが出來る、以上の理由によつて身體健康に、一家に煩ひがなくば、直に經濟の上にも利益がある、上等の社會でも中等の社會でも、子供にでも、自分の造つたものを交換する如きは美しい交際で、來客があれば、自分に畑に案內して、一所に運動する、花を取つてやる、子供でも居れば果物でも取つてやる、誠に交際の上に品が好くして愛嬌がある、世間の園藝の興味を知らぬ人は、道樂の如く思うて居るのであるが、決してさうでなく、前述の如く經濟的、交際的、道德的、健康的にして、女子に尤も必要にして適當な仕事である、

肉體と精神の寄合

◎その五日　午前十一時文學博士村上專精君を訪ふ

君の博識で薄識の善男善女を相手に多く說敎せられた所から、話が極めてよく解る、そして必ず譬喩がある、この日の話にもそれがあつた、

人と云ふものは、有形の肉體と、無形の精神と、この二つの合一したものが人間である、例へば扇子と云ふものは、竹ばかりのもなく、又紙ばかりのもない、硬い質の竹と、軟い質の紙と相寄つて、一つの扇子といふものが出來て居る、もしこの一つが離れたら、もうその離れた時が扇子と云はれぬものとなる、職人の製造したその時から、夏であらうが、冬であらうが、扇子といふ名は始終ついて居る、併し離れたらモウ扇子といふ名もなければ働きもなくなる、人間と云ふものは、身體と心と二つの寄合で若し身體ばかりの人間があつたら、それは人形、心ばかりの人間があつたらこれはどうも幽靈とでも云はなければならん、

肉體もよくせねばならぬ、精神もよくせねばならぬ、人形になるな、幽靈になるなと云ふ話の冒頭がこれである、烟い話も、君は烟くなく聞かせるに妙を得て居る、敎育家は得て丸い話も四角に聞かせたがるが、甚よろしくない事である、

出來ない相談

◎その六日　午後三時高等女學校長棚橋絢子君を訪うた、君の話は大分變つて居る、

私は泣く事が下手で困る、他の學校の卒業式などへ行つて見ると、校長が聲をくもらして、今日皆さんとお別れするについては、皆さんは常々私どものお諭し申した事をよくお覺え下さつて、將來お案じ申上げるやうな事もありますまいが、成らう事なら、皆さんの袂へなりと這入つて居て、將來をお見上げ申したい、と斯ういふやうな事を云ふ、すると生徒は涙を雨と瀉らして、こんなよい先生はないと、一方ならず恐悅する、私もやつて見たいと思ふが、どうも袂の中へ這入るなど、そんなしら〴〵しい、出來ない事はどうしても云へません、

これは古い話でありますが、西村茂樹先生が、私に弘道會の婦人部を作つて呉れぬかといふ御相談がありました、弘道會と云ふは有名な道德會でありますから、あまり道德上評判のよくない人は、無論入れて貰うては困るといふのでありました、頗る御同感と云ふので、三輪田眞佐子さん等と相談をして、十幾人かの人が出來ました、すると或日何の誰さんを弘道會へ入れて貰ひたいと西村先生の話、その人は困るではありませんかと云ひましたら、先生はそうでもあらうが、これは餘義ない所からの話、是非承知して貰ひたいと云はれるので、先生それではお話が違ひませうと、その時はそれで物別れとなりましたが、兎角世の中はむづかしいもので、道德會へ不道德な人をも交へねばならず、また權門などに超然たるべき筈の先生に、でもあらうが、などといふ言葉を聞くのは、一つは社會の罪であらうと思ひます、

立禮と茶道

◎その七日　午前八時東京裁縫女學校の講師田畑夏子君を訪ふ、君は幼時より生花茶道に深く造詣せられた人である、或時予が『釜の湯に聲を讓りて降積る雪にたえたる軒の松風』と云ふ腰折を雜誌へ出した事があつたが、その歌が面白いからと云ふので、小森松風君に紹介せられて面會したのが始まりであるが、普通の茶の湯生花の先生と變つて頗る面白い所がある、この日君の洋式茶道談を叩いた、君は曰く、

私の洋式茶道と申しますのは、日本の禮式を基本として、茶道を立禮にしたものであります、洋式と申しますは、西洋人または、坐ることを窮屈に思ふ人に、立つて點茶する作法で、決して西洋流といふ譯でも、和洋折衷と申すのでもありません、時々私どもの奉職して居る學校、また出稽古をして居る家などへ、外國人の客がありまして、點茶して饗應しますと、大層其法式の優美なると、その味を賞美し、就中稽古をしたいなど〻申すのもありますが、さていざ稽古となりますと、長い間坐つて居る事が出來ませぬから、途中で飮むだけの事を略式で見せる位に止ります、それでは廣く日本の茶道を傳へることが出來ませぬから、立禮といふ事にいたしました、それに就ては津田梅子氏の如きも大層贊成せられ、小杉榲邨博士の如きは、日本にも昔は腰をかけて、食事をしたと云ふ事もあり、宮中お歌會の如

きも、腰を掛けて居るといふ有様であるから、立禮の茶道は頗る當世に適したものであるとて、大層賛成して下さつたやうな有様であります、既に私の一二關係して居る學校でもこの一月より初め、自宅にても日曜日には、普通の稽古の外に、この洋式茶道を敎へる事にしました、何れ後年一度洋行して、充分西洋の作法を研究し、やゝ完全に近いものを、後世に傳へたいと思うて居ります、併しながら〳〵前途遼遠であります、

社會と家庭

◎その八日午前七時麻布中學校長江原素六君を訪うて、談家庭敎育の事に及んだ、君は曰く、

私はもと、今の新宿の停車塲のある近所に於て生れたのであるが、今でこそあの邊は少し賑やかになつたが、其頃は實にひどい片田舍であつた、私が始めて學校へ行つた時、其頃は學校と言はずして、寺子屋と稱しだが、そこへ初めて行つたのは八九歳の時であつた、その時一番初めに聞いた話は、猥褻な話であつた、それから又或時は盗賊をする事を咄して聞かせる、何でも斯う云ふ風にすると唐茄子を盗むには都合がよいとか、或は柿を盗むに付てのやり方を傳授するといふたやうな譯で、毎日そんな事ばかりを聞いて居るものだから、私も泥棒根性が大に起つたのである、所が私の家庭が實に嚴正な家庭であつて、而ういふ風に學校に行けば、手習の間には猥褻な講談が此所の方に始まつて居る、彼方には盗賊の講談があつたけれども、宅に歸ると實に少しの事でも汚れた事なんぞは言はない家庭であつたから、家に歸ると忘れてしまふ、又學校に行くと覺えるといふ様であつたが、家庭の教育の方が非常に効を與へて、それで今まで來たのである、若し私の家庭が普通であつたならば、柿や唐茄子を盗むのが一つの階級になつて、不良少年に陥つたかもしれぬ、して見れば、即ち小供の意地が悪いとか、親の命令に従はないとか云ふのは、世間の風俗、或は社會の感化が及ぼした結果であらうと思ふ、而して又斯の如く世間の悪感化を受くるやうな小供は、善い感化をうくれば、却つて普通の小供より善くなるに決つて居るのである、

實に君の言の通り、人の心が善悪の二道に岐るゝ

のは、僅に棒杭一本の差である、故に百までといふ三歳兒の根性に、よく注意して、知らず識らずの間に善道に踏入るやうにせねばならぬ、

鳥情と亞米利加式

◎その九日　午前十一時中島春郊君を訪ふ、種々雑話の末、人情談より鳥情談に移つた、君は曰く、

鳥は一體雄が雌をかばふやうである、或池に鴛鴦が下りたので、矢を番つて雌を射ると、雄は逸早く逃げて仕舞ふ、跡で射た雌を見ると、胴ばかり殘つて居る、その翌年一羽の雄を射ると、羽の下に梅干のひからびたやうなものがあるのでよく〳〵見るとそれが雌の首であつた、といふ話、それから今一つ例を擧ぐれば、鴨の泳ぐのを見ると、暗夜には雄が先に立ち、月夜には雌が先になる、月夜には餌もよく解り、網などの張つてあるかないかゞ解るからである、そして雌が網にかゝるやうなことがあると、雄もそれにかゝつて、共に捕られるが、雄が先へかゝつたら、雌は遠慮なく逃出す、これは事實である、

君の話によれば、鳥類は亞米利加式と見ゆる、何うか人間はさうでなく行きたいものである、されど男子が女子に不人情であれと云ふのではない、

歳末の裁判所

◎その十日　午前九時虎の門より東京府廳へ行く積りで外濠線の電車に乘つた、するとその隣りに地方裁判所檢事清水孝藏君が座を占めたので、裁判所の近況を尋ねた、すると君は

歳末には存外事件が少い、たゞあるのは金錢上の事である、區裁判所では埒が明かぬと云ふので、地方裁判所へ色々名をつけて告訴する、忙がしいので物を早く片付けたいとするのであらう、

金錢上の貸借にて、時によつては我が取るものさへ取れば、相手は監獄に繋がるゝ人になつても差支ないと云ふに至つては、言語道斷の沙汰で、貸借以外に意味ありげなる條件をつけて、目的以外に裁判所に手數をかけ、結局取る目的さへ叶へばよいとい

ふのであれば、裁判所こそ實によい迷惑と云はねばならぬ、

妻と身分

◎その十一日　文學士伊藤南陽君を訪ひ、結婚談が始まつた、君は曰く、

我友人に獨身で、衣服の面倒にも困るから、當分獨身で居るつもりであつたのが、急に相當の縁があれば妻を得たいと云出した、就ては我々同樣貧乏世帶は、貧乏人の家から來たのでなければ、兎ても張切れないから、そのつもりで、よいのがあれば世話をして貰ひたいものである、

予曰く、衣服の面倒位で妻といふものを娶ると、なか〳〵その衣服の面倒をも見てくれないものである、また妻は身分の下れる所から娶れと云ふ事もあるが、それも程度問題で、貧乏の身にしみた女は、どことなくいぢけて、いかに道理の上からは合點しても、無神經でない限りは、よい物を着たい、よい物を箸にしたい、といふ念慮は常に頭腦に往來して何處となく淋しく、物にはき〳〵せぬやうな所がある、然るにそれ等に不自由のない境遇を經た人は、貧乏といふ事に趣味を感じ、手鍋を提げる間にも云ひしらぬ愉快を覺ゆるものである、故に釣合はぬ縁といふは、強ち上から而已を云ふのではあるまいと思ふ、さて貧にのみ居て心の芳ばしいのは少いものであるから、寧ろ富むといふほどでなくとも鷹揚に育つたのでなければ、貧乏の時は共に泣くばかりで決して慰めてくれる人になるものではない、

無經驗と空想

◎その十二日　午後四時法學博士山崎覺次郎君を訪ふ、例によつて女子教育説を叩いた、すると君は、

私どもゝまんざら女子教育に就て考へないでもない、既に此春倫敦から家庭書を取よせ、面白い材料でもあれば、女鑑に飜譯してさし出さうと思うて居たが、兎ても貴婦人がたの多く見る女鑑には不向の材料ばかりで、といふのは極端な衛生談などであるから、私の注文した時の考の、道德上女子の心得に

なる事でゝもあらうかと思ふたのとは大違ひなのであつた、さて私の考はと云へば、これも此書籍を注文した考へのやうに兎角齟齬し、理想と實際とは仲々伴はぬものである、理屈はどれほどでも善く出來るが、實際は僅かの事が思ふやうにならぬ、昨今小供が學校へ行くやうになつて、急に考へたのが、却つて實地に適切で、これまでの小兒に對する考とは少し樣子が變つて來た、これから追々實地に女子を敎育せねばならぬから、それに對する注意も解つて來るであらうと思ふ、夫までは云はゞ空想を述ぶるに過ぎないで、女子敎育を談る資格がないと思ふ、博識君の如き人ですら、經驗なき事は空想を述ぶるに過ぎないと云はるゝのである、實に子女を育てたる經驗のなきものは女子敎育家の資格に缺けたるもので、小學校の敎師の如きも、まだ書生のまゝの獨身者では、充分敎育の効果を收むる事はむづかしい事と思ふ、

運動と機轉

◎その十三日午後三時藤八拳の家元龍王鬼丸君に招かれて、其競技を見た、予は酒間藤八拳といふものを常に見れど、家元などいふものあつて、其技を傳ふるほどのものではないと思ふたのである、然るに其所謂本式の競技を見ると、四本柱の設備に行司が軍配を持つて立つなど、宛然相撲の如き有樣で、其手のつかひ方などは極めて奇麗に、少しも曖昧といふことを許さない、君は曰く、

拳は手先の遊戯で、決して野鄙なるものではなく、飲食の間にこれを行ふは、その消化を助け、酒客にはその酒氣を散せしめて、宿醉の憂なからしむる、而已ならず、平素之を行ふに於ても、たゞ徒手體操の如き無趣味のものでなくして、大に體育に裨益する所がある、

予は之を珍らしきことに思うて、その日田中理學博士にこの話をなし、道理といふものは、如何やうにも付くものよと云へば、博士は、體育の事はさて措いて、藤八拳はなか〳〵有益な遊技である、人の機

先を制し、機轉をよくするものであるから、幼少の時は少しは學ばせて置く方がよい。もう我々のやうな年になつては、稽古をしても無駄である、と曰はれた。いよ〳〵以て道理範圍の廣さに驚ろかざるを得ない、

藝道の極致

◎その十四日、午前十一時文學博士前田慧雲君を訪ふ、その雑話中の一節に曰く、藝道の極致に達しやうと思へば、安心を了せねばならぬ、例令ば畫を爲さうとせば、心を畫にして、心畫一致の境に至らねば、その描いた畫に生氣を見ることが出來ぬ、西行法師が、出す所の言句皆眞言此歌即是如來の形體なりといはれたのも、心歌一致を歌の安心としたものである、この外、芭蕉が俳諧の道は心を向上の一路に遊ばしむべしと云ふたのも、元政法師が詩歌の道は即是定慧の二法なりと云ふたも、皆心をその藝に融して、心物不二の境に入るを以て極致として居る、それは嘗に詩歌書譜のみでなく、元政法師は、草紙の紙を折るにも、是も修行なりとあつて自ら折られ、戸のあけたても鳴らぬやうにするは、見聞のよからん爲ではなく、心を收めん爲であると云はれた、實に味ふべきことではないか、



小兒の惡戯

◎その十五日、午後三時米國文學博士後藤薫君を訪うて、誕育兒の事に及んだ、君は曰く、

實に小供の世話位面倒なものはない、目の前で何ほど氣を付けても、少し目を離すと何んな危險な事をするかも知れぬ、見て打捨つて置く譯にも行かぬが、一々これを氣にしたら、一歩も子供を戶外へ出すことは出來るものでない、併し存外怪我せぬものである、この頃外字雜誌を見たが、それにある學僕が經驗した、小兒が一時間中の惡戯を列記してある、その一、息の切れる位、十五分間續けさまに泣通した、その二、優に毛枕を作る事が出來る程、予の頭の髮といはず、髯と云はず無闇にむしつた、その三、火箸を持出して來て自分の體の屆く丈四方の壁を引搔いた、その四、大コップの上へ座つて壞して仕舞つた、その五、釦を六個嚥下した上に糸卷の糸を大抵喰べた、その六、母親の裁縫箱を火の中に投じた、その七、大コップの中へ猫の頭を押込まんとして猫に酷く引かゝれて泣出した、その八、姉の人形を玩弄の荷車に乘せるのだと云つて、到頭人形の頭を缺いて仕舞つた、その九、ソフアーの端を壞して、それから棚から下ろすと云つて、上等の皿を二個割つた、その十、伯父の洋杖で窓硝子を二つ壞した、その十一、石炭場に轉げ込んで白い衣服を眞黑にした、その十二、鳥渡目を離して居る間に、敷物へ火を落して燒いた、その十三、ソフアーの下へ這入り込んで何うしても出て來ない、菜子をやつて漸う出て貰うた、その十四、母親の上靴の中へ牛乳を注込んだ、その十五、椅子の中へからまり込んで仕方がないから、椅子を壞して出した、その十六、母親の擘を附付けて玄關へ飛出し時、敷石でイヤと云ふ程鼻先をすりむいて、その上に着物を引掛けて一尺ばかり裂いた、と云ふやうな事が書いてある、よく辛抱してそれを見て居たものである、これほど烈しいのも見たことがないが、子供の惡戯も興に乘ずると應接に暇なしである、その惡戯も出來ない樣なのになると病氣などかあり、孰れにしても子供は世話のやけるものであるが、その惡戯の間に他日快活な人にも、殘忍な人にもなる要素があるのであるから、頗る注意をせねばならぬ、

世はさまぐ

◎その十六日、けふは大晦日である、いづれへ行かんかと考へた末、御家庭の御寫眞を拜借の事を思ひ出して、午後三時北白川宮邸へ參候した、刺を通ずると直に應接所にとて案內せられた、世間は年暮の營みに騷いで居るのであるが、流石に同邸に入りし時は、既に新年を迎へたるやうに覺え、右は應擧の鶴百態を畫ける金屛風、左は唐畫で廿四孝を寫したる銀屛風の中に、菊花御紋章の御椅子に腰打かけたる心地、一時間前の自分とは別人のやうなる感の起

るに、まして鄭重なる御取扱を受けて、唯々恐入るの外なく、かくて願出でたる御寫眞は滯なく下賜せられたのであつた、やがて郊外に出れば、世上の雛壇はもとのまゝの大晦日を演じて居るのである、車夫も今年のひき納めと云ふので、大した景氣である、それより除夜の孤兒園を訪はんとて、もとの東京孤兒院、今の東京育成園を訪うた、

この育成園に收容した孤兒は四十八人ばかりで、その他の家族を合ずと、一食六升、朝は粥にして三升、臺所の景況はそれで知るべく、この孤兒の此園に收容されぬとすれば、今頃は如何にあはれなる歲暮を送ることであらうぞ、園主の情は多くの慈善心を喚起して、我等の家庭よりは服裝その他も申分がないと思はるゝ位、それに他の孤兒院など、違つて、いづれも國家有用の人たるべく、出來得る限りの教育をして、この孤兒の中から中學校を卒業したのも、高等女學校を卒業したのも、或は洋行したのも、或は良緣あつて嫁したのもある、而してこの大家庭の經費はと云へば、一ヶ月僅か三百圓位であるとのこと、いかに家事經濟の行屆きたるかを知ることが出來る、夜は院主が枕頭に便器の三四個も並ぶ如き有樣で、頑是なき幼兒の、失禮ながらあまり見よからぬのを、兩懷に餘るほど入れて寐る所などは、兎ても尋常の慈善心では出來ぬ事である、そこで育成園と改稱したのも、孤兒院といふを直に耳に入れるに忍びないとての事であるが、世間の同情を仰げる同園で、この事ある、園主の心になれば泣かざるを得ない、予は福々しく衣服をかさねて、長時間中笑ひ興ずる群兒を見て、而も除夜のあはれを一層深くしたのである、さるにても園主北川波津子君がこの多くの孤兒等と、いかに深い因緣を結んで居る事であらうぞ、

客を呼ぶ注意

◎その十七日　元旦の風采をつくらむといふ程でもなけれど、去年の名殘の蓬髮を理めんとて、理髮の名人篠豊次郎君を訪うて、その手を煩はした、君は

さすがに一方の棟梁だけあつて、理髪師としてゝなくとも成功する人で、江木博士の如きも、大にその人物を買つて居るやうである、君が徒弟に對する注意の如きは、實に行屆いたもので、左に當日予に語つた一二を記さう、

お客様が見えたら、一寸手を止め、お客様の顔を見て一寸腰をかがめ、入來ツしやいとお世辭をいふ、私はいろ〳〵に試して見ましたが、誠に困ることもあります、これも營業の勸めで行はなければなりません、腮の下また鼻の穴など剃つて居る時は、お客様の顔を見ないで、入來ツしやいと言ふ人もあり、刈込でもして居る時に來たお客様は、鏡へうつツた顔を見て、入來ツしやいと言ふ人もありますが、これ等は餘程お客様に對して粗略に當りますから、矢張面倒でも、一寸手を止めて、お客様の顔を見、少し腰を屈めて、十分卑下をして、お世辭をいはねばならぬ、又お客様の込合つて居る時は、傍にある新聞ならば、一寸お客様の手許に取上げて、それを御覽に入れる、すべてお客様のお出でになつて居る事を念頭にさへ置けば、若し止むを得ぬ急用のあるお方でも、遠方のお客なれば兎に角、近所のお方なら必ず來て下さる、お客様がお入來になつた時と歸る時はハツキリと挨拶せねばならぬ、

見馴れぬお客様は、得て麁略にしたがるものであるが、この見馴れぬお客様が後に邪染のお客様になるので、新規に店を持てば、皆フリである、技術を勉強し、お客様の取扱によつてお邪染になる、併し何年經つても何十年經つても、フリのお客様は大切で、如何ほど賣込んだ店でもそれで安心は出來ません、知らぬお客様が、皆私は友人より聞いて來たとか、親類より聞いて來たとか云ふてくれゝばよいが、もし默つて居る人が來て、隨分未熟な者に仕事をさせ、そのお客様が、後でそれを云はれて隨分後悔する場合があるから、餘程見馴れぬ御客に注意せねばならぬ、

その他二十ケ條ばかりの項目をつくつて、常に徒弟に聞かせて居るのである、これ等の言は一理髪師の徒弟ばかりでなく、一般の心得となるべきものであらうと思ふ、文士が俳優の人格を高めんとて、夫子先づ人格を下げて居る時に、新橋のお愛さんと云ひ、君の如き愉快なる人のあるのは、甚だ喜ばしく思ふ所である、

交際を無視した贈答

◎その十八日午前十時文學士山本無極君を訪うた君は文學者と云はんよりは事業家で、大學に居る時の學資は汽車の枕木を受け合うた利益であると云ふ有様であるから、年始の事故、床の上は贈り物で山をなして居る、その贈り物に就て君は曰く、

年始の贈答など云うて、同じやうなものを取遣して、互ひに同じやうな禮を云ふて居る、その贈答品も、趣向でもあれば格別、どんな種類のものであるかと云へば、誰れも知つて居る通り、砂糖、鹽鮭、籠鳥、酒類などであつて、交際の廣い家になると、これ等の到來品で山を築き、その籠鳥や、卵は腐つたものを運轉するやうになる、實に馬鹿々々しいことで、消極的の意見から云へば、寧ろ廢する方がよいが、久しい習慣であり、一方から見れば、之に依つて年始の交歡となすに、強ちわるい事でもないが身分相應といふことを忘れて、下らぬ後腹の病むことをしたり、片祝儀はいけないなどと云つて、苦しい算段をするのもあるが、そんな時は、忝ないと禮狀一本で、決して先方の厚意が無になる譯ではないその他冠婚葬祭に贈り物をすると、すぐに返禮があるが、それは他日同じ塲合があつた時に返禮してもよいもので、さう現金的に、一圓貰うたから、鳥の子餅に鰹節の一本もつけて返さねばなるまいなどといふやうなのは、道理に合はぬ話で、そんな位なら貰ふた時に禮を云ふに及ばぬ位なものである、就中返禮を待つ如きは無論乞食の沙汰である、又香奠返しなど、強ちせずともよい事に、世間の習慣上氣がとがめるかして、その中の幾分を自分の名で慈善會か何かに寄附し、一方には手數を省き、一方にはよい子になるなどは、いよ〳〵以てよろしくない仕方である、もし香奠返しをせねばならぬかはりに慈善會に寄附するならば、香奠を贈つた人の名にして寄附するがよい譯ではあるまいか、

折にふれての感興

◎その十九日　午前四時一絃琴の家元宿田寬君を訪ふ、君は琴曲を以て、小松宮家、中山侯爵、その他貴紳の門に出入し、常に本居、小杉氏等の諸大家の吟詠を作曲し、一筋の糸に四季の風物を歌はして居る、曾て君の訪問をうけて、その曲譜を聽き、大に其妙を感じたので、今一回その妙曲に接せばやと思うて、僅に軒一つはて郡部となるべき、高田へ訪問

したのである、すると幸ひ在宅して、いざこなたへといふ次第であつた、

君はなか〳〵交際の廣い、世間の廣い人で、予は常に身分の上中下を通じて、交際せる數に於ては、あまり人後に落ちぬつもりであるが、君の金蘭簿を見ると、その數に優るとも思はぬのであつた、殊に風流一點張であるから、頗る愉快な話を貯蓄して居る、外に御馳走はなけれど丶いふので、風も氷る夕空に障子を開放するは一風變つて居ると思ふと、所は恰も早稻田を眼下に見おろし、遙に富士を薄紫に染めたる夕陽は、軒に蔓る松の梢をも染めて、その景色譜も及ばぬほどである、予は寒さをも忘れて、それに見とれて居ると、やがて一筋の糸は、富士の美を歌ひはじめた、この一刹那の快は實に何に譬へんものもなく、深くも自然の美と、人工の美の融和に感じたのである、やがて戸障子は閉ぢられ、琴曲は音をとゞめ、山海の珍味は之に代つて我前に並んだのである、その時は普通の年始客、先を急ぐので

匆々車を走らせたが、餘韻は今も耳に殘つて居るのである、

幼兒の躾方

◎その二十日、午後一時醫學士久保杏林君を訪ふ、育兒に付ての小話があつた、

小兒といふものは無邪氣で面白いが、中には隨分面白くないのもある、物をやつても喜ぶでもなければ、氣に入らぬことがあつても怒らず、唯ボンヤリして居つて、人が面白く遊んで居る中に、除物になつて見物して居る、つまり外界の刺激に對してそれに應ずるだけの力のないのがある、そんなのは體格と脂肪が多くて、筋肉にしまりがなく、眼の光りは鈍く、歩行は遲い、どうしてもかう云ふ小兒に對しては匙を投げざるを得ない、併し匙を投げてしまへばすぐに巣鴨へ送るより外に仕方のないものになつて仕舞ふが、忍耐して面倒を見れば、却つてそんなのが物に成る、容易に物に感じない代り、一旦物を記臆した事は忘れない、そんなのは嚴しく叱つて注意

を呼起すやうにするがよい、加減にして置くとよい物の感覺に遠ざかるやうになる、つい面倒なものであるから、それを捨て丶置いて、人間一人畫なしにするなどは珍らしくない事で、大に注意したいものである。

廉價なる藝術

◎その廿一日 午後三時梶田半古君を訪うて、文藝談を初めた、君の話が脱離れて面白い、演劇も面白いが、火事だからと云うて、火を見せたり、雨が降ると云ふて、舞臺を雨しよぼにするなどは、子供をだます仕方で、そんなものは見せなくとも、假裝せる人物と、その境遇を演じ出せばよい譯である、それには能などは尤も我意を得たものである、近頃文士など丶稱して、俗演劇を演ずる事が流行して來たが、その噂を聞いてさへ身顫ひがする

女學生の活人畫などは以ての外で、我々は女子が繪畫を學ぶさへ眞面目でないと思うて居る、何故なれば、女子は如何に研究すればとて、薄弱なる頭腦で到底その堂奥に達するものではない、近來閨秀畫家など云うて評判されて居る人もあるが、あれ丈の事で繪畫の能事了れりとするならば、繪畫を男の學ぶものとするに及ばないのである、

女子が藝術の堂奥に達することは、獨り繪畫に限らず、女子唯一の手藝と稱する裁縫すら、これを男子の手際に比すれば到底お話にならず、權助は三日にして飯の炊きやうを覺え、一たび炊くことを覺えれば、コゲをこしらへる如き愚を演せねど、下女は三年釜の前にあつて、コゲはおろか、硬し軟かしの飯をこしらへて居るのである、然らば女子は手をつぐねて居るより外に仕方がないやうであるが、女子には女子でなければならぬ大役が他に幾つもあつて、これは副職とも云ふべきものである、梶田君が女子が繪畫を學ぶを不眞面といはれたも、多くはの意味であらうと思ふ、繪筆とつて、利いた風な顔をして居るのもよい圖でなからうから、

高尚なる理想の實現

◎その廿二日　午前十時衆議院議員立川雲平君を訪問した、君は十年前の舊識で、偶然標札を見かけて刺を通じたのである、ゆくりなくも貞操談が初まつた、君は曰く、

一夫一婦と云ふ事が尊いことであれば、貞女兩夫に見えずといふことが尤も價値のあることで、日本ではそれを寡婦の美德として居るのは、甚だ結搆なことである、寡婦の貞操を守つて再嫁せぬは、尤も高尚なる理想を實現したもので、あらゆる事情を犧牲に供しても、その高尚なる理想を守ることを樂むのは、甚だ快心なことで、この高尚なる理想の守らるゝ人にして、決して不善な人はない筈である、さればとて國民一般に、悉く高尚なる人格を保たしむることは至難の問題で、法律に牴觸せぬ限りは大目に見るより外はないが、少くも口に高尚な理論を唱へ、高尚なる教育事業に從事するほどの人は、如何なる事情ありとも、二夫に見ゆる如きことを賛成することは出來ぬ、聞く所によれば東京には二夫に見える事をも恥ぢぬ人の、德行呼ばゝりをして、女學校の校長などして居るのもあるとの事であるが、その本人は良心の曇つて居るものと見ても、それを承知する社會の寬慢なるに驚かざるを得ないのである

予は近時貞操問題をも、物質的理論圈内に入れんとする時、君の如き說を時々耳にするは、やがて社會の聲となるべく、甚だ喜ばしく思ふのである。

今一度といふこと

◎その十三日　午後三時女子共立職業學校幹事淀三樹太郎君を訪ふた、君は米國實業學校にあつて、タイプライターと英語の速記法を研究せられたのである、タイプライターは君の歸朝以前、既に女子商業學校にて教授せられ、君はその先驅者たるを得なかつたのであるが、併し手島博士から、女子の職業としては、タイプライターの如きは、最も適切なるものとの說を聞いた數年前は、日本にて之を實行さるゝ時のいつ來るべきかと思ふたに似ず、今日ではその器械が勸工場の賣品となるやうになつたのである

から、やがて英語の速記術も世にもてはやさるゝやうになるであらう、而して此速記術は符號の暗記が第一であるから、少しにてもその事を廢すれば、方則は記臆されても、實地用をなさぬやうになるのである、そこで淀君は他日有用の時を期して、毎日餘暇をつくつて練習せられて居る、予は一日もこの寶の持ぐされにならぬことを望むのである、例によつて君の亞米利加談があつたが、その一節を記さう、

米國でも紹介といふ事は大切に見られるが、人を使ふ場合には少しでも本人が役に立たぬとなれば、紹介などいふものは無價値で、無闇に無價値の人を引立ると云ふ事をしない、そこで實業學校の如きは、學校を出て實業家の役に立たぬやうではと云ふので、實業家に就てその試驗を經た後でなければ、學校より卒業證書を渡さぬやうにしてある、自分も速記術を以て、實業家に就て實地試驗を受けて居る間、時々耳に馴れぬ言葉があつて、今一度と云へば、米國人は今一度といふことを甚しく厭うて、その度に酷評される、兎てもこれでは堪へられるものでないから、幾度飛出さうとしたかも知れぬが、その時は懇々諭されて、實地其場に當ると、なか／＼嚴酷である、然し終にはそれに馴れて、今一度といふことをせぬやうになつた、今日になれば、甚だそれを辛抱し得られた事を幸福に思ふのである、

◎その廿四日　午後一時伯爵吉井幸藏君を訪ふ、君

婦人界とお祭騷ぎ

は誰も知る如く、水難者救濟の爲に十年一日の如く苦勞せられ、而もあまり眞面目なるが故に、その名は他會の如く喧傳されては居らぬが、その効果は頗る擧つて居る、君は近時の婦人狀態に對して、左の如き言を洩らされた、

近時婦人社會の放逸に流れたる驚くばかりで、殊に貴婦人社會では、甲の會、乙の會とて、たゞお祭り騷ぎに狂奔し、一家に芋の煮えたも御存知なき有樣である、戰爭がはじまれば、大仕掛にして出掛ける、何をするかと思へば繃帶卷、繃帶を唯卷く位なら、今少し安直に上手に卷かれることが出來る、一層の事なぜ戰地へ踏出さなかつたであらう、聞えは大層よいが、その實空騷ぎで何の役にも立たない、或婦人會の如きも、半衿一掛づゝを婦人が節約すればなどゝ觸れ出して、いざそれが行はれさうになると、だん／＼お祭騷ぎが烈しくなり、本人等は夢中で分るまいが、實に話にも何もなつたものでない、今少し着實に仕事はする譯には行かぬであらうか、

實に婦人のはね出したのは手のつけられぬものである、

名は高等實は初步

◎その廿五日　午後一時東洋汽船會社副社長塚原周造君を訪ふ、君は少からず英語を交へて、現時の女子教育を非難せられた、

女子に高等の教育を授くると云うて、大風呂敷をひろげて居るが、假に女子大學を卒業したら、どれほど學問が出來る、メートルに量つて見れば、實に知れたものである、而もその大學を卒業させやうと思ふと、どれほどの犧牲を供せねばならぬかもしれない、學問として立行くには面積ばかり廣くて、一つも物に成るほどまとまつたものなく、而も小口ばかりをのぞいて居るのであるから、云ふこと爲すことが眼ざはりになつて、到底本氣で附合ふて居る譯には行かない、それに近來藝者や公衆の前では斷るべき玉乘同樣の遊戲を演じて、少しも耻づる事なく、劣惡小說の口繪と競爭して風俗は驕奢を極め、人たるの道を修むる、學生とは少しも見られない有樣である、それは人を教育するのではなく、人の子を賊ふものである、

君の言や、過激に失せざるにはあらざるも、斯る聲の頻々として耳に入るは、また教育家に罪なしと云ふ譯には行かぬ、

速成の廢品

◎その廿六日　午前八時閨秀畫家野口小蘋君を訪う正章氏に令孃小蘋女史も又座に加はり、水入らずの家庭、いかにも平和なるは、互ひの對話にても知られるのである、小蘋女史は曰く、

婦人は男子と性質が違へば、婦人には自ら婦人の筆致がある、故に男子には一切教へぬことにして、女子のみを教授して居ります、さて誰を教へて見るとなか〳〵物になるのは少いです、それに昔は、風韻さへあれば、形はどうでもよいと云ふのであつて隨分見ておかしいのもあつたが、世の中の進むに連て、一機軸さへ出せば流派の事などは何うでもよい

と云ふやうに、極端から極端に走りましたから、猶猶見當が立たなくなりました、しかし流派になづむといふ事はよくないが、日本畫を描くには、その由來する所を知らねばならず、流派に入つてそれより一頭地を抜くのでなければ、たゞに無法になるばかりで、放逸なものとなつて仕舞ふ、斯の如きはあまり喜ぶべきことでないと思ふ、

實に君の言ふ如くである、然るに近來は、繪畫のみならず、和歌の如きもテニハさへ解せぬ大家の續出する有樣であるから、初學者はこの藝術のまやかし物を買被らぬやうにせられたいものである、

木材彫刻の極致

◎その廿七日　午前八時白川洗石君を訪ふ、君は日本の木材象眼に於ける元祖と云ふべき人である、その象眼術と云ふは、木材に木材を象眼するに、森羅萬象、筆の動く限り、色のあらん限り、天然の木材の色を利用して、好みの圖を作り得らるゝのであるその象眼の深さ寸餘に及ぶことを得る所より、その應用の道は極めて廣いのである、たとへば梅の花を造らうとせば、その花瓣は朱檀で、蕋は櫨を用ひる如く、而も造化の妙は、そのぼかしをも天然に造出され、或は秋海棠の花の色に苦しみ、遂に山桃の木によつて、目的を達したることもありとの事であるその木材の天然色彩と、象眼の術は、君が十餘年の苦心を重ねたる大發明で、當日余の爲にとて造られた墨畫の燕子花の如きは、墨繪ながら濃淡數色に亘るを、忽ち木材を見付け、二時間餘にして製作したのである、斯の如き有樣であるから、昔は數日を費やせし欄間の彫刻も、一二時間にて仕上げ得るのである、古來我國は東洋の美術國として目され、殊に木材彫刻の術に富みその大作も少からねど、君の象眼術の如きは、實に造化の妙機に達せるものと云ふべく、日本の美術發達の爲に甚だ喜ばしく思ふのである、土方伯の如きは妙神に入るものとして、いたく其技を賞讃されたが、その今日に至れるもの、惰夫をして立たしむるに足るべき逸事がある、その一

塲の物語を記さう

君は一大工の忰として、幼時不完全ながらも象眼の術を工夫し、湯本細工に一生面を開いたのも君の發明に基いたものである、されどその工夫未だ不十分なりしが故に、志を得ず、東奔西走中、濱松の樂器會社に就いて、その製作品の裝飾を見たきものと刺を通じてその工塲の參觀を求めた、されどあまり風采のよろしからざりし爲一度は拒絶せられたのであるが、如何に思ひけん、再び呼びかへされて、參觀の理由を聞かれたので、君は樂器に象嵌術を利用したき旨を語つた、すると同社長は何か製作品はなきかとの問ひに、君はこゝより三里ばかりの所に一つの製作品ありと答へた、するとそれを見たければ取よせてくれぬかとの注文、君も一つは足休めにとて立寄つたのであるから、飛んだ面倒な事が起つたと思へど、今更自分から持出した事であるから後へも引けず、よろしうございます、といふ口の下に腕車は仕度をして來ると云ふ始末、何の腕車なれば一走りと、その製作品をとり寄せたれば、同社長は大に君に望みを囑して、されば近日上京すべき都合なれば、同道して農商務省に陳列せる製作品を參考の爲に見てはとの事である、君は非常に喜んで、東京の旅宿に日を期して會合すべき約をなして、箱根なる父の家に歸れば、父君は君の身上を憂ひて外出を許さず、禁足を命ぜられた、されど東京行の約を履まんとして三疊代鉋を取つて木象眼の硯箱三個をつくり、それを錢にかへ、襤褸のまゝ東京に來り、樂器會社長を旅宿に訪れたのである、すると旅宿にては襤褸一枚の來訪者故甚だ危ぶまれたのであるが、遂にその社長にも會見し、事情を逃べて一着の新衣を得、それより毎日農商務省に通ひ、あらゆる製作品の模樣を臨寫し、他日の參考に資せんとしたのである、或日伊藤侯隨員數氏と同省に來り、君の模寫せる態を見て、隨員にかゝる木製の細工品の、日本にて製作せらるゝは幾年の後であるか、さるにても西洋にてこの細工をなすに、常に鍋を用うるは何の爲かなど語られたのであつた、君はその鍋の一言を聞いて、鍋といへば木材乾燥用につかふのであらう、鍋の中にて乾燥するには、何を用ひるかと再思三考の末、小砂を用うることを考へ出した、さて鍋と小砂とを以て如何に乾燥すべきかは天機洩らすべからざるも、この乾燥の方法に成功し、遂に硬軟不定の木材を自由に象眼し得られ、今日の完全なる美術製作品を世に出し得たのである、

妻と夫家の同化

◎その廿八日午後一時明治の大岡越前と稱せらる、東京地方裁判所第一部長今村恭太郎君を訪ふた、名詮自稱、極めて温恭な人である、當日は判事數名君の邸に會合せられ、裁判事件の協議中なりしにも拘らず、少時間を割愛されたのである、その時の茶談に曰く、

昔君女子は、物か人かと云ふ位で、女子の人格は認めて居られなんだのであるが、近來女子も社會に

相當の地位を得らるゝやうになつたのであるから、女子の問題は澤山起らねばならぬ筈である、我々の取扱うて居らぬ民事の方でも、近來軍人の未亡人が、遺族下賜金に就て續々訴訟が起つて居る、これは良人の外に家人と同化することの出來なかつた結果で、その良人を失ふと共に、良人の家人からは忽ち他人視せられるのが多く、遂に良人の餘屬親と財產の爭ひをせねばならぬことになる、故に將來婦人は婚嫁する前に、良人の家人と同化するにつとめ、かかるいまはしき訴訟の種をつくらぬ決心を要するのである、右の有樣にて不幸の地位に立つ寡婦は少くないのであるから、經世家は之を救ふの策を立てねばならぬことゝ思ふ

教訓百人一首のこと

◎その廿九日　午後二時男爵夫人後藤和子君を訪問し、君の教訓百人一首の撰擇に付ての意見を求めた、

私の教訓百人一首を撰定したのは從來の百人一首も、紫式部の雲がくれにしといふやうなのばかりなればよいが、その調のよいにも拘はらず、小供等にこれは何の事ですと聞かれても、その答が出來ないといふのであるから、遊戯の道具にして置くには如何と思ひ、成るべく教訓的の物にしたらばそれ等の憂ひのないばかりでなく、三十一文字のうち知らず識らず人道をも解するやうになるのであらうと思ふのである、故に私のに限らず、一讀一唱教訓となるべき歌留多をとらせたいものと思うて、いろは歌留多の方も、唯今撰んで居る所であります、

と語られた、

予は大にその美擧を贊成し、君が撰ばれたる百人一首の評釋をなし、廣く世に紹介せんことを約した、

藝道の妙域

◎その三十日　午前十時女流琴曲の大家小山喜美子君を訪うて、その琴曲談を聞いた、

私どもは目の見えない上に、近頃まるで耳が聞えぬといふ仕合せでありますが、どうにかその場の呼吸で、合せ物も無事に演じて居ります、藝の妙と申しますと、頭腦の働きが第一で、手先などは第二であります、曲さへ妙に入れば、聲や姿の少し位わるいのは、更に邪魔になるものではおりません、と申して私に姿が見える譯では

ありませんが、さうに進ひながらう思ひます、今は故人になりました不量簡など申すのは、よく合奏を頼まれましたが、爭はその下をポンとたゝきますと、平調子が盤弁に替りました、決して爭に仕掛があるものではありません、藝も妙を越えると、神に入るとでも申すのでせう、さうなると人間業ではないやうに思ひます、

目的の遂行

◎その三十一日　午前十時富士見樓主片澤半藏君を訪うた、君は料理屋の主人として一理屈ある人であるから、その立志談を叩いた、

私も初めから料理屋をするつもりではなかつたが、兼て志望した士官學校の入學試驗に落第したので、餘儀なく油屋になつたのが、此營業をなす始まり、その油屋時代のお話をしませう、何にしても山椒のステッキを杖についた時代の濟生でありますから、なか〳〵商人には容易になれません、それでも決心してさる油屋へ賣子に這入ると、人相があまりよろしくないといふ批難、そんな事は耳にも入れず油を賣りに出ますと、なか〳〵『油エー』といふ聲が出ない、漸く出すとクス〳〵人に笑はれる始末ですから、一合も賣れたものでない、そのうち日は暮れかゝる、段々心細くなつて來たが、麹町の邸町へかゝると、人が出て居らないから『油エー』とやつて見ると、存外うまい賣聲が出る、するとと油屋さんと聲がかゝる、サア〳〵たと喜んで、何でもこゝの商は邸町に限ると、それから人が見えないと『油エー』と聲を出す、邸町では夕方買ひに出るのを億劫に思ふて居る所であるから、呼留められるといふやうな譯で、少しばかり商ひになつたが、どうも利益よりは雜費の方が多い仕合せ、何でも一旦思ひ付いたこと故、これで取付かればならぬと思ふて、よい得意を作る算段をして、どうせ油は何れの家にも入用の品故、どうかして自分のを商ひたいと思ひ、或る大家を目ざしてお百度を踏んだが、果は箒を以て掃出される仕末、それには出入の髮結もあらう、それの力を借らんものと、髮結をさがし當てゝ訪れると、變な男に訪れられたといふ騷ぎ、それでも土産の一つも出して、叮嚀に口入を頼むと、色々智惠を貸してくれて、とう〳〵目的を達するやうになつた、その時の山の手は、水道はなく、堀井が多かつたので、而もそれを吸むのが大儀であるから、女中から口を利いて貰ふ賄賂に二三杯づゝ水を汲んでやる、段々それが評判になつて、こゝでもこゝでも水が切れると、もう油屋さんの來る時分といふ騷ぎ、併しそのお陰で油が賣れる、そこで更に薪炭をはじめ、これも女中に取入る爲に、朝々釜の下に向つて第一番に困る木屑、それも普通のでは面白くないので、樽屋を交渉して、その木屑を仕入れ置き、それを得意になりさうな所へは無代でやる、素より薪炭も勉強したものであるから、目ざす場所は悉く自分の得意にしたことがあります、今になつて話して見るとこれだけでありますが、なか〳〵骨の折れたものでありました、





小説 からむ糸

京都 芝田すみれ

三日の猶豫を與へられたけれども、俊子は斯うといつた大決心も出來なかつたのであつた、けれども、室に火が點され、父の前に燗徳利の二三が並べられた時分に、進まぬながら俊子は遂に結婚を承諾したのである、

父の滿足、母の喜悅、それを見れば俊子も滿更惡い氣持もしなかつた、けれども其は、ほんの束の間で、最後に父が、

『俊、お前もそう決たからには、もうふつゝりとお豊のことは忘れるがいゝぞ、譬へ昇さんと夫婦にならうが決してお豊のことは飽くまで口に出してくれないがいゝぞ』

と、憂慮顔に斯う言はれた刹那、夢のやうに、只『はい、はい』と應じたもの丶、今更ながら已の結婚も承諾したことの、餘りに前後不覺であつたことを悔いて恨むで、獨り小さき胸の中で、ぢだんだを踏むだので、宛で放心したやうに、蒼ざめた頭を垂れて己が室に退いた。

未だ宵ながら冬の夜の淋しさは閒寂として、四隣又聲なく、騷ぐ樹立の音が馬鹿に悲しく、情緒に觸れては、いよ丶絕えがたく、俊子は遂に思ひ切つて床に入つた、そうして目を閉ぢて、無理からに寢やうとすればする程、思ひ出すのである。

豊子!! 實に此の二文字は懷しくも戀しくも聞えるのである、親子の情としては當然のことであるけれ

ども、俊子は嚙んで飲み込むでも、未だ可愛さは飽き足らぬ程なのである、當然だつたら己が膝元に置いて、朝な夕な蝶よ花よと愛しがられる身でありながら、日陰に咲きし花の悲しさは、まだ物事わきまへぬ身で、知らぬ他人を父様母様と侍きて、日々悲しき運命の手に弄れてゐるので、どんなに其が辛からう、何んなに悲しからう、と思ひ來つては、俊子は己が犯せし罪のそゞろ空恐しく不覺ず豊子に感謝の涙を惜まないので、今からでも速く逢ひに行かうかとまで思ひ至つて、がばと床に蹶起きた、けれども結婚のことに思ひ及ぶと、又もぐつたりと冷き額を濕つた枕につけて悶えるのである、



然り俊子は今度の結婚全く嫁ぐ氣にならないので、只だ先に、兩親が不幸な自分にまで低頭せられん許りに頼まれ見ると、矢庭に勿體なさが胸一ぱいになつてきたので、只不覺に承諾の言葉を漏したのみで、決して心からの滿足の笑は漏すことは出來ないのである、だと言つて瀬川昇の家は決して惡くない、昇は高尙な人物で學問もある、金は鳴る程ある、加之嫁が仇の姑もない、眞にこんな上々吉の緣が數有うか、俊子の兩親が兩手を突かん許りに頼むのも又當然の事である、俊子も萬更それを察せぬでもないけれども、何うも豊子を捨てゝまでとは思はぬ、又親の情としては可愛子を他人手に渡

して已は他家に嫁ぎ、殘る子供に辛き目を見せることは、到底出來ないのである、死して一日一時間の逢瀬も、未だ物足らぬ氣持がするやうな俊子としては、今後ふつゝりと思ひ切つて、日を送らうと言ふことは、心が鬼でないかぎりは出來ることではない、と言つて此の結婚を反古にすると言ふ迄は親に對して勇氣がないのである、實に此に至つて俊子は己が身の置き處なきに失望し、落膽し、果は悲しくなつてきて、熱い涙が、いやに手甲を濡すのである、

寧そのこと、昇さんに豊子のことを打明けて、共に、膝下に置いて下さるやうに、賴んで見やうかしら、そうすれば、兩親も滿足、己も此に越した喜悦はない、けれども、フト父が最後の言葉を思ひ出して見ると、此の窮策も徒に取り越し苦勞に過ぎないのである、

眞に、俊子は絶望の淵に沈むだ、精神はいやに興奮して、胸中は張裂けんばかりになつた、

軈て俊子は力の失せた、にぶい目を開いて眠むげな机の上の洋燈を、ぢつと見詰めた、稍々暫し洋燈は次第々々に化して、果ては不思議や、懷しい切下髮の豊子の立姿!!

恨めしさうに俊子を見詰めて、

『眞實の母ちやん、何せ豊ちやんを殘してお嫁に行くのよ、豊ちやん淋しいわ』

無邪氣な聲も今日は何時になく恨めしそうである

俊子はそれを聞くと、不覺聲を絞つて、

豊ちやん、許して頂戴ね、眞實のお母ちやんは、めつたと豊ちやんを殘しておくもんですか、死んでも豊ちやんとは一しよ、さあ、お母さんが抱いてあげましやうよ』

と兩手を出してヒシと抱かんとすれば、にくや夢覺めては只茫として深い吐息、

外は何うやら吹雪の淒さ!

知るや知らずや、其翌早朝雪を犯して素足のまま

で、髪ふり亂した若き狂女の、泣き叫ぶ小女をヒシと抱いて、裳もあらはに西に東にさまよふものがあつた、

小說 夕靄

名古屋　大久保きん女

若太郎が小便に出た序に、今日學校で敎はつた、照りもせず曇りも果てぬ春の夜の、朧月夜にしくものはなし、との歌を思ひ出し、垣の外へ出で空ふり仰ぎ、成程照りもせずだな、と思つてゐると、不意に、

『若ちやん若ちやん』と呼ぶ者がある、誰ッ？と回顧ると、隣家の胡桃の木の下に、お隣りの姉様が、此方を向いてお出で〳〵をして立つて居らッしやるで若太郎は直ぐ駈け出さうとしたが、自家の臺所の方で母様が、

『若太郎ッ！』と呼ばれたので、鳥渡躊躇らつたが

直ぐ母様の事なら、大概座敷へ行つて鋏を取つて來ておくれ位の御用だらうと思つて、關はず姉様の傍へ駈け付けた、

『若ちやん日常の様に、裏のお池を廻りませうね』と姉様は懷かし相に、若太郎の手を握つた

『あゝ』と元氣よく答へて、二人は並んで田甫道を歩き出した、麥はもう青く延びて、菜の花もチラホラ開いて居る、もう十日も經てば長閑な春風が吹き渡つて美くしい蝶々もひら〳〵舞ひ遊ぶ事であらう。氣が付いて見れば、姉様も今日は着物を着換へて居る、今日は何の日だつけと若太郎が考へて居ると、

姉様は俯向きながら『若ちやんは、ビスケットが好きだつたね』とつかぬ事を聞く、

『あゝ僕大好きだよ』若太郎は殆んど無意識に答へた、

『それから戦爭の畫も御好きでしたね』

『寫眞か、寫眞繪も好きだよ』

『そして此頃學校ではローンテニスとかゞ流行り出した相ですね』
『然う〳〵大流行だ、中々面白いよ、僕毬はあるけれど、ラケットが欲しいな、御父樣が買つて吳れると宜いけれど』
『ホヽ、若ちやんは何でも御好きね』と姉樣は不意に陽氣な聲を出した、
若太郎は不審で堪らない、姉樣は何故今日に限つて此樣な話をするんだらう、然して時々寂しい笑を浮べて、獨で何か考へて居る、どうも變だなと考へながら、歩いて居る中に、何時か二人は可成廣い池の堤へ上つた、
『さあ姉樣貴女は其方から入被しやいよ、僕は此方から行くから、然して日常の樣に走らないで早く回りつこをしませう。
『いゝゑ、若ちやん今日は二人一しよに廻りませうね』
『何故？』
『何故ツて……今夜の月は何だか大層暗いねえ』
若太郎は微聲で
「照りもせず曇りも果てぬ春の夜の朧月夜にしくものもなし』と口吟みながら、又二人並んで歩き出した、
向ふの堤の五六十本の松並木が黑く夢の樣に浮んで池の面には矢張り薄絹に包まれたやうな朧月夜が漂ふて居る、何處からか笛の音が聞えて來る樣な眺望
『若ちやん妾ね、今夜貴君にお訣別しようと思つて日暮から彼處に立つてたんですよ』
『エヽお訣別ツて、姉樣何處かへ行くの』
『ゑゝ東京へ』
『東京？何時？』
『明後日』
『何仕に？』若太郎は恰で月夜に自分の影を追ふ樣に問詰めた、
『ゑゝ姉樣、東京へ何仕に行くの』
『あのね、妾ね、實はお嫁りするの』

『ゑッお嫁り？』

姉樣が顏を赤くして四邊を見廻すと、若太郞は然も驚いたと云ふ顏付で立止つて了つた、實際若太郞の驚きは非常なものであつた、けれども心の裡では成程然う聞けば、今日僕が學校から歸つて來た時に家の母樣と酒屋の内儀さんとか『お若いけれどお美〻しいからね』と話して居るのを、何氣なく聞いたが、夫では矢張り姉樣の事を話して居たんだ、如何しても姉樣はお嫁りするか知らと思ふと、急に悲しいやうな寂しい樣な氣が犇々と身に迫るのを覺えた

兄弟もなく、姉妹もなく、殊に幼い時から連と交はるのを厭ふ、と云ふよりは、一種人を恐れると云ふ方の若太郞に心から親切に眞の姉弟の樣に交際つて吳れたのは、唯此の姉樣あるのみだ、時に若太郞は此樣な事を思つたことさへある、僕は何故もつと早く生れなかつたんだらう、せめて姉樣と同年位だつたら、僕は姉さんを嫁さんに貰つて、一生一しよに暮すんだにと、だから何れ姉樣は他家へ嫁くのだと云ふ事は知つて居たに違ひない、雖然何しろ姉樣は未だ十八の花も蕾と云ふ齡だから、豈止まだ〱と思つてたのに、夫が眉毛へ火の點く樣な、明後日、而かも東京へと云ふのだから、若太郞の驚くのも無理はない、

姉樣は唯無心で若太郞を急き立て〱、漸く松並木の傍へ來て、立ち止つた、其顏を仰ぎ見て、

『だと、僕もう姉樣に逢へんのね』と曇つた聲、

『いゝゑ妾はお嫁りしても、實家は矢張り彼處だから、妾時々歸つて來てよ』

『けれど、夫は偶にでせう』

『夫は然うだけれど』と折角作つた笑顏も直ぐ、寂しそう、

何處かで、夜鴉か二聲ばかり鳴いた。

池に沿つた松に手を掛けて悄然彳ずんだ若太郞は少し氣を換へたらしく、

『姉樣は何だッて東京なんかへ嫁くの』

『だッで父樣が行けつて仰しやるもの』と曇つた姉

様の顔は一層寂びしさが増した、
「姉様が行つて仕舞ふと、僕一人法師だ、僕は姉様が一番好きたッたけれど」
『若ちやん、妾も若ちやんが一番好きなのよ』相手もほろりなつた、
稍々少時くして
『けれど姉様東京へ嫁ッても、僕とは仲宜でせう』
『ゑゝ仲宜とも、若ちやんと姉様とは姉弟ね』
『姉弟？』
『いゝゑ、今日から姉弟になるんですよ、ねえいゝでせう、』
『あゝ、だと姉様は僕の本當の姉様になるんだね』
『ゑゝ左樣なの、だから若ちやん、妾の事を忘れないで時々お手紙を下さいよ、
『あゝ上げるとも、屹度上げるよ』

翌々日姉様は遂々東京へ嫁入つた、それから又一週間程過ぎて、其婿君と共に初客として實家へ來た其時の若太郎への土産は、ローンテニスの道具一式とビスケットの鑵詰と雜誌が二三冊とであつた、
然して其夜姉様と若太郎とは相携へて、彼の池の堤を逍遙した、けれども其時の姉様は、決して先夜程寂びし氣でなかつた、のみならず、此の新夫婦は何か都合があると云ふので、共にその翌日東京へ歸つて了つた、
其後若太郎は、彼のローンテニスの道具を見る度に思ふのであつた、
『姉様はスッカリ田舍が厭になつたと見える、東京つては其樣にいゝ處か知ら、僕も一度行つて見たいな』と、けれどもそれは決して、
『僕は好きな姉様が居るから、夫で僕も東京へ行つて見たいのだ』と云ふ樣な考では決して〳〵なかつた、

貴族院議員文學士 男爵 千秋季隆君選

和歌兼題 月前柳

天

十六夜のつきをかゝみにみたれ髪いまや梳くらむ岸のあをやき

東京 林艶子

地

常陸 岡田萬子

春の月おほつかなくもかゝりけりゆふげのけむり靡くやなぎに

人

大阪 木村春江

おほろ夜の月やえだ葉をゑかくらん
かけおもしろきまどの青柳

、、○



秀逸

○○ 松山 上原のふ子

心をもひかるゝものは青柳の糸にかゝれるはるの夜の月

○○ 薩摩 松原岑子

おもはゆくやなぎの眉のたれしより月もかすみをへだてゝや見る

○○ 東京 青木たま子

川かせにひともとやなきうちなひくかけさへにほふ春の夜の月

東京 土田八重子

少女子か忘れて去にしたまゝりか
やなきの糸にかゝるもち月

○ 東京 高橋珍子

舟つなくきしのやなきにかゝりけり
かすみににほふ春の夜の月

○ 梅はちりやなぎはかすむはるの夜のおぼろ月夜にしく物ぞなき 埼玉 横田やな子

ゆふ月の影おもしろくふく風にすがたをかへてなびくあをやき 山梨 風間千代子

○ さしくしの月はかゝりて青やきのねくたれ髪はいとゝみたるゝ 東京 神田けい子

雨はれて見るもゆかしき青柳のいろそふつゆにつきぞやどれる 岡山 小山松枝子

なにとなくものすごきかな川ぞひの柳にかゝるかたわれのつき 東京 平野喜久代子

○ 里長かかどのやなぎはとしふれど老せぬものははるの夜のつき 埼玉 横田秋子

○ 春の夜の夢より淡きいきかげをやどしてうつるあをやぎのいと 北海道 牧 君子

江のはたのやなきによりてちゝまては舟うたふく月さしのぼる 下野 井上倫子

青やきの千すぢのいとや大そらの月をおほろにつなぎとめけむ 神奈川 中島茂子

青柳のいとよりかけてはるの夜の月こまかにも見えわたるかな 神奈川 岩谷淺子

○ 遠江 内山たま子

そゝろあるく我くろかみをなづるなる柳の糸につきかゝる見ゆ

○ 行く人の影はとたえしはるかはの岸のやなぎにのぼるゆふつき 東京 林 環子

○ 人たえぬみやこもいとゝ淋しきやおほろ月夜のやなぎなるらん 秋田 齋藤たけよ子

○ 薄墨にやなきな窓にうつせるはおほろつきよのたくみなるらむ 東京 松本まつ子

○ 風かなるおほろつきよの糸やなき月なつるとてかけなひくなり 佐賀 尾方八重子

はるのよのおほろ月よにいとゝなほかすみとまかふ青柳のいと 佐賀 尾方綾子

○ いけみづを鏡に今日もあをやきは三日の櫛もてくしけづるらむ 東京 平塚いと子

○ 危くもこずゑにかゝる月かけをむすびとめてよあをやきのいと 宮城 大槻初音子

月見ても思ひある身はあをやきの糸よりむすぶそでのつゆかな 磐城 木幡きよ子

○ 打けふりやなきの糸のいとゝしくくりかへしみん春のよのつき 埼玉 横田政子

○ 青柳のいとにかゝれる月かけをそらにすむとはおもはれぬかな 陸前 末永喜惠子

なかれゆく水にうつれる月かけをむすびとめたるあをやきの糸 秋田 細矢はる子

○ おほろ夜の月の光りにてりそひてみとりいやますかとのあを柳 越後 岩本芳子

○ をたまきのみにしあられと月影にくりかへしみんあを柳のいと 秋田 長田せつ子

○ うちなひく岸のやなきのかけもえておほろにかすむ春の夜の月 名古屋 木下鶴子

岩代 菅野和子

月しろく鏡に似たり岸やなきのはるのすかたやうつし見るらむ
○　東京　谷子逸子

ゆふけたくけふりと見しはおぼろよの月に行てのやなき也けり
○　東京　河合清子

おほろよの月かけうつる池水になひくやなきはまゆつくろらむ
○　東京　吉岡龜子

おほろよの月にうそふく長つゝみけふりと見しはやなき也けり
丶丶丶　尾張　津金糸子

かき根ゆく露ふく風によりかけて月にみたるゝあをやきのいと
丶丶丶　東京　美矢竹照子

春かせにたわめと折れぬ青やなき月のかゝみにみさほてらしぬ
○　神戸　足立あさ子

斯くはかりみとりいろ添ふあをやきの糸より引ける春の夜の月
丶丶丶　神戸　足立ゑい子

誰か袖のうき習ひにや因みけむおほろはなれぬあをやきのつき
丶丶丶　秋田　古瀬惟子

うちなひくしたりやなきに影とめてたまにこほろゝ春のよの月
○　秋田　古瀬りく子

おほろにもかすむみ空のつきかけをつなきとめたる青やきの糸
○　陸前　前田河みさを子

月かけにおほろけなから打なひくけむりとみしは青やきのいと
○　陸前　前田河千年子

長閑にもおほろに匂ふゆふつきはしはしやなきの糸にやとれり
丶丶丶　播磨　横田春枝子

春さめのなこりのつゆな枝にとめもゆるやなきに月おほろなり
○　東京　西村直子

圓かなる月のすかたはまりにゝてやなきの糸にかゝりけるかな
丶丶丶　伊賀　佐々木まさ子

すち毎のけちめも見えてゆふつきの影にゆらめくあをやきの糸

はろの夜は月もおぼろにかすみつゝほのかに見ゆる青柳のいと
○　北海道　牧淑子

ゆふ月をかゞみとなしてはる風にくしけつるなりあをやきの糸
○　東京　和田光子

くしのこと昇りたまひし月にしてやなきの糸のみたれさるらむ
○　越後　松永しげ子

よひ月の影うつくしき江のきしにゆらくともなき糸やなきかな
○　下總　川奈部琴柱子

山すみも今宵かきりと出てゝ見れは やなきにかすむ春の夜の月
丶丶丶　土佐　廣江子

吉野川はしのたもとのあをやきにかゝりてにほふはるの夜の月
丶丶丶　大和　栗山俊子

長閑なる月のうつりてあを柳の なひくすかたのやさしかりけり
○　横濱　鈴木まつ子

かは添のやなきの糸をむすひつゝかすむゆふへの月をみるかな
○　大和　栗山たか子

靜なるおほろのつきにいとやなきなかるゝ水にかけをとゞめて
丶丶丶　長野　北澤清子

月の夜のこゝろを糸にひくやなき來る人もあり來ぬひともあり
丶丶丶　下總　高木美代子

あを柳のいとも靜かに更け行きていよ〱かすむ春の夜のつき
○　京都　佐藤清子

さす月の影もかすめる池の面に浮へてそ見るきしの小やなき
丶丶丶　長野　北澤千枝子

春風にうちけふるらんあをやきは月のひかりをかすめけるかな
丶丶丶　東京　碓井のぶ子

小夜更けて風もしつけきおほろ夜に月をむすへるあをやきの糸
丶○　大阪　木村てう子

○　山口　村上操子

春の夜の月はわつかに打けふるやなきに見るもおほろなりけり

松山　田村多豆子

梅もあれとやなきのかけは春の夜の朧のつきにふむへかりけり

甲府　名取正代子

宮ひとのけまりのさまも偲ばれてしたりやゝに月そかゝれる

東京　笠原節子

春の日もはやくれはてゝ川のもに
　あをやきたるゝゆふ月のかけ

東京　片山はつ子

青やきの枝ふかうしてみとり濃く
　月のひかりもとほり兼れたり

常陸　堀　みつ子

春の夜のかすめる月にうつりよく
　もつれかゝりしあを柳のいと

和歌山　植木謙子

あり明の月をなゝめにうけなかし
　なかれにたるゝ青柳のいとゝ

備後　四松　女史

あを柳のいとたれこめし丸窓に
　かたわれ月のかけ見するかな

和歌山　村田飛佐子

さよふけて風やふくらん春の夜の
　月にけふれる岸のあをやき

貴族院議員 文學士 男爵 千秋季隆君選

兼題和歌　鶯



天

越後　松永しげ子

そらみゝか鳴く鶯の聲すなり
　ほころひ初めし梅のはやしに

地

東京　林　環子

なれそめしうくひすと
はぬはるの日は
愛をおほゆる初なり
けり

人

備前　谷山千代子

山ふかく侘ひ住む身に
もうくひすの
嬉しき節は聞きも洩
らさす

秀逸

土佐　廣江子

君たひし梅のたにさくなつかしみ

筆そめをれはうくひすのなく

、、〇　東京　和田光子

初かすみたちしかたより聞ゆなり
また春なれぬうくひすのこゑ

、、〇　松山　田村多豆子

うくひすの鳴ぬかきりはと言ひて
梅の木かけに立ぬ日はなし

、〇　東京　片山はつ子

咲くうめに待たれつる哉うくひすの鳴かすは春も来ぬ心地して

〇　長野　今村章子

とけやらぬ氷のひまにうくひすの春まちかほにはつ音もらして

、〇　東京　笠原節子

谷かけのふる巣をいてゝさく梅の花に木つたふはるのうくひす

〇　東京　髙橋珍子

梅の花またつほみなる我やとに今朝めつらしきうくひすのこゑ

、〇　東京　豊田とよ子

うくひすは春きにけりと古巣いてゝ霞める野邊の梅に鳴くかな

〇　東京　青木たま子

梅か香をつはさにしめてうくひすの春をしれとやなりはへて鳴

〇　宮城　大槻初音子

鶯のたれにならひてあさゆふのわかつまことに音をあはすらん

、〇　松山　上原のぶ子

うくひすの戀らぬ聲もなかしきは耳あたらしくきけはなるらむ

〇　山口　村上操子

呉竹をうゑぬ宿にもうくひすはふしおもしろくまとにきてなく

ゝゝゝ　東京　土田八重子

うくひすの何を恨みてなくやらむ今年のみちる花にはあらぬを

ゝゝゝ　甲府　名取正代子

我庭になれてそ来なくうくひすのやとにかすへき花はなけれと

〇　下總　高木美代子

嬉しきは春のこゝろの常にあれと初うくひすにしくもりそなき

〇　京都　佐藤清子

思はすも綸筆とゝめてうくひすのこゑにみあくろ軒のうめか枝

ゝゝゝ　常陸　堀　みつ子

訪ふ人もまれなる山の下いほにうくひす來なくはるのあけほの

〇　宮城　大槻慶子

かたことに鳴くもひとしほあはれなりはるなほあさきやぶの鶯

ゝゝゝ　長野　北澤千枝子

ふきかへす梅のかをりをしるへにて藪うくひすも世に聞えけり

〇　陸前　末永喜惠子

立かへる春におくれす君か代をうたひいてたるたにのうくひす

ゝゝゝ　磐城　木幡きよ子

垂れてもあかぬ春かなうくひすの今朝の初音のかくもうれしき

ゝゝゝ　秋田　古瀬りく子

山さとにすむかひありてうくひすの初ねはよそに聞せさりけり

ゝゝゝ　紀伊　とく子

春かすみ棚引く山路わけ行けばみきひたりたゝうくひすのこゑ

〇　兵庫　田淵ふじゑ子

はるといへは賤かふせ屋のこすゑにもたつれて來しかたにの鶯

ゝゝ　陸前　前田河千年子

谷の戸は今日あきつらんうくひすのやさしき聲に夢さめにけり

〇　播磨　横田春枝子

さき匂ふ花よりもれてきこゆなりふしおもしろきうぐひすの聲
ヽヽヽ　陸前　前田河みさを子
待わびて君やまさんといふはかりほこりひいつる谷のうぐひす
ヽヽヽ　東京　牧野靜枝子
長閑なるはる來にけりとうぐひすのはつ音をもらす紅梅のまと
○　尾張　津金糸子
朝な〳〵風のたよりにうぐひすのかすみかくれに聲そもれくる
○　東京　河合清子
春のひはまた長からぬ竹むゝにしゝひろとなくうぐひすのこゑ
○　東京　吉岡龜子
人とはぬ竹のふせやにけふもまたふしながらきくうぐひすの聲
○　佐賀　尾方綾子
なつかしきはつゝれもらして朝毎になれつゝきなくうぐひすの聲
ヽ○　岩代　菅野和子
山の手にいほりむすひて春まではのとかにつくろうぐひすの聲
ヽ○　神戸　足立あさ子
打はへしやなきの糸にうぐひすのこゑのあや織るあかつきの空
ヽヽヽ　東京　美矢竹照子
梅か枝に初うぐひすの音をきかばはる日せわしくなりにける哉
ヽ○　神戸　足立ゑい子
夜をこめて鳴くうぐひすは我宿の竹のねくらやふしうかりけむ
ヽヽヽ　東京　美矢竹光子
朝な〳〵おなしなくれと心してあらたにきこゆうぐひすのこゑ
○　秋田　古瀬惟子
春たてはかとのおせたの滯こほりうちとけてなくうぐひすの聲
ヽヽヽ　札幌　葛城萩枝子
籠の中に身はありながらあめつちの春をわすれぬうぐひすの聲
○　尾張　津金糸子
夕まくれ手なれの小笙かなつれは嬉しきふしにうぐひすの鳴く

○　長野　毛利かつ子
木傳ひてうらみがほにもうぐひすはおのが散せし花になくなり
ヽヽヽ　東京　碓井のぶ子
うぐひすのなく聲けさはきゝそめぬ宿なる梅はさきにけらしな
ヽヽヽ　埼玉　横田やな子
松は琴竹はふえふきうぐひすのうめのはながさゝしてなくなり
○　東京　益子逸子
よにいでぬ竹のふせやになりはへて人くとぞ鳴うぐひすのこゑ
○　群馬　石井寛子
深山路の谷のうぐひすいちはやく春しりがほのけさのはつこゑ
○　薩摩　松原岑子
春風のつれて來つらむうぐひすのけさ梅が枝にはつ音なくなり
ヽヽヽ　神奈川　中島茂子
つまことの音にもなれて窓のとにしらべたへなるうぐひすの聲
ヽヽヽ　神奈川　岩谷淺子
我やどは梅のはやしの近ければうぐひすきかぬあさなかりけり
ヽヽヽ　下野　井上尙子
みつくみに妹がぬけてし朝月よりころびいりたるうぐひすの聲
○　東京　林艶子
この年も日數たがへずおとつるゝいや懷かしき去年のうぐひす
○　秋田　齋藤たけよ子
うぐひすのほのかなるねをきゝ初てしつこゝろなき春のこの頃
○　秋田　齋藤とめの子
沫雪のふるえにゝほふ梅がゝとはるをあらそふうぐひすのこゑ
○　常陸　岡田萬子
織かけし梭の音やみてしづが家の軒端のうめにうぐひすの鳴く
ヽ○　東京　松本まつ子
君がよのゝどけき春にさそはれてもゝよろこびを歌ふうぐひす
○　佐賀　尾方八重子

いつこともわかれともらすうくひすのまつ一聲に春はみえけり　ゝゝゝ　埼玉　横田政子

うくひすの聲のにほへる心ちして出てみたれはうめ咲きにけり　ゝゝゝ　東京　武市はん子

梅か香につれて聞くなりうくひすのなく音ゆかしき奈良の初旅　〇　東京　小林芳子

梅かゝるおくのやかたに一夜ねて　あすもまかはやうくひすの聲　ゝゝゝ　名古屋　木下鶴子

雪笛もおよはさりけり長閑にもこゝろなくさむにはのうくひす　〇　岩代　岸野常子

なにはつを手ならふ窓の梅か枝にまた里なれぬうくひすのなく　〇　越後　岩本芳子

うくひすの今日のはつ音に誘はれて花の木蔭にいつか來にけり　〇　埼玉　横田秋子

朝手洗ふ飯井の水もとりあへすはつれこほしてうくひすのなく　〇　越後　大石ます子

長閑なるひかりはうすき谷の戸も今朝立つ春にうくひすのなく　〇　東京　平野喜久代子

わか宿の梅さきそめて朝な〳〵ゆめおとろかすうくひすのこゑ　〇　岡山　小山松枝子

明日あたり折らんと思ひしうめか枝になこりをしみて鶯のなく　〇　伊賀　菊山かれ子

月の瀬の關にたま〳〵宿かりてきのふもけふもうくひすの日記　〇　東京　神田けい子

谷ふかみうめか香さそふおきかせにたくひて聞ゆうくひすこゑ　〇　北海道　牧　君子

梅咲きてかすみも匂ふ春の日にこゑものとかにうくひすの鳴く　〇　山梨　風間千代子

降る雪を花と見てしかうくひすはうめのたち枝に初音もらしつ　〇　東京　服部彌惠子

咲きそめし梅は風情をそへてけり花にやとかるうくひすの音に　ゝゝゝ　大和　栗山俊子

けさもまた來なかさりけりうくひすのやとる谷間の梅や咲けん　〇　大和　栗山たか子

ゆきの中になくうくひすのこゑきゝてまつ心のみ春をしるかな　ゝゝゝ　横濱　鈴木まつ子

うくひすもこゝろのまゝに山里の木立つたひてなきにけるかな　〇　下總　川奈部　琴柱子

ゑみそめし庭に來て鳴くうくひすに朝な〳〵のねさめうれしき　〇　伊賀　佐々木　まさ子

みやこ人ゆめにも知らしきのふけふわか庵ちかきうくひすの聲　〇　東京　西村なほ子

みやまにも春たちぬらしうくひすの谷のといつる聲のきこゆる　ゝゝゝ　北海道　牧　淑子

梅か香のかをる山路を分け行けばこゑも長閑にうくひすのなく　ゝゝゝ　大阪　木村春江子

うつし植ゑて幾日もあらぬ梅か枝にうくひすきなく如月のそら　ゝゝゝ　秋田　長田せつ子

わすられてまた明やらぬ窓のとにあさひのうつすうくひすの影　〇　遠江　内山たま子

これやこれわか教へ子かうくひすのなきしと告し小枝なりけり　〇　下總　隆子

冬こもる我やまさとのいほりにも春をしらするうくひすのこゑ　ゝゝ　東京　渡邊しん子

なつかしき春日の里に春の來し日をおもひつゝうくひすそきく　〇　秋田　細矢はる子

愛らるゝ聲しもたすはうくひすもここにこめらるゝ憂やなからん　ゝゝゝ　長野　北澤清子

おな初音梅か香おくるはるかせにいつこなるらんうくひすの聲
和歌山　植木旗子

〇いかにして香をかたつねしうめか枝にうひくしくもきなく鶯
埼玉　安部とみ子

〇うくひすの初音きかましわかにはの香りゆかしき梅か枝のもと
廣島　石田松子

〇うくひすの音に通ふらんはるかせに詩人か袖そにほひゆかしき
長野　岡田千穂子

〇春とてもなかしからまし黄鳥のさへつるこゑのたえてなけれは
長野　橋都敏子

〇うくひすの聲もめてたくきこゆなりにほひこもれる梅の園生に
東京　高野もと子

春わかみ垣れのうめもさかなくにはつうくひすの聲ののとけさ

短文

天賞

霜

東京　片山はつ子

霜の幼時は最とも優しき露にして、幾多の蝶や薔薇が其の温かき恵に霑はひけんも、年經ち時變るにつれて、さきの美しき露も白髪雪と見紛ふ許りの霜と化し、其の心根もいと意地悪くなり了んぬ。霜置く所草木は凋みて色を失ひ、虫は弱りて鳴く音いとゞ細り行く、あゝ如何に霜の其の幼時の心に背くの甚だしき事よ。斯の如きは己れ霜のみかは、人も亦斯の如きものあるを知らずや。

地賞

流るゝ一枝

播磨　横田春枝子

中天高く鳶二ッ輪を書き、川畷に若草もゆる野邊の景色、繪にもにたらむやうなるに、細くぬへる小川の清き面を、静に流るゝ花束一ッあり、拾ひ見れば、眞紅の紐もて根元結べる、紅梅二三枝なり、いかに美しき詩料なるよ、この眺め、この配合。

人賞

春の朝

紀伊　茨木とく子

山寺の鐘の音に驚かされ、起き出でゝ庭に下り立てば、殘月は斜に梢にかゝりて、次第に淡く、柳を弄びし春風は、ゆるく面をはらひて、颯爽清冷言ふべからず。遠方の野山は淡紫の一つ色に、近わたりの松杉のみはあきらかに濃し。軒端の梅は馥郁として香り、鶯は枝より枝に飛びかひてさへづりぬ。暫し去り難てに佇めば、東の空は淡紅又濃紅、漸くにして旭さし登れば、木の葉に置く露

と相映じて、いとおでやかなり。あゝ美はしき朝の景なるかな。

、〇梅　　備前　谷山千代子

春季休暇も早やなかばを過しつ、一日妹子と共にほど遠からぬ靜子孃を訪はんものと常よりはやく床を出で、障子を開けば、おしや鶯は逃げて池の面に、昨日まで見なかつた梅の影がちら〳〵と、

、〇冬の小川　　東京　神田けい子

傾きし橋のもとにたゆたふ折しも、色あせし赤の襷結びたる賤の女は、今し堀りたる大根を籠に入れて歩み來るか、事も無げに橋を越えつ。脛高うかゝげて枯尾花立てる岸におりたち籠さながら水に浸して洗ひそめぬ。佇む袖さへ寒き冬の日なるに、岸の薄氷とけし計の小川の水、彼の少女が手先足先如何に冷たき。

、〇年の始　　松山　田村多豆子

あら玉の年の始の心になりなば、世の中は、うきもつらきも打忘れて嬉しからまし、さるをひたすらに、暮れゆく年を惜みし、昨日の心はなにの心なりけむ、といとおやしく、恥かしくてなむ、けさの心は、

〇信ちやんの寢顔　　越後　大石ます子

信ちやんは、ほんとによく睡入つたこと、膝にもたれて梅の花枝持つたまゝ、唇を輕く結んで、この頰つぺたはどうだろう、信ちやんの寢顔の可愛こと、おや信ちやん、笑つて――何がおかしいの、まアー、わたしも一緒に信ちやんの夢を見たい。

〇芹にそへて　　下野　井上倘子

昨日は何よりの御品おつく御禮申上候、よべの歌留多會にて落城、資金のなきから散亂致し居候、御返しのしるし迄に、山島一番、此地名物の孝行娘の芹一籠御らんに入候、御得意の調理法にて、芹殊更に御賞味下され度候、かしこ

、、、初夢　　岩代　菅野和子

いと嬉しきは今嫁ぐなりき、理想の家庭を思ひつゝ。『四海波靜かにて國も治る……』の門送りに車に乘りぬ。轢る音は妙なる音樂と響くよと、身は大鷲の翼上にあり。驚き叫ばんとせば聲ならず、反て目眩み地の底に落ちけり。死せるならんと恍れと至つて輕く、あたりは白き羊の毛皮なりき。アゝ奇なる夢かな。

〇初雪　　越後　岩本よし子

朝まだきより降り初めし雪は、翩々として小蝶のむらがりて立ち舞ふが如く、しばしの間に見渡すかぎり野べも山べも眞白に、冬枯の梢も、ときはの松も、時ならぬ花咲かせ、春や來にけんと思はるゝを、

吹きさそふ風につれてとぶ雪は、さながら、散る花かとおやまた

れつ、日頃いぶせく思ひし賤が伏屋も、錦を粧ひておかしきに、烟ゆたけく立ちのぼりて、えも云はれぬ、眺めになん、

○くれ　京都　芝田　すみれ子

瀲と投げかけた美しい夕榮が、次第々々に色があせると、遙の土手に淡い夕霧が垂れそめて、其處な百姓の黴に通ふのが見える、すると右手の方の苫屋から白い煙が、のんびりと上つて、軈て空中に先きを消してしまつた。夕榮又影失せて見上ぐれば、星の燦き稍々繁く星河又微に中天に流れている、げにや休止を意味する夜は再び訪れたのである、

○筆洗の梅花　東京　平塚　白百合子

或る朝庭に出て見ますと、昨夜の嵐に兄樣がお愛しになつて居た形見の白梅(飛雪)が、大方散らされて、其の樣の美しうございましたので、私は一花も惜しうございますから、皆ひろひ取りまして、筆洗に浮べました、そして其のよい香を他にもらすまいと、障子を引たてゝおきました、

、、、妹　備前　松本　もと子

私が歸ると、芳ちやんが炬燵で、だまつて項垂れて涙ぐんで居るのです、多分阿母さんに叱かられたのでせう、『芳ちやんどうしたんです、え』と顔をのぞくと、蒲團にうつ伏してしまふのです、可愛らしい。

、、、帶結び　伯耆　錦織　幸子

今年三つの僕文子は、帶結びの御祝で、母樣が一生懸命で、ありたけの粧こらしてやりまして、今産土神社へ參詣するので在ります、長い袂を行儀よく重ねて、人力車の上で、紅のついた御口を大事そうにオチョボ口して、サモ〱得意な顔して行きました、やがて歸つた時には、車からおろすのも知らなんで、他愛なく眠つてゐました、

、、、一日の業務　日向　岸上　はる子

地平線上を放るゝ太陽と共に起きいで、先づ身を清め、一日の幸を天地の神に祈りつゝ、なつかしき學び屋に列りて、神の子を相手に、歌ひつ遊びつし、烏の三つ四つ二つ、ねどころへ急ぐと共に伏屋に歸り、殘燈の下に詩書を繙きて、種々の空想にふける、これぞ妾が一日のつとめなれ。

○我が宿　長野　今村　章子

お正月が來たが、何も儉約なれと、破れ障子を梅形で切張なした年賀の人來り、此降雪の寒さに、御宅では春風が吹いて、梅が笑みましたなと云はれ、

冬深み寒さきびしきあさぢふの
　埴生の宿に梅の花さく

としやれましたら、家内大笑ひでした、

新體詩

天賞

露と花　越後　大石　ますこ

花に結びて花にきえ　露に匂ひて露にちる、
奇しき物は世の中の　露と花との契りかな、
花を命のつゆの身は　風をかなしみふく風に、
はなや散らむと心おき　風な吹きそと願ふらむ、
露を力の花の身は　風をかなしみ吹く風に、

露や消えむとかき亂れ　風な吹きそと祈るらむ

地賞

苫屋　　東京　片山はつ子

身を浮舟に任かしつゝ　浮世を渡るわがせこは
船出せしまゝ影もなし　沖ほの暗き小夜中に
あはれ流るゝほかげこそ　往き交ふ船の燈か
戀しき夫の漁火か　心の闇ぞ淋しけれ
寄せてはかへす仇浪の　目も遙かなる沖の邊を
獨り眺めて佇めば　苫屋を漏るゝ月影も
荒磯ぶりにうちかすむ　昨夜の嵐の名殘かや
戀しき夫の影もなし　磯うつ浪はかへれども

人賞

〇微吟　　土佐　廣江子

世に捨てられて世をすてゝ　籠る深山も春來れば
鳴く鶯に誘はれし　昔の夢の偲ばるゝ」
梅の立枝のふりの袖　させし臙脂の香も高う
みかへる人の中わけて　ほこりの色に行きし時」
やがて十九の秋の暮　色なき衣に身をかへて
人なき里に只一人　泣かん運命と誰か見し」

春をおごりの十六の　姿並べし友どちも
今の我身を花咲かぬ　雲のあなたと知らざらむ
果てなき思ひ今更に　何にもだえて迷ふらむ
眞如の月の其影に　滿足を得し我にして」

〇小春　　備前　松本もと子

おきける霜の日にとけて　風の子もなき小春日や
村のはづれの牧場には　丸木の柵のほの白う
小羊小牛むれあそぶ　ものうる人は里川の
橋をわたりて白かべの　村長の家にかくれたり
野には麥まく人々の　ふりあぐ鍬のきら〳〵と
畷をとほる人力車　翁をのせて走りゆく。

〇つとめ　　松山　上原のふ子

つとむれは雲の上にものほるべし、又勤めさる其時は、地の底にも潜むべし、たゞ世の中はつとむると、勤めざるとのふたつにて、あすかの川の川水の、うきしづみある物としも、おもへばいとゞかしこしや、

〇若きはじらひ　　東京　牧野靜枝子

似合ふと仰せし春の君を　疑ふ故にあらねども

始めて結ひし丸髷の　いかにと恥ぢつ姿みに
うつす姿を眺むれば　春を祝ひのとその香に
化粧こがりし我頬の　紅させるさまはづかしや

、○鐘の音　常陸　岡田萬子

年ふる寺の鐘の音　今も昔も變らねど
あした夕につく人と　聞く人のみぞ定めなき

、、○春の歌　神戸　足立あさ子

「注連引はへし松竹や。　みどりの春にあは雪の。
ふる巣を出る黄鳥は。　梅の花笠かつくらむ」
「雲の通ひ路吹閉る。　風は凄まじ春の日の。
氣色を三保の松原に。　乙女の姿とゞめけり」

、○自然の朝　播磨　横田春枝子

草家の屋根に立ち昇る　朝餉の煙ゆるやかに
瑠璃のみ空にまひ上る　自然の朝のゆたかさよ
のきの雀のうたふなる　あしたのうたの面白く
清き空氣に香をおくる　垣根の梅の氣だかさよ
まばゆき朝日背に浴びて　白髪の媼のつむぐなる
いとの車の輪のめぐり　たゆまぬ業の樂しさよ
自然の神はとこしへに　こゝを樂土と定めたる
片山ざとのあさけしき　しくものもなき眺かな。

、○春の歌　神戸　足立ゑい子

「春のあしたの庭の面。垣根に萌る若草や。
池の氷のひま／＼に。打て出けり浪の花」
「みどりの春に相生の。松のむかしや住の江の。
浪はかすみに包まれて。音こそ潮の滿干なれ」

、○枯蓮　東京　喜多村菊子

夕暮遠に榮ゆる雲は、暫時の笑みをものに殘し
うす闇てらす星の光り、漣寂し胸ぞ搖るゝ。
思ひ紅蓮の憂しき運命、朝讃歌の夢にうたれ、
常世燦らの祝ぎを賜びて、汀雜草は頸を垂れき。
されど驕りに極みありて、今は漂介と水にむせぶ
哀れを家鴨こゝろ寄せて、一葉莖への情け走り。
あゝ誰ぞ知らぬ心盡し、泣きて止むべき定ならじ
破れにし蓮の池に立ちて、雁行く空に君を思ひぬ

○友をしのびて　下野　井上倘子

ほころび初し梅が枝に　短册むすびほゝ笑みて
風流まれしそのかみの　いよゝこひしき今年哉。
時は廻りて春はきぬ　去年にまさりて色香よく
咲きそふ花もなか／＼に　友いまさねば恨みなれ。

詩　な

白衣の神に手をとられ
エデンの園に君ひとり
香をうらみぞ白梅よ
捧けんために手折なり
冷き石のなくつきに
こたへはあらず白梅の
つみて手折て猶つきぬ
われを忘れてましますか。
汝をめでし亡き人に
落つるは露かはた涙。
手向けて君のみ名よべば
君のみ魂と光るなり。

東京　豊田とよ子

○里　川

遠山寺の鐘の音の、
里の流に消ゆるとき、
おのが袂をはたく／＼と、
彼方の森より響きゝて、
堤の草わけさまよへば、
柳の糸のたゝくなり。
春の野末にいつとなく、
なごりのいとゞをしまれて、
足もと近かく里川の、
闇のとほりのたれ行けば、
古木にしばし寄りそへば、
さつさゝざれて流れ行く。

北海道　牧　君　子

、、、山　鳩

ふくらふすさぶ山かげの
冷氣人をおそひ來て
靜けき杉の木立かな
社に仕ふやまはとの
森の女神が化身かや
名もなき川におり立ちて
神の使に行くか鳩
靜けき森をあとにして
森のあなたを伺へば
蔭も洩らさず風もなき
如何なる神やまつるらん
白衣かつぐやさ姿
木の間を縫ひて流れ來る
羽を洗ひて今よりは
我も行かなむ諸共に

札幌　葛城　はぎ枝子

○鎖の音

雨に嵐にいたみては
柿色衣肌さむみ
なれては巳が身を繋ぐ
憤怨にのろふ胸の火に
一雫にもあめつちの
神の導く光りならで
獄屋の夢の安かるを
鎖の音も聞えぬよ
朝の露をそゝぎ見よ
深き同情はあふれたり
慰みもなき夕まぐれ
靜かに祈れ罪の子よ

越後　松永しげ子

○煎　豆

羽美しき山鳥の
鳴いたる谷の雑柴木
ぼき／＼折つて爐へ投げて
姿豆いりから／＼と
豆どの帯をとき放ち
躍りそこれて火の中へ
落ちたかはいとおほ急ぎ
上げてやつたがやけどした
といたおけしよの砂糖あつく
ぬつたらほんとにおいしさう
さあさ嬉しと盆にもり
姿たべたよいり豆を

奈良　栗山たか子

○餘　寒

梅はゝやくも春しりて
里にふたゝび冬かへり
高き梢に匂ひける
花にふれんと手をのへは
ほゝゑみ初し月の瀬の
猶肌寒き風の聲
香も高き白梅の
やがてちりくる櫻の花

日向　岸上はる子

、、、運　命

あら波高き浮つ世に
行手に星は見ゆれども
運命の神のあやつりの
のり出したる一葉舟
扨目に見えぬ不可思議の
かぢはいづちに向ふやら

にほふぼたんと咲き出でゝ
片山影の野の花の
いづれはおなじ世の定め
さても不思議の世の定め

王者のかんむり戴くも
日にゝあはすてなはるなも
さてもおかしき世の定め

短歌

天賞

夕春雨　埼玉　横田やな子

ふたつみつ椿花ちるおとはして
ものしつかなるはるのゆめかな

地賞

失題　岩代　岸野常子

嫁おくるひとむれすぎて梅かをる
ひなのほそみち月おぼろなり

人賞

若水　東京　和田光子

くむ手にもくもらぬ御代の影見えて
初日のとけき今朝の若みづ

秀逸

能　友

、、○硯　山梨　風間千代子

たらちねの深き惠みはすりながす
すゞりの海にかきもつきせし

、、○紙　埼玉　横田須磨子

こき薄き筆のいのち毛あらはして
紙のこゝろのふかくも有るかな

、、○霞　常陸　岡田萬子

筑波嶺も足尾の山も霞むなり
わが里ちかく春や來ぬらん

○竹裡鶯　神戸　足立ゑい子
はつ音とは思ひかけきやうくひすの聲にふしあるくれ竹のその

○山家初春　東京　碓井のぶ子
かすみたつ山のいほりのあさ風はなほさむけれと春は來ぬらし

○若菜　岡山　小山松枝子
初わかなこにみたれども打むれてあさる樂しさつとにかたらん

○梅　神戸　足立ゑい子
うめの花うつりてきよきかげの上をなはざりに行くはるの川水

、、、谷　梅　東京　美矢竹光子
春くれとゆきやのこれる谷のとにうくひすなきて梅そかをりぬ

○梅花にそへて　岡山　小山松枝子
梅の花咲にほへどもうくひすのこゑきかねまはわびしかりけり

○梅花何方　東京　土田八重子
うぐひすの歌ふ聲をばしるべにてねくらのうめの花をたつねむ

詞　友

○白梅花　越後　大石ます子

友を迎るあした殘んのつぎかけにかをりつめたきしら梅のはな

○都立春　横濱　鈴木まつ子

花といふみやこにけさはうら〳〵とかすみたなびき春や立らん

ゝゝゝ霞　播磨　横田春枝子

久方のくも井はるかにみゆるなりかすみたなびく春のあけぼの

○春の曙　兵庫　田淵ふじ子

ほの〳〵とかすみの奥に月消えて花にあけゆくやまの端のそら

○春風　日向　岸上はる子

うら〳〵と朝日てりそふ岡の上に吹くとしもなきはる風の吹く

○春望　東京　和田光子

こきいづる漁士のつり舟ほの見えてのどかに霞む春のうなばら

○雨中柳　岡山　小山松枝子

きのふけふふるとしもなき春さめに色こそまされにはの青やぎ

○春駒　宮城　大槻慶子

春かすみもえ立野べの若ぐさにこゝろひかれてこまもあそべり

○春祝　群馬　石井寛子

常盤なる松もみどりのいろそへて千とせの春をいはふのどけさ

○池邊月　三重　黒田代音子

かぐはしき風にみだるゝはちす葉のつゆにやどれる夏のよの月

ゝゝゝ霞　東京　武市はん子

おとづれし夜半の霞にあともなくさめてうれしきうき夢のとこ

○雪　東京　平塚白百合

降る雪にくろ髪山も名のみにて眞しろきすがたうつくしきかな

○雪　群馬　中島戸美子

昨日まで人目かれにし山さとのひと夜のうちにゆきぞつもれる

ゝ○雪の降る日よめる　薩摩　松原岑子

うき事もみ雪とゝもにつもれかし世に春かぜの吹かぬものかは

○旭旗映雪　北海道　牧君子

一夜明けてつもりし雪もひかりそふ月ごとの御旗風になびきて

○雪後月　陸前　末永喜嘉子

めではやす秋にもましてさやけきはゆきにみがける月のかげ哉

○松上殘雪　宮城　大槻初音子

千代こめて松の靜枝にあしたづのやどると見れば雪ぞのこれる

ゝゝゝ早梅薫風　北海道　牧淑子

春たてば長閑にわたるはるかぜにかをれる梅のなつかしきかな

ゝゝゝ新年　東京　碓井のぶ子

年たてば空はのどけく物きよくあらたまりぬるけさのこゝろよ

○新年松　磐城　木幡きよ子

嬉しさは色にも見ゆる姫こまつとし立つ今朝は千代のかずかも

○同　伊賀　菊山かれ子

千代八千代へにけん門の常盤木にたりほながらの注連飾りして

ゝゝゝ同　東京　碓井のぶ子

あらたまの年のみ園にしげりあふ松の根もとに千代ぞしめける

○春雪　大和　栗山たか子

梅が枝にえだうつりせるうぐひすの羽袖にかゝるはるのあは雪

○若水　伯耆　錦織幸子

うすれゆく星かげながら汲みあけてこゝろさやけき千代の若水

○同　東京　服部やゑ子

はつ日さすいすゞの川のみづくみて我が大神にさゝげてむかな

ゝゝゝ同　伯耆　錦織千代子

わか水にうつろふ星のかげすみてしづけき年のまつ見えにける

○同　京都　成田みさを子

くみあぐる年のはじめの若水にあけゆくそらのかげぞうつれる

○同　佐賀　山田えい子

わか水をかめにうつしていけにけりとしの立枝の梅のはつはな

○同　佐賀　陣内かつ子

汲みあげし初わか水にうれしくも梅のしづくのこぼれけるかな

○同

梅の花のさばなめくるこのやどにこゝろたのしくすむ人やたれ　東京　益田　春子

○同

世の涙のたかきに船のよせ寂れてみなとの外にたゞよふ身かも　土佐　廣江　子

ゝゝ鶴の聲

おほきみの御代萬歳といはふらん池のみぎはに田鶴のはつこゑ　東京　服部彌惠子

ゝゝゝ寄黄金祝

福壽草黄金のはなに咲きいでゝ千代もにほへりきみがよはひも　埼玉　横田　秋子

○戰死者の墓にまふでゝ

いさぎよく散りし譽れの君が名は　みよかをらん限り薫るなるらん　長野　毛利かつ子

○海邊にたちて

ほの〲と明けそめにたる海の面にうかひて見ゆる三保の松原　尾張　津金　糸子

俳句

地賞

雪消水

雪とけてこゝに小さき春の川　東京　片山はつ子

人賞

白梅

東風吹いて梅の白きが咲にけり　愛媛　首藤さと子

○智惠も賣る店もあれかし年の市　東京　渡邊　しん子

ゝゝゝ足らぬ乳に親も子もなく夜寒哉

ゝゝ孝したき頃は親なし玉子酒

ゝゝ隱家にかくれぬ梅の薫りかな

ゝゝゝ梅屋敷流石あるじの茶の手前　播磨　横田　春枝子

ゝゝゝ下手な繪師梅に鶯きつと書き

ゝゝゝ追羽子やふりのたもとの梅模様

ゝゝゝ如月の草と成けり福壽草

ゝゝゝ出代りや殘す言葉の花盛り　神戸　足立　ゑい子

ゝゝゝ櫛入れたやうに地につく柳かな

ゝゝゝ奈良の京蕎は花と成りにけり

ゝゝゝ佐保姫や藥家の軒の施行杖

ゝゝゝかゝる夜に人の訪へかし梅の月

ゝゝ藪入の來て春にする山家かな　神戸　足立　あさ子

○紅梅や草分けらしき冠木門

ゝゝ春といひ雨といふては遊びけり

○壺菫小さき神の遊び玉ふ　札幌　葛城　萩枝子

ゝゝゝ濱に出て海の初日を拜しけり　愛媛　首藤　さと子

ゝゝゝ初日の出宮居遙かに拜しけり

ゝゝゝ旅にして拜すなりけり初日の出

○摘草の女のむれや春の水　下總　隆　子

ゝゝゝ冬越せし金魚の桶や水温む

ゝゝゝ病癒へて髮梳く梅の日南かな

○紅梅に歌よむ若き女かな

○水仙や化粧の窓の立鏡

○帆柱のすれ合ふ音や鳴千鳥　岩代　岸野　常子

○一枚は膝の下なる歌留多かな　愛媛　岩崎　きよ子

ゝゝゝ買初めの曉を待ちたる文留多會

ゝゝゝ歌留多會障子に明けて鷄の聲

ゝゝゝ門松に一休禪師嘲けりぬ

ゝゝゝ青柳の戰ぎそめけり春の風　備前　谷山　千代子

○月の梅障子に映る墨繪哉

、、、鶯の聲に明け行く庵かな
○羽子板や美しき娘の枕元
○陽炎や繋ぎし駒も眠りたり
○戀猫や月斜めなる板廂
常陸 岡田萬子

、、、萬歳に狭うなりたる座敷かな
○遣羽子を反らさぬ姉と妹かな
○若水に汲み込む星の一つかな
、、、船にして初日に向ふ歸朝かな
、、、鶯の初音や朝の起き心地
、、、振袖を口に姉妹の手鞠かな
東京 江田延代子

○門松や古郷を西に三百里
○家内七人皆集まるや雨の宵
○琴箱の紐を解きけり春の雨
大阪 木村春江子

○戰死者の墓標目につく枯野かな
、、、春の野やふみにじられし路のとう
、、、うつかりと來て道も無し雪見哉
越後 岩本よし子

、、、種蒔や三吉野人の檜木笠
、、、賣れ殘る白魚消へん宵の雨
、、、朝駐して囀聞くや山の宿
○蝶々や椽に忘れし絵具皿
伊豫 八木富子

○梅が香や詩人歌人を兩隣
、、、菜の花や酒つけてくる小荷駄馬
、、、鷄鳴くや雨に暮れゆく桃の里
下總 川奈部琴柱

、、、寒月や村はづれなる石地藏
、、、寒月や寺の裏路通りけり
、、、朧月稚子を抱いて妻一人
備前 松本もと子

、、、春雨や軒をつたうて琴の音
○梅が香や痩せたる枝に月明り
、、、青柳結びもとけて春の風
横須賀 渡邊雪子

定價

一冊	前金貳拾錢
三冊	前金五拾七錢
六冊	前金壹圓拾錢
拾貳冊	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁 三十二行	金八圓
一頁 六十四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割增の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便局へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十年一月廿八日印刷
明治四十年二月一日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 株式會社國光社
右代表者 東京市京橋區築地二丁目二十番地 橋本忠次郎
印刷人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 河本龜之助

發行所 株式會社 國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

中學校用教科書

日高秩父先生書
中等習字帖 全三冊（文部省檢定濟）
正價 上、中、下各拾三錢　送料 貳錢

國光社編纂
中等國語讀本 全十冊（同）
正價 各貳拾貳錢　送料 各六錢

內堀維文先生著　國光社編纂
中等漢文讀本 全五冊（同）
正價 一、二、貳拾五錢 三、四、參拾錢 五、四拾錢　送料 各六錢

大林弘一郎先生著
中等國文學史 全（同）
正價 六拾錢　送料 八錢

大宮兵馬先生著
中等日本文典 全（同）
正價 五拾五錢　送料 八錢

小林萬吾先生編
中等習畫帖 全八冊（同）
正價 一、二、各貳拾錢 三、四、各貳拾貳錢 五、六、各貳拾四錢 七、八、各參拾錢　送料 一册 貳錢

松本雅邦先生編
中等科習畫帖 全八冊（同）
正價 一、二、各拾七錢 三、四、各拾八錢 五、六、各拾九錢 七、貳拾錢 八、貳拾貳錢　送料 一册 貳錢

松本敬之、高橋正熊兩先生共著
法制教科書 全
經濟教科書 全
（同）正價 各六拾錢　送料 各六錢

宮森麻太郎先生著
イージー、レッスンズ、イン、グランマー、アンド、コンポジション 全（同）
正價 五拾五錢　送料 六錢

同
モーア、レッスンズ、イン、グランマー、アンド、コンポジシヨン 全二冊（同）
正價 一、五拾五錢 二、六拾錢　送料 各六錢

東京美術學校長　正木直彦先生序文
同　校教授　島田佳矣
同校卒業生　野口駿尾　兩先生共著

女子技藝　編物模様圖按

全五冊　石版極彩色　大和綴美本

正價
●松の巻　金四拾錢　櫻の巻　▲藤巻各金　五拾錢
●菊の巻　●梅の巻　各金五拾五錢　送料各金四錢

本書は毛糸、絹糸、木綿糸等にて書模様を編み或は刺繍するに必要なる圖案即ち下繪を集めたるものなり　從來此種の書籍歐米各國にて出版されしものなれども其意匠圖案の様式風味は直ちに之を我が工藝に適應する事能はざるのみならず價格の點に於て不廉にして一般に普及すること能はず●本書は著者が專門獨特の意匠を以て多年歐米の圖案を研究參考し前項の欠點を補ひしものなり●編物は貴賤都鄙の別なく本邦女子適當の手藝にして漸次發展しつゝありて將來大に海外輸出の望ありと雖も從來の意匠圖案は幼稚拙劣を免かれず

●本書著作の順序は片假名、平假名、歐文字等の簡易なるものに始まり横模様、連續模様、角模様、圓模様、隅模様、單獨模様等の順序を經て漸次高尚優美なる繪畫的下繪に進み花卉、虫、魚、風景、人物を蒐集したり●本書は獨り斯道修學者の好敎科書なるのみならず技藝家の好參考書にして亦た麥稈細工織物等各種技藝の參考書たるの價値を有す

共立女子職業學校編物主任教授　金原繁尾子女史編

編物教科書

全一册　近刊　正價及送料未定

同校造花主任教授　金子支江女子史編

造花教科書

全一册　近刊　正價及送料未定

前共立女子職業學校刺繡主任教授
學習院女學部教授　木邨仲子女史編

刺繡教科書

全一册　近刊　正價未定

女子職業に關する問題は世間既に定評あり上に列記する編物、造花、刺繡の如きは女子職業中の最も適應なるものにして復た現在及び將來に於て最も必要多きものたるは論を待たず從來此等の技藝に關する書籍少なからずと雖も未だ教科書として完全なるもなきは實に遺憾なき能はず此に於て本社は前記專門教授に完全なる教科書の編纂を請ひ既に脫稿したれば不日之を世に公にせんとす乞ふ發刊の曉之を繙いて其の必須缺ぐべからざる教科書たるの價値を知られよ

東京高等師範學校教授 文學士 松本孝次郎著

家庭に於ける兒童教育

總クロース 菊版二百頁 定價五拾五錢 郵稅八錢

本書は**兒童教育專攻家**として教育界に名聲隱なき著者が多年研究せられたる**學說**と**實驗**とに基き**實地家庭**に行ひ得らるゝやう極めて**平易且切實**に談話體を以て**兒童教育法**を說述せられたる者にして世にありふれたる家庭教育書類と全く其の**選**を**異**にせり而も何人にも解り易く容易に**育兒**の**妙訣**を了得するを得べしされば世の父母たる人は子女將來の爲**是非熟讀**せざる可らざるものなり

此書は亦**兒童教育**の任にある**學校教師等**には必缺く可らざる**良參考書**なり

發行所 東京市京橋區築地二丁目 電話新橋八八、二六九三 株式會社 **國光社**
關西大賣捌 大阪市南本町 **積文社**

女鑑

明治四十年二月一日發行
毎月一回一日發行　第拾七年第貳號
明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可



東京築地株式會社國光社印刷